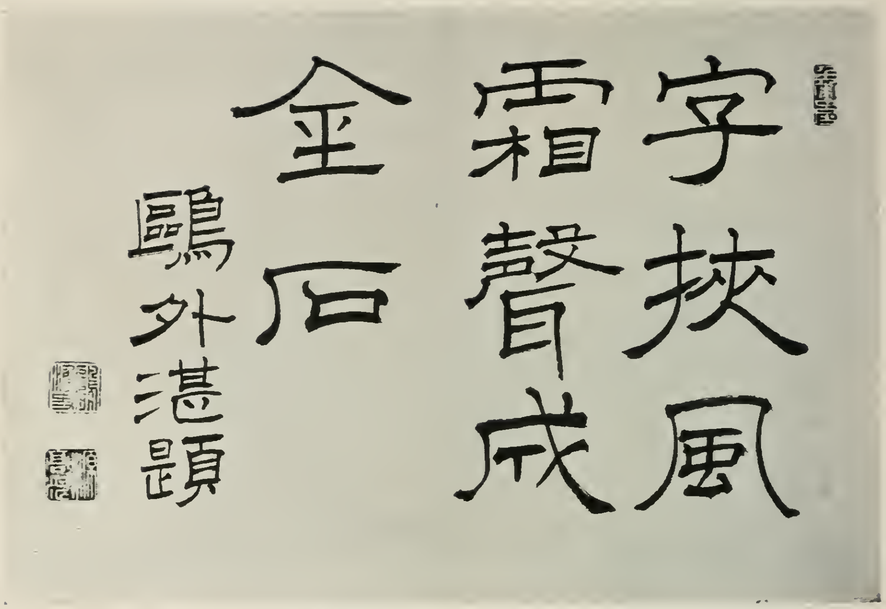
森潤三郎 著

鷗外 森林太郎

昭和書房刊



明治三十二年（三十八歳）小倉赴任の際博文館大橋乙羽氏の撮影にかゝる



大正二年夏の揮毫

はしがき

兄が逝去して間も無く、わたくしは傳記の材料となるものを蒐集して置きたいと考へて、ノオト數冊を年表的に分けて、氣の付き次第書き込むやうにして居つた。最初に明星の記念號の爲に談話をしたが、それから諸家の書かれた傳記が追追現はれて來て、それを閲して思ひ出した事もあり、初て事情の分つた事もあるが、又わたくしが見たり聞いたりした事で、誤り傳へられた點もあり、年代が前後した所も見受けられる。古い時を知つてゐる親戚の老人も次第に凋落し、姉やわたくしが古顏になつて來た。今の内に知つてゐる事を書き付けて置かねば、遂には誤に謬を重ねて傳へられるやうになるかも知れぬと、これまで部分的に話したり、概略を書いても見たが、今年は逝去後十三週忌に當り、昭和書房から詳しい傳記を書いて貰ひたいといふ請求があつた。わたくしには到底兄の全貌を傳へる力は無いが、幼少から最も可愛がられて世話になつた恩があるから、後世の大手筆家の爲に正確な資料を供給するつもりで筆を執つて見た。しかし著作の中に全集編纂當時から搜索して、猶未だ知ることの出來ないものもあり、記述の體裁なども意に滿たぬが、一應これだけを纏めて發表する事とした。わたくしは今後も之の調査を怠らぬ覺悟であるから、若し幸ひに本書が版を重ねる場合には、增補訂正を加へて完成の域に達せしめたいと思ふ。大方の諸賢もわたくしの微意を諒察せられ、此書に洩れ或は不明としたものを教示せられんことを希望して置く。

昭和九年甲戌初夏

辱弟　森　潤　三　郎　識

凡例

一、本書の題名に鷗外の二字を入れるのは故人の意志であるまいと思つて、森林太郎傳記稾又は傳記資料とでもしたかつたが、發行所の希望によりて鷗外森林太郎傳とした。

一、本書は正確な資料を供給するのが目的であるから、屢書き傳へ言ひ傳へられた事でも、的確な證跡の無いものは省略した。

一、兄の生涯を八期に分ける人があり、七期に分ける人があるが、到底土地を分割するやうに正しい區劃をする事は出來ぬ。さればとて始より終まで段落無しに書き流すも面白くないから、極めて分り易い方法に從つて置いた。

一、記述法は最初に一年間の月順に文學上の作品を列擧し、次に醫學衞生、次に上演、最後に官職敍位敍勳を記す事にした。

一、人名には現存の人も故人も身分を論せず一樣に氏の字を附け、二三特殊の人だけ翁と稱した。

一、傳記といふものは兎角無味乾燥になり易いから、知友の書翰などを出來るだけ引用して趣味のあるやうにし、一つにはその筆蹟を知る助けにもしようと思つたが、適當な文面が無かつたり、寫眞が不鮮明であつたりして希望通りに出來なかつた。

一、題號の文字は兄の自筆から集字したが、傳の一字が釣合ひの取れるものが無いので、已むを得ず省いた。本文の柱と相違の點は、讀者の諒察を願つて置く。

目錄

1 出生より上京まで……一
文久二年出生から明治五年上京するまでを記す。
2 大學入學より陸軍出身まで……五
明治六年大學豫科入學より同十六年陸軍に出仕して留學するまでを記す。
3 留學時代……九
明治十七年留學を命ぜられ同二十一年歸朝するまでを記す。
4 文壇に乘出した時代……一三
明治二十二年から讀賣新聞、國民之友等に寄稾した事を記す。
5 文壇活躍時代の上（花園町時代）……一六
明治二十二年の秋下谷花園町に住居して柵草紙を發行し、うたかたの記、舞姫等を發表した頃の事を記す。

6　文壇活躍時代の中（太田の原時代）……三五
明治二十三年十月本郷千駄木町に移り、沒理想に關する論戰を開いた頃の事を記す。
7　文壇活躍時代の下（觀潮樓時代）……四〇
明治二十五年團子坂上に移轉してから同二十八年日淸役に從軍歸朝するまでを記す。
8　目不醉草時代（觀潮樓時代の二）……五四
明治二十九年目不醉草を創刊してから小倉に轉任するまでを記す。
9　沈　默　時　代（觀潮樓時代の三）……六五
明治三十二年小倉轉任後所謂沈默の時代を記す。
10　藝文及び萬年艸時代（觀潮樓時代の四）……七六
明治三十五年東京に歸つた時から日露役前までを記す。
11　日露戰役出征（觀潮樓時代の五）……八六
明治三十七年出征より同三十八年末までを記す。
12　活躍準備時代（觀潮樓時代の六）……一〇二
明治三十九年歸京より同四十一年末までを記す。歌會などを開く一方に次年以來活躍の準備をした。

13 文壇再活躍時代（觀潮樓時代の七）……………………一一三
明治四十二年再び文壇に活躍を始めてから同四十四年までを記す。
14 歴史小説の製作（觀潮樓時代の八）……………………一二八
明治四十五年から大正三年まで、この間歴史小説を書き始めた事を記す。
15 考證學者傳記の研究（觀潮樓時代の九）……………………一四二
大正四年より同六年まで、考證學者の傳記闡明に專心する事及び陸軍を引退し又宮內省に入る事を記す。
16 帝國博物館總長兼圖書頭（觀潮樓時代の拾）……………………一五六
大正七年より同十一年薨去までを記す。
17 餘　　録……………………一六七
薨去後の出版物及び各種記念の催し物に就いて記す。
附　　錄……………………一九九
森鷗外君の文章に就いて　井上通泰氏談
擱筆の辭……………………二〇三

鷗外森林太郎傳

森潤三郎著

一、出生より上京まで

森林太郎諱は高湛、源姓、鷗外漁史の號を以て最もよく知られてゐるが、學生時代には參木舍、五木生、牽舟居士、轉丸堂主人といひ、花園町時代には顯微齋主人、侗然居士、忍岡樵客、湖上逸氏、臺麓學人、小林紺珠、紺珠居士、鐘禮舍と號し、團子坂以後は觀潮樓主人、千朶山房主人、隱流、妄人、夢見る人、腰辨當、歸休庵等を用ゐたが、中には一時の假號に過ぎぬものが多い。その鷗外は明治二十二年、即ち留學から歸つて後に用ゐ初めた。

兄は文久二年正月十九日石見國鹿足郡津和野町字横堀に生れた。森家は慶安年間の玄篤から明かに知られてゐ

るが、それから天保年中に歿した周庵まで十一代、皆藩の典醫であつた。津和野藩の領地は四萬三千石で、龜井家の第二世豐前守政矩侯が元和三年八月因幡鹿野城から前領主坂崎出羽守成正が罪を獲て除封された跡へ移られそれより王政維新の際の第十二世隱岐守茲監侯までその治下に隸し、茲監侯の後は伯爵茲明、次が現代の茲常伯である。津和野は四周山で圍まれた櫃鉢の底のやうな地で、山陽線の小郡驛から分岐し、山口を經て篠目、德佐の二峠を越えて入るので、大正の末年汽車が開道するまでは、實に不便な地であつた。

第十二代綱淨本姓佐佐田氏、周庵の養子となり、玄仙と稱し、後に白仙と改め、養父の後を襲ふて奥附を拜した。資性剛直にして、時の典醫堀杏庵、平田玄叔、加藤玄順等と大に脈を論じた事があつて、當時の辯難書類が殘つて居り、その一部の「與三學醫書」は明治二十四年二月九日衞生療病志第十四號に發表した。萬延元年四月藩主茲監侯の參覲交代に隨つて江戸に來り、翌文久元年七月又從つて歸國する筈であつたが、病の爲に跡に殘り、十月少康を得て江戸を發し、十一月七日近江國甲賀郡上山に至つた夜、脚氣衝心を以て歿し、遺骸は同所淨土宗常明寺に葬り、從者が遺髮遺物を携へて歸國した。是より先周防三田尻から醫學修業に來てゐた吉次泰造が、白仙の眼識によつて一女峰子の婿となり、名を靜泰といひ、後は和蘭醫學を修め、維新後靜男と改めた。白仙の歿した翌文久二年男子が生れたのが卽林太郎である。慶應三年十月に次男篤次郞、明治四年一月に長女喜美子、同十二年四月三男のわたくしが生れた。

兄は慶應二年五歳の春から親戚で藩の儒者米原綱善に就いて學問を始めた。當時の學問といへは漢學が主であつたから、先づ大學より初めて中庸、論語、孟子の素讀を受ける事となつた。父は藩命で蘭醫方を學ぶために、

江戸の松本良順、佐倉の佐藤尚中など斯道の大家に隨つて、修業に餘念が無かつたから、復習の監督は母の任となつた。祖父は人と生れて學問が無ければ朽木糞墻にも劣るといふて門人を戒しめても、女子は家事裁縫さへ出來れば、文字などは知るに及ばないといふたが、母は竊に祖母木嶋氏淸子に乞ふて伊呂波から始めて、兄が米原氏に通ふ頃には假名付きの四書が讀めるやうになつたから、それを再三熟讀暗誦して復習を監督するので、兄が寢てから遲くまで翌日の分を勉强する苦心は並大抵では無かつたと、後日屢わたくし共に話して聞かした。宅から米原氏の宅までは十餘町あつて、毎朝六時半（〇今の午前七時前）に着くやうに出かけるのであるが、犬が恐いのと、途中他の兒童に惡戲されるのを畏れるので、祖母が途中まで送つて行き、歸りは米原氏の母に三四町送つて貰つた。

翌慶應三年から毎月四九の日に藩校養老館に入り、教授山口鼓溪、堀松陰、村田義實等諸先生の前で復讀をやつた。春秋素讀試驗に三年優等の成績を續けて、四書白文一部を賞與せられた事もある。書は同藩の山田語石といふ先生に學んだ。

時勢は進んで、漢學萬能の時代は去り、洋學勃興の機運に向つて來たから、明治三年より父に就いて和蘭文典を學んだ。兄の書いた「サフラン」の中に

> 父は所謂蘭醫である。オランダ語を敎へて遣らうと云はれるので、早くから少しづゝ習つた。文典と云ふものを讀む。それに前後編があつて、前編は語を說明し、後編は文を說明してゐる。

と書いてゐる。母の話には、父の許に諸方から書生が蘭學を敎はりに來るが、文典がむつかしいために、學生仲間には「ワカランマチック」「シレンタキス」といふ詞が流行つたさうである。卽英語で云へば Grammatic Syntax

である。父は醫療が專門で、その方が多忙であるから、兄は幾もなく藩の蘭學家室良悅に從ひ學んだ。五年父に隨つて上京し、本所小梅村龜井家下邸に居り、次で父は同所曳舟通りに一軒の家を求め、國から祖母、母、次兄姉を招き寄せ、龜井家の用事をすると共に、一般の診療にも應じた。兄は醫學を研究するは獨逸語を知らねばならぬとて、當時本鄕壹岐殿坂にあつた進文學社に入ることゝ定めたが、向島からでは通學に不便なため、神田小川町の西周氏邸に置いて貰つて、其處から通學する事となつた。西氏の先は遠江相良の名族、その裔故あつて醫となり、肥後佐敷に移り、松還に至つて肥前長崎に遷る。その子時習瘍科に長じて大阪に住し、元祿十三年第四世龜井隱岐守玆親に聘せられて津和野に來つた。時習より時淸、時榮を經て時雍に至り、內科を兼ねて御匙となつた。時雍森高亮の二男を養子として時義といひ、時義の子が周である。高亮の長子立本早く死し、三男秀庵を嗣としたが、故ありて周防山口に逃げた爲に、森家は佐佐田氏の男綱淨が高亮の後を承ける事となり、これがわたくし共の祖父で、西家と森家とは親戚の間柄である。周は安政元年藩を脫して江戶に留り、蕃書調所に入り、文久二年六月幕府留學生と共に和蘭に赴き、政事學諸科をレイデン大學教授フイツセリングに受け、慶應元年十月業を卒へ、佛國船に搭じて歸朝の途に就き、十二月橫濱に着して江戶に入り、二年正月開成所教授手傳となり、三月十三日擢でられて幕府直參に列し、開成所教授となり、祿百俵役扶持二十口を賜ひ、次で目付に進み、大政奉還後は沼津に赴き、兵學校頭取となり、明治三年九月徵されて兵部省出仕兼學制取調御用掛を命ぜられた。兄の寄寓したのはその頃と思はれる。

二、大學入學より陸軍出身まで

明治六年下谷和泉橋舊藤堂邸に在つた東京醫學校豫科に入學せんとしたが、年齡不足の爲に二歳を增して萬延元年生れとして願書を出し、首尾能く入學することが出來た。

わたくしは此處に醫學校の沿革を挿敍しようと思ふ。この稿に筆を執るに先立ち、兄の入學した醫學校の事を調べようと思つて、最近の帝國大學一覽を見たが明治以後の大略だけは分つたが、一層溯つた起原を調べる材料が無かつた。然るに頃日圖らず澁谷の露店で明治十年の東京大學醫學部一覽を得て、その起原を詳にすることが出來た。

安政五年德川幕府の蘭法醫官伊東玄朴が同僚戸塚靜海等に謀て幕府に請ひ、新に一舍を神田お玉ヶ池に設立して種痘館と名けた。當時西洋醫術を以て江戸に門戸を樹る者八拾餘名、各金若干を醵して五百八拾餘兩を得て其資に供し、勘定奉行川路左衞門尉聖謨亦其所有地を貸してこの擧を助けた。この年火災に罹り、翌六年講堂寮舍を下谷和泉橋通りに建て、翌萬延元年幕府金若干を賜ふて費用を助け種痘所と改稱した。文久元年幕府種痘所を改めて西洋醫學所とし、盡く費用を給する事となつた。その西洋を冠したのは、從前からある漢法醫官多紀氏の醫學館と區別する爲である。文久三年二月西洋の二字を刪つて單に醫學所と稱した。明治元年王政維新の際朝廷

醫學所を鎭將府の所轄とし、假りに軍陣病院を横濱に設け、英醫 Willis を聘して兵士の創痍を治療せしめたが、九月之を下谷舊藤堂邸に移して大病院と稱し、この時醫學所病院とも軍務官に屬し、後東京府の所轄となつた。同二年五月官大學校を興すに及び、大學校に屬して醫學校兼病院と稱し、七月大學校を大學と改稱、尋で本校を大學東校と改め、同三年獨逸より醫學教師を聘せんことを請ひて許され、同四年醫官 Dr. Müller, Dr. Hoffmann の來朝せしを教頭とし、大に學則を改革し學科の課程を定め、更に豫科本科の二科を設けた。この年大學廢せられて文部省を設立するに及び、八月大學東校を單に東校と改め、同五年三月十三日明治天皇の親臨を仰ぎ、八月文部省に於て新に學制を定め學區の制を布くに際し、第一大區醫學校と改稱、同七年五月更に東京醫學校と改めた　十二月校舍傾頽により本郷元富士町舊加州邸內に新築の事を請ひ、八年七月建築の經營に着手、九年十二月新築略その功を竣るによりて本校を移轉し、同十年四月十二日東京醫學校と東京開成學校とを合せて東京大學とし、醫學校を東京大學醫學部とした。同十二年醫學部新校舍建築全部竣功し、明治天皇の親臨を仰いで開校式を擧行し同月學士號を定めた。この十年の一覽生徒姓名に兄は醫學三等本科生三十名の四番目に居り、陸軍の同僚谷口謙氏は二番、小池正直氏は十番、江口襄氏は十三番、賀古鶴所氏は十四番に居られた。

兄は九年校舍が本郷に移ると同時に附屬の寄宿に入り、十年本科に進み、十三年頃寄宿舍を出て龍岡町の上條といふ下宿に移つた。同十四年の二月卒業試驗の最中に下宿から出火し、ノオトの大部分を燒いたが他に異狀も無く、七月四日表向き二十歲、大學始まつての弱年で卒業して醫學士となつた。

父は是より先南足立郡の郡醫を囑託せられて、千住町の郡役所近くの施療所に月何回か來診したが、同十三年

に至つて向嶋を引拂ひ、同郡千住町北組に轉居し、此處に橘井堂醫院を開き、代診二人藥局生一人を置き、中々盛に行はれた。父は醫術には頗る熱心で、從つてその診察は精妙を極め、父がこの患者はもう一日は持たぬといへば、必ず二十四時間内には死んでしまふといふわけで、病家には深く信頼された。兄は卒業後は父の許で時々診療に從つた事は、その作「カズイスチカ」で知られる。この作には下顎脫臼、破傷風、姙娠等特殊の患者を取扱つたことが書いてある。



大學卒業當時の兄（明治十四年）

卒業した年の九月十七日讀賣新聞に「河津金泉君に質す」と題した文を寄せた。河津金泉は饗庭篁村氏で、八月四日「河津の訴」が始めて寄書に出で、七日淺草浣華翁の「河津金泉大人に呈す」、十二日京橋耳學小僧の「かへるの異稱」が出たのに對して書いたもので、新聞に出た最初のものであらうと思はれる。今迄諸家の鷗外論に引用される。「ヰタ・セクスアリス」は、兄の幼年期から壯年までの性的方面からの生活を書いたものであつて、それに卒業の年の冬自由新聞の詞藻欄を擔當してゐる三輪崎霽波の勸告で、新聞二段ばかりのものを書いたとある。霽波は實は宮崎宣政氏號晴瀾の事である。わたくしは東京帝國大學法學部の明治新聞雜誌文庫に赴いて、宮武外骨翁に請ふて、自由新聞を見せて貰つた處、同新聞には

一、自由新聞明治十五年六月創刊、同十六年九月第三百四十五號廢刊。

二、自由新聞明治二十三年十月二十日創刊、同二十四年三月第百三十號にて「自由」と改題。

三、自由明治二十四年四月より、同二十六年六月第六百號にて「自由新聞」と改題。

四、自由新聞明治二十六年七月より、同二十九年三月第千三百十四號にて廢刊。

とがあり、一と二とを借覽細檢したが、兄の書いたものは見出されなかつた。讀賣新聞の方は帝國圖書館の分を十五年十六年に亘つて調べたが、他には何にもなかつた。同二十三年六月二十三、二十四の兩日國民新聞に載つた「肖像に添へて國民新聞に寄する書」に、「八年ばかり前の事なりしが、饗庭篁村君日就社より書を寄せて投書を求められぬ、我文の新聞紙に出でしはこれより始まる」と書いたのも、十四年九月十七日の文をいふたのであるらしい。

同年十二月十六日陸軍軍醫副に任じ「東京陸軍病院課僚被仰付候事」といふ辭令を貰つたのが、陸軍に出身の初めである。軍醫副は後の二等軍醫卽中尉相當官で、陸軍病院は後の衞戍病院である。

同十五年二月七日第一軍管區徵兵副醫官を仰付けられ、十七日從七位に敍せられ、五月十一日陸軍病院課僚を免ぜられ、陸軍軍醫本部課僚となり、十二日同部庶務課課僚を仰付けられた。軍醫本部は後の陸軍省醫務局である。當時の本部長は軍醫總監林紀氏で、九月から維新前父が從學した松本良順、後の男爵松本順氏が第三代の本部長となつた。次長は軍醫監橋本綱常氏であつた。此處で普魯西國陸軍衞生制度取調を命ぜられ、プラアゲルの陸軍衞生制度書を基礎として醫政全書稿本十二卷を著述し、翌十六年三月官に納めた。七月二十六日東部檢閱監

軍部長屬員を仰付けられ、監軍部長は三好重臣中將か黑川通軌中將かの何れかで、越後の方まで往つたやうである。

同十六年五月四日軍醫の名稱を改められて陸軍二等軍醫となり、九月十三日一等給を下賜せられた。

同十七年三月東洋學藝雜誌雜誌第四十號に「盜俠行」(譯獨逸稗史)を出し、後美奈和集に「於母影」を入る時その中に收めた。

三、留學時代

同十七年六月七日陸軍衛生制度調査及び軍陣衛生學研究のため獨逸國醫學仰付けられ、十日本職(軍醫本部課僚)を免ぜられ、八月二十三日佛蘭西船で横濱を出帆し、十月十二日伯林に到着したが、その前に軍醫本部次長橋本軍醫監が、陸軍卿大山巖中將の歐洲巡遊に隨行して同所に居り、制度の方は谷口謙に調査させるから、足下は衛生學を專攻せよと命ぜられ、その結果ライプチヒ大學に入り、Hoffmann 教授に就くことゝなつた。

同十八年五月二十七日陸軍一等軍醫に任じ、七月二十五日正七位に敍せられた。十月軍醫講習會に參加するためにドレスデンに赴いた。此講習會の主宰者 Wilhelm Roth は當時英國の Parks と並んで軍陣衛生學の泰斗と仰がれた人である。

同十九年三月ミュンヘンに赴き、五月ミュンヘン大學に入り、Max von Pettenkofer 教授の研究室で研究し、翌年までに「ビイルの利尿作用に就いて」「Agrostemma githago の解毒に就いて」の二業績を作成し、同時に「日本兵士の食餌に就いて」の論文を草し、皆 Archiv für Hygiene に掲載された。

同二十年四月伯林大學に轉じ、Robert Koch 教授の下にて細菌學に關する研究に從つた。その間八月二十五日


陸軍二等軍醫時代の兄（留學前）

には「御用有之墺國維也納府へ被差遣」、十月七日には「獨逸國カルルスルーへ府開設の赤十字社締盟國第四回會議の參會員石黑軍醫監に隨行被仰付」の命があり、それ〳〵勤を果した。

同二十一年二月伯林大學に於ける研究の結果は「伯林市水道に於ける病的細菌に就いて」と題し、Zeitschrift für Hygiene 第四卷に發表した。又 Virchow 氏に託した「日本住家の人種學的衛生學的研究」といふ論文は、五月になつて Verhandlungen der Berliner Anthropologischen Gesellschaft に載せられた。伯林に居る間に獨人 Naumann の日本風俗に關する記事の誤謬を指摘し、又日本の傳染病豫防法を誤り傳へられたのを辯護したのは、何れも新聞に掲載され、小池正直氏の鶏林醫事を獨逸譯して和蘭レエデンの國際民學會雜誌に載せたりした。かくて研究が終つたから、三月十一日から七月二日まで普魯西近衞軍團歩兵第二聯隊第一

大隊に入つて隊附勤務の實際體驗をやつた。三月二十三日附の「歸朝被仰付」の辭令が到着したので、七月三日伯林を發し、石黑軍醫監に隨行して歸國の途に就き、九月八日橫濱に着して直に東京に入り、即日陸軍軍醫學舍教官に補せられ、十二日偕行社に衞生部將校を集めて滯歐所見を演說し、十一月二十二日陸軍大學校教官に兼補し、十二月二十八日陸軍軍醫學舍が軍醫學校と改稱せられたので、改めて陸軍軍醫學校教官兼陸軍大學校教官衞生會議事務官に補せられた。同月十三日自費を以て「非日本食論將失其根據」と題する一冊子を刊行し、又軍醫學會雜誌第二十四號の附錄に歸朝直前の隊附勤務を漢文で書いた「隊務日記」を發表した。又十九日の讀賣新聞に「マツケンヂーの解嘲を讀む」を載せた。

留學中の生活と思想の動向は、後に發表した「妄想」と題する一篇で推知せられ、諸家の引用する處となつてゐる。年月は今判然せぬが、ザクセンの地學會の請に應じて日本家屋論を演じたのは、日本人が獨逸に於て獨逸語で公開演說をした嚆矢ださうである。

歐洲滯在中此方からは兄弟三人が手紙を送り、兄はそれを下宿の壁に貼付けて樂んでゐたさうであるが、後に帳簿に貼つて持歸つたのが數冊あつた。兄からはまだ繪葉書の無い時分であるから、クリスマスカアドの美しいのを送つてくれた。

明治二十一年四月姉喜美子が小金井良精に嫁した。

四、文壇に乘出した時代

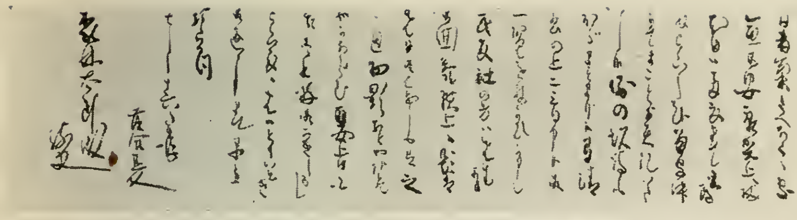
同二十二年一月三日讀賣新聞に Rudolph von Gottschall の「小說論」を譯載すると同時に、西班牙 Don Pedro Calderon の "El Alcalde Salamea" を「音調高洋箏一曲（しらべはたかしギタルラのひとふし）」と題して譯出し、五、六、九、十一、十五、十七、二十、二十四日に分載後一たび稿を斷つた。その理由は二十九日に「洋箏斷絃并餘音」と題して載せた文の斷絃で知られるが、山田美妙齋、濛怪子のこれに關する投書があり、更に舊題言の下に「一名洋箏續絃」と附記して二月二日、七日、十四日に再掲されて完結した。再掲の運びがついた時に、𧰼庭篁村氏が次の如き文を書いた。

鷗外竹二の氣儘者、何か心に協はぬ事があつたと見え、高い調子は耳に入らぬ日本人には、ギタルラの妙曲は聞かせられぬ、已あ否だとだゝを捏ねて、短氣にも斧を揮つて絃を絶ちたり。篁村此に於て大きに弱り、美妙齋、濛怪子の仲裁を機として、どうも困るね、此樣な評判の宜いものを途中で止めてはと、ぶつぶつ云ひながら、漸やく斷れたる絲を繋ぎ、二人を和めて、再び妙音を奏する事となしたり。御客樣方に願ひ奉つる、耳馴れぬ樂器とてよく聞きもせずに座をお立ちなさらず、神妙にお聽取の上、成程高尙な妙曲と御高評を賜はらん事を。でないと、もう變つた面白い音色を聽かせませんよ。

これを美奈和集に收める時、題號を「調高矣洋絃一曲」と改め、緒言も少し違つてゐる。斷絃并に餘音の中、

餘音〇作者の履歴のみを記すのみを「ザラメヤ村長の作者」と題して、かげ草の「觀潮樓偶記」に再錄した。「小說論」はしがらみ草紙第二十八號山房論文其九附錄一に「醫にして小說を論ず」と改め、文章も大分直してあるが、月艸に收める時猶その前後を削り改め、題も「醫學の說より出でたる小說論」とした。同月二十二日佛國Alphonse Daudetの「緑葉の歎」を次兄と同譯で出し、美奈和集にはの字を省いて「緑葉歎」としてある。三月五日讀賣新聞に次兄と同譯にて獨國 Hoffmann の「玉を懷いて罪あり」の第一、二回を出し、以下十四日第三回、三十一日第四回、四月十二日第五回、五月十九日第六回、六月一日第七回、五日第八回、十三日第九回、十八日第十回、二十七日第十一回、七月三日第十二回、十日第十三回、二十一日第十四回で完結した。三月三十一日の同紙上に中村座新狂言仇名艸由縁八房を次兄と合評した。同月十八日少年園第一卷第十號に佛國 Daudet の「戰僧」を譯載し、二十四年六月しがらみ草紙第二十一號に寄稿として再揭された。

四月二日國民之友第四卷第四十六號投書欄の「獨逸文學の隆運」が同誌へ寄稿の始で、五月十一日の第五十號特別寄書欄に「文學と自然を讀む」、六月一日の第五十二號に「再び自然崇拜者に質す」、二十二日第五十四號投書欄に「掘出し物を讀む」が出で、八月二日第五卷第五十八號夏期附錄に S・S・S・の名を以て譯詩「於母影」が載せられた。是より先市村瓚次郎、井上通泰、落合直文三氏に次兄・姉が加はつて、時々會合して文學を論じたり、詩歌を作つたりして、その會合を新聲社と名付けた。その作品を集め、新聲社の頭字を取つて迻つたのである。その收むる所十七篇の內、小金井に嫁した姉の語る處によれば、「いねよかし」「笛の音」は落合氏、「花薔薇」「わかれかね」が井上氏、「鬼界ケ島」が市村氏、「わが星」「あしの曲」「あるとき」が姉、その他の九篇は兄が譯



落合直文氏書簡

したもので、その總題を「於母影」とつけたのは、萬葉集の「陸奥のまののかや原とほけどもおもかげにして見ゆとふものを」、蘇東坡の詩「岷峨天一方雲月在我側」から採つたのである。その時の落合氏の書簡一通がわたくしの所藏する文壇名家書簡集にある。

暑氣たへがたく候處愈御安康賀上候扨本日は兩度まで御尋ね被下候赴留守中にてまことに失禮いたし候例の譯詩もほゞまとまり候間清書の上二三日中に御一覽をねがひ可申候民友社の方は先生より御回答願上候題は先日御はなしも有之候通面影なとやをたやかならむ要旨も乍御手數御かきしるし被下度候先はとりいそぎ御返事まで早々頓首

七月十六日午後　　落合直文

森林太郎殿

侍史

とある。世間ではS.S.S.を一人の匿名と思ひ、和漢英獨を自在に驅使し、或は原作の意義に從ひ、或は意義及び字句に從ひ、或は意義及び韻法に從ひ、或は意義字句及び平仄韻法に從つて譯してあるのを驚異し、その作者が一時問題となつた。

九月十二日第六十二號特別寄書欄に「情詩の限界を論じて猥褻の定義に及ぶ」を掲げたが、誤て前後顚倒して植字し、同誌記者が第六十三號に

前後顚倒ノ廉アルヲ以テ更ニ其全文ヲ掲ゲテ正誤ニ換ユ讀者再讀ノ勞ヲ吝ム勿レ

と附記して再掲した。これは二十六年三月二十五日しがらみ草紙第四十二號鷗外文話其二十に無題で收め、後かげ艸の觀潮樓偶記に「猥褻」と題して入れた。十月二十二日第六十六號には「拏破崙が輿中の書」が出た。これは二十六年二月二十五日しがらみ草紙第四十一號鷗外文話其十九に入り、後かげ艸の觀潮樓偶記に入つた。

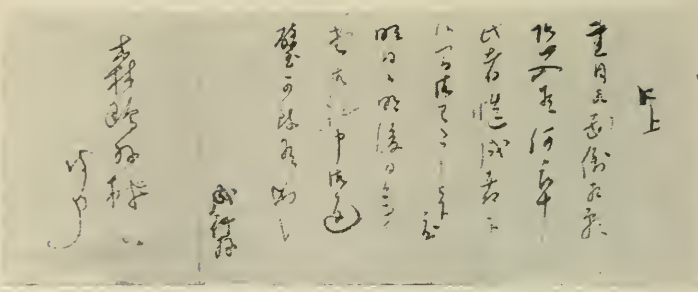
六月鹿足郡私立教育會雜誌第三號に「强記ハ人ニ誇ルベキノ性ニ非ズ」を載せ、八月國民之友「於母影」の出た號の藻鹽草欄に侗然居士の名を以て轉載し、しがらみ草紙第四十二號鷗外文話其二十一に「記憶」と改め、後かげ艸に入つた。六月十八日少年園第一卷第十六號に米國 Washington Irving 作 Sketch Book の一節を譯した「新世界の浦島」が出た。美奈和集に入れる時、「新浦島」と改めた。

この年春の末か夏の初に兄は次兄とわたくしを連れて下谷根岸の御院殿坂に近い處に一戸を借りた。それは陸軍の兵食試驗の仕事が忙がしくなつたのと、次兄が大學に通ひ、わたくしが小學を終つて中學に入る事になつて千住からでは通學に不便な爲であつた。秋に至つて兄は西周氏の媒酌で、海軍中將赤松則良男の長女登志子と結婚し、上野花園町十一番地に在る赤松家の持家に移轉し、次兄もわたくしも共に移り、赤松家の女勝子、曾代子も同居した。この家は東照宮の裏坂（動物園の横手）を下つた突當りで、昭和四年頃は高山安といふ人が住んでゐたが、唯今は空家になつてゐる。四周の樣子も變じて當時を偲ぶ事は出來ない。奥座敷は二階建で、下の二間を居間とし、

二階を客間に使つてゐた。二階から見ると今程家も多くなく、背後は一面の藪疊みで、それを越して不忍池の一部も眺められた閑靜な住居であつた。この二階は日中は勿論夜も起きてゐる間は何の異狀も無いが、寢ると時々非常に魘されて飛び起きる事がある。書生の話を聞くと、胸を大きなものが來て壓へつけるやうで、苦しくてたまらなくなると云ふてゐる。その理由は遂に判明しなかつたが、出入の商人は裏の藪に狸がゐるとか、不忍池から獺が上つて來るのだとか、種々の風說を持込んで女中を恐怖させた。

五、文壇活躍時代の上

根岸の住居は半年にもならぬ程で、出入したのは市村、井上、賀古、落合氏位であつたと思ふが、花園町に轉居して「於母影」が發表され、民友社から原稿料として金五拾圓を受取つて、諸氏と相談の結果、それを資本として雜誌を發行する事となり、それからは種々の人が入り代り立ち代り、午前二時三時頃迄話すのは珍らしくなく、文士の梁山泊といふ感があつた。その中最も度々來られたのは幸田露伴氏であつたやうに思ふ。兄と話して泊り込み、翌日漂然と遠くへ旅行に出られた事もあつた。內田魯庵氏はその頃不知庵と號して居られたが、一度訪ねて來て寄附金勸誘者と見誤られて玄關拂ひをくひ、憤慨の一文を國民新聞に出す爲に書いて、投函に出た後で兄が行き、それを知つて左の書狀を寄せられた。



幸田露伴氏書簡

來訪又來書辱ふ存じ候

昨夕不忍池畔をめぐりて上野の美に感得致し候まゝ

　大家を訪ねて會はず

なる一篇かきつらね候大抵は明日の紙上に載るべく候まゝ御覽被下度候

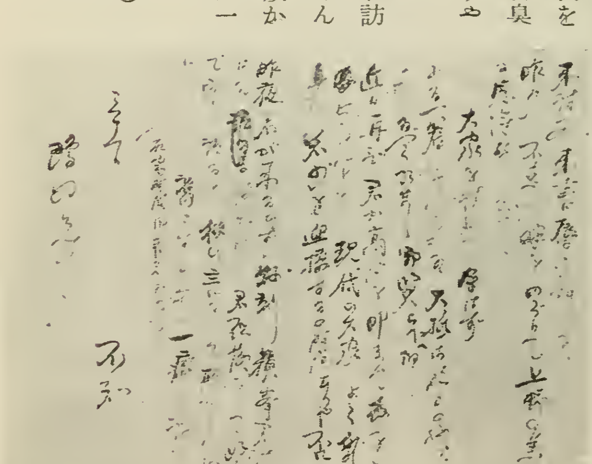
近日再び君が高門を叩きて教を乞はんとす現代の大家よく乳臭の若少を迎接するの時間ありや否

昨夜君が來るの前數刻蘇峯君訪はる彼れ曰く君磊落にして好んで客と語ると彼の言にして歟かずんば長座席を腐らすの我が一辯を許せ

（在宅時間御報知あるべし）

三十一日　　　　不知

鷗外先生侍史



內田魯庵氏書簡

これが二十三年五月三十一日の事で、これから大層親しく交際するやうになつた。この事は同氏の著「思ひ出す人人」の中にも記されてゐる。わたくしは漸く小學を卒業した許の頃であるから、來た人の前後など覺えて居らず、或は千駄木町五十七番地へ移轉後かとも思ふが、中西梅花氏の脊が高くて吃音であつたこと、石橋忍月氏が誰かと議論の末鐵拳を振廻した事などを朧氣に記憶してゐる。

雜誌は十月二十五日頃に文學評論と割書して「しがらみ草紙」と題して創刊され、黑地に白く落合氏の筆蹟を拔いた表紙は、當時頗る評判であつた。雜誌發行の直前兄から市村氏に送つた書簡があるのを左に揭げよう。

拜讀感謝題號並ニ集會ノ事承リ候ヘドモ既ニ今マデニ餘リ遲延イタシ居リ山田始メ人々ニ話候テモ云ハバマダ生レヌ子ノ緣談ニ等シク何トナク拍子脫ケ申候依テ初號（落合君ニ異見ヲ問ヒ）不取敢發兌イタシ惡イ所ハ三上君等ノ意見モタヅネ十分ニ改良可仕候又タ初ノ題號ヲ用ヰ難キ所以ハ種ガ種ニテ論文トテハ小生ガ無雜作至極ナル演劇論ノミコレニテ大書シテ文學評論ト申サンモ裏恥カシキコトト存候而已依テ落合君ノ意見ノミニテ何トカ果決可仕見込ニ御座候猶ホ次回ノ集會一號ノ世ニ生レシ後ニ致シ候ヘドモ二號ノ材料ハ今ヨリ御集置被下度候切望切望

十月八日昧爽

これで見ると初め文學評論と題する筈であつたのを止めて、頭に割つて付けることにしたので、しがらみ草紙とは、後讀賣新聞記者に話した「柵草紙のころ」によれば、「滔々たる文壇の流に柵をかけると云ふ意味からであつた」とあるが、わたくしの親友森銑三氏に井上通泰氏が語られた所によれば、井上氏が父の隨筆をしがらみと

名づけたのを想ひ出していふたらば、それが宜からうとて極まつたのださうである。演劇論といふのは第一號の「演劇改良論者の偏見に驚く」がそれである。その他卷頭に「しがらみ草紙の本領を論ず」、次兄と共譯した獨逸 Lessing の "Emilia Galotti" を「折薔薇」と題し、別に米國 Bret Harte の「洪水」をも譯載した。前者は十二月第三號、二十三年一月第四號、二月第五號、二十四年一月第十六號、十二月第二十七號、二十五年五月第三十二號、六月第三十三號に分載され、後者は十一月第二號、二十三年三月第六號で終つた。十一月第二號には「現代諸家の小說論を讀む」が出て、後つき草に「今の諸家の小說論を讀みて」と改め、多少筆削して收めた。十二月第三號には「再び劇を論じて世の評者に答ふ」が出た。

　十一月五日讀賣新聞に次兄と同稿として「女歌舞伎操一舞」序幕北畠家奧方部屋の場一回を出したが止めて、翌六日から魯國 Leo Graf Tolstoj の「瑞西館に歌を聽く」第一稿を出し、その前書きに

　昨日の紙上にてその緒を開きし脚本は少しく感觸する處ありて姑く其稿を絕ちこれに代ふるに魯西亞現代の一名家トルストイ伯が嘲世罵俗の短篇を以てせんとす彼の脚本は他日再びこれを繼ぐべき機會もあるべし又た或はこれなきときは明治二十二年十一月五日の讀賣新聞に此一張の斷簡（フラグメント）を留めて讀者の忖度に任せたるも亦與なきにあらざるべし

とある。譯文は第一回とせず第一稿（〇以下これに倣ふ）とし、七日より二十九日の末稿まで（〇十六、二十六日を除く）二十二回に連載された。題名は後美奈和集に收める時、單に「瑞西館」とした。猶之と交互に二十五日から Theodor Körner の「傳奇トオニイ（三幕續き）」の共譯が出て、二十五日序幕其一、二十六日其二至其六、二十八日其七其八、二十九日

其九其十、十二月三日其十一まで出て中絶したらしい。

書き落したが三月十三日讀賣新聞寄書欄に「修行がしたい」、四月七日の投書欄に「池袋清風君に一言す」を出し、二十四年十月しがらみ草紙第二十五號山房論文其六附錄に前者を一、國民之友第四十六號の「獨逸文學の隆運」を二、後者を三として收めたが、月草に入れる時口語體を文語に、題名を「平仄に就きて」「再び平仄に就きて」「三たび平仄に就きて」と改めた。

醫　學

醫學衞生に關した論文、雜錄等を年代順に列擧する。

一月五日東京醫事新誌第五六二號至二月九日第五六七號に「市區改正は果して衞生上の問題に非ざるか」、同第五六二、五六三、五六四、五七三、五七四、五七八、五七九、五八二號に、「エミル・ドユ・レーモンの傳」（譯文）、第五六二號漫錄欄に「寸鐵學士」、一月十二日第五六三號に「瘈狗毒種接院ヲ開クノ記」、一月二十六日第五六五號に「小池學士ノ中外醫事新報社員ニ與フルノ書ヲ讀ム」。

二月九日第五六七、十六日第五六八、三月二日第五七〇、十六日第五七二、四月十三日第五七六號に、「軍陣流行病及ビ其他ノ傳染病ヲ攻撃スルノ方案」（Koch原著）、二月十六日第五六八號に「ペッテンコーフェル師の七十誕辰」、二十三日第五六九號に「醫學統計論の題言」。

三月二日第五七〇號至十六日第五七二號に、「ペッテンコーフェルの逸事」、九日第五七一、五月四日第五七九、七月十三日第五八九、二十七日第五九一、十月十九日第六〇三號に、「コッポ師印度紀行抄」、三月二十三日第五

七三號に「統計に就て」、二十五日衞生新誌を創刊し、「服乳の注意」（六月五日博文館發行日本大家論集第二十五編に轉載せらる）「衞生新誌の眞面目」「賣笑の利害」を載せた。三十日東京醫事新誌第五七四號に「讀讀非日本食論將失其根據」と、「ルーソーが少時の病を診す」（四月六日第五七五號に續く）。

四月六日第五七五號に「先天心異形の一症」（三浦守治原著譯載）、二十日第五七七號に「薩摩イー・エムの心術を怪む」、「獨逸軍醫總監の諧謔」、二十五日衞生新論第二號に「女子の衞生」、「航西日記」（九月二十五日第七號まで連載）。

五月十日裁判醫學雜誌第一號に「咄々怪事」十一日東京醫事新誌第五八〇、二十五日第五八二、六月十五日第五八五、二十二日第五六六、七月六日第五八八、二十日第五九〇、八月三日第五九二、十日第五九三、三十一日第五九六、十月五日第六〇一號に「ヘッケル阻業の醫斷」、十八日第五八一號に「アー・マルチン穩婆制度改良意見」（譯載）二十日裁判醫學雜誌第二號に臺麓學人の名で「外情の事を錄す」、二十五日衞生新誌第三號に「靴？屐？」。

六月一日東京醫事新誌第五八三號に「吾局の文壇は又一將を得たり」八日第五八四號に「統計に就ての分疏」、二十日裁判醫學雜誌第四號に「ホフマン棼尸滅跡考」、二十二日東京醫事新誌第五八六號に顯微齋主人の名で「吾獨り其人を悼む」、二十五日衞生新誌第四號に「病院」（八月二十五日第六號に續く）。

是月軍醫學校より留學研究の新知識を以て編述した「陸軍衞生教程」が刊行された。菊判、假綴、紙裝二〇八頁、卷頭に石黑忠悳氏の識語がある。

七月三日讀賣新聞に「時事新報は醫者の何者たるを知らず」、六日東京醫事新誌第五八八號雜錄に「腦髓と文明」

「臨蓐消毒」、十日裁判醫學雜誌第五號に「裁判醫の文は宜しく簡なるべし」、十三日東京醫事新誌第五八九號に「新僭醫」、二十日裁判醫學雜誌第六號に「法醫の自由」、二十五日衞生新誌第五號に「公衆衞生第十四回造家衞生抄錄」二十七日東京醫事新誌第五九一號に「書痢の說」。

八月十日裁判醫學雜誌第七、二十日第八、十月十一日第十一、十一月二十六日第十四號に「人身自焚の事を辨す」(譯文)、十日東京醫事新誌第五九三號に「答今井武夫君」(詩)、湖上逸民の名を以て「統計三家論を讀む」、十七日第五九四號に「讀食物論第一」、(大澤謙二博士の所論を評す) 二十四日第五九五、九月十四日第五九八、二十六日第六〇〇、十月二十六日第六〇四號に「麵麭科中ノ毒質ヲ論ジ其毒ヲ滅ス法ニ及ブ」(自抄)、二十四日第五九五、九月七日第五九七、二十一日第五九九、十月五日第六〇一號に「蛋白の需要を顧慮しつゝ混和食と淨素食との榮養を比較檢討す」(隈川宗雄氏原著獨逸文譯載) 三十一日第五九二號に「木桃數顆」(本號に大澤博士が「讀食物論第一に就て」を寄せたるを駁す)。

九月東京醫事新誌第五九八號に「醫事新聞に就て」、二十一日第五九九號に「西人の虛辭我を誣訴す」、二十五日衞生新誌第七號に鷗外漁史の名を以て「夢」、顯微齋主人の名を以て「敎を授くるに衞生の道を履む事」(十月第八、十一月第九、翌年一月十六日第十三號連載す)、二十六日裁判醫學雜誌第十號に「中澤藤四郎君の問に就て」(第九號に同君の「石油を投入したる井水は人の健康を害するや否や」の質問ありしに答へたるもの) 二十八日東京醫事新誌第六〇〇、十月十二日第六〇二號に「日本醫學會論」。

十月十九日東京醫事新誌第六〇三號に湖上逸民の名で「讀第三駁議書寄今井武夫君、用鷗外漁史韻」、二十五日衞生新誌第八號に「匈女の衞生」(譯文)、二十六日東京醫事新誌第六〇四號に忍岡樵客の名で「三たび統計論に就てを讀む」、同號及び十一月九日第六〇六、二十三日第六〇八、十二月十四日第六一一號に「竹岡友仙著醫

事集談評「二十六日裁判醫學雜誌第十二號に「溺死の新實驗」。十一月二日東京醫事新誌第六〇五、九日第六〇六號に「統計の譯語は其定義　負かす」二十五日衞生新誌第九十二月十六日第十一、二十三年一月十六日第十三、二月二日第十四、十六日第十五號に「衞生都城の記」。十二月十三日醫事新論を創刊し、「敢て天下の醫士に告ぐ」「續折劵記」（東京醫事新誌第六〇三號に接續）「精神啓微の評」、十六日衞生新誌第十一號に「傴痲質斯の話」、十四日東京醫事新誌第六一一號に顯微齋の名で「マッケンヂーの解嘲を讀む」（二十一年十二月讀賣新聞の所載と同じ）、二十八日第六一三號に「傳染病分類圖」。

公　職

七月五日兵食試驗委員仰付けらる。二十四日東京美術學校より專修科美術解剖學講師を囑託せらる。十月五日本職並に兼職を免じ、軍醫學校陸軍二等軍醫正敎官心得仰付けらる。二十一日東京市區改正委員會より東京市建築條例取調を囑託せらる。

同二十三年には讀賣新聞の元旦から獨逸 F. W. Hacklaender の「ふた夜」を譯出し、二月二十六日完結した。しがらみ草紙第二十二號に「ふた夜（初の夜）」を舊稿として載せたが、後の夜は出なかつた。

上ノ一（元旦）、上ノ二（四日）、上ノ三（五日）、上ノ四（七日）、上ノ五（十日）、上ノ六（?）、上ノ七（二十四日）、上ノ八（二十五日）、下ノ一（?）、下ノ二（二月二日）、下ノ三（四日）、下ノ四（?）、下ノ五（七日）、下ノ六（十日）、下ノ七（?）、下ノ八（十四日）、下ノ九（十七日）、下の十（?）、下ノ十一（二十二日）、下ノ十二（二十六日）完。（?は帝國圖書館所藏の新聞缺號のため日附不明）。

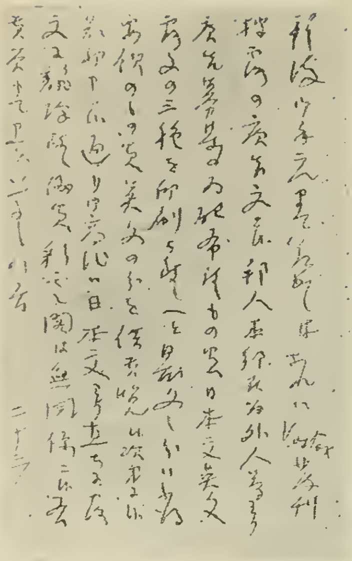
一月三日國民之友第六卷第六十九號新年附錄に「舞姬」、八月しがらみ草紙第十一號に「うたかたの記」を發表した。掲載は前後するが、眞の處女作は「うたかたの記」で、「舞姬」は第二次である。これが兄の文壇に於ける位地を確固たらしめたものであつた。「うたかたの記」は獨逸南部の大都會ミュンヘンを舞臺とし、畫工巨勢は原田直二郎氏、他も悉く實在の人物を使つたので、その事は後藤宙外氏の編した唾玉集に收めた兄の談話で知られる。內田不知庵氏がこの作を幸田露伴氏の「一口劍」と較べて等級づけたについて、澤水烏の名を以て之を哂ひ、石橋忍月氏が文章、內容、外形より評した中から幽玄といふことに關して論戰を重ねた。「舞姬」は獨逸北部の大都會伯林を背景として作り、これには二月國民之友第七十二號に巖谷小波氏が氣取半之丞の匿名を以て書いた評に對し、四月しがらみ草紙第七號（「氣取半之丞に與ふる書」）及び國民新聞四月二十八、三十日、五月二、四、五、六日の六日に涉り（「再氣取半之丞に與ふる書」）答書を掲げた。「舞姬」は國民之友に出た外に左の種類がある。

一、國民小說第一	二十三年十月三十日	民友社
二、美奈和集	二十五年	春陽堂
三、英譯　イイストレエキ氏譯	四十年二月五日	彩雲閣
四、露譯　二葉亭四迷氏譯	四十一年春	
五、獨譯　文學士小池堅治氏譯	昭和五年六月十日	郁文堂

英譯は"My Lady of the Dance,,と題し、後に原文を添附してある。初め國民英學會の雜誌に連載したのを單

行本としたものかと思ふ。唖玉集にある兄の話中に「一體舞姫といふ字はバレチウヅの譯で、バレットと云ふ踊ををどる女のことです、或人が某雜誌へ英譯にして My Lady of the Dance（我が舞姫の貴婦人）と書いてあつたが、つまり意味が分らなかつたものと見える」といふてゐる。四の露譯は長谷川氏が露語雜誌 Vostok の第一號第二號に載せたもので、題を「踊り子」と付けたのは流石正鵠を得てゐる。この雜誌の事は四十二年八月易風社發行「二葉亭四迷」（坪内逍遙、市島春城兩氏編）の中に兄が

何とかいふ露西亞人が横濱で雜誌を發刊するのに、私の舞姫を露語に譯して遣りたいが、差支は無からうかと、手紙で問ひによこされた事がある。私は直に差支は無いと云つて遣つた。程無く雜誌に舞姫が出ることになると、その雜誌社から、わざ／＼敬意を表するといふ電報が來た。次いで雜誌を十部ばかり送つて來た、私は餘り鄭重にせられて恐縮した。



長谷川辰之助氏（二葉亭四迷）葉書
明治四十年舞姫を露譯するに
就いての書信

と書いてある。Vostok は四十一年一月に創刊されたかと思はれるのは、四十年十二月二十三日の消印ある長谷川氏の葉書があつて、それに雜誌發行披露文の事が見えてゐるからである。

拜復御手元まで差出候はあれは Vostok 發行披露の廣告文に候邦人本邦在留外人等より廣告募集の爲配布致

候ものゆゑ日本文英文露文の三種を印刷致候へども日本文の分は不得要領のものゆゑ英文の分を供貴覧候次第に候最初申上候通り御高作は日本文より直ちに露文に翻譯致候儀ゆゑ彩雲閣は無關係に候右貴答まで申上候草々頓首。（二十三日）

末文の彩雲閣は無關係とは原文から直接露譯するので、彩雲閣の英譯文から重譯するのでないといふ事であらう。五は獨和對譯鷗外小品と題し、昭和五年六月十日郁文堂書店より刊行した四六版に、「文つかひ」「假面」と共に收めたもので、卷頭に兄の「世間留綺語。海外咏佳人。奄忽吾今老。回頭一鬨塵。」の題辭がある。

以上五種の他に昭和二年十月一日岩波書店から、岩波文庫一〇一として「うたかたの記」「ふた夜」「文つかひ」の三篇と合して刊行されたものも一異本に加ふべきである。菊半截判、假綴、紙裝、平福百穗氏意匠。これには小島政二郎氏の鷗外先生略傳十二頁、鷗外先生刊行著書略表一頁が添附され、總紙數一二一頁である。「うたかたの記」は美奈和集に收めたのと、この岩波文庫の他には無い。「舞姫」の原稿は半紙に毛筆を以て認められ、下谷の古書肆吉田朵二が祕藏して、大正十二年の震火にそれだけを抱いて逃れたが、昭和八年夏の頃遂に手放して大阪の上野精一氏の庫中に入つた。

「舞姫」の他一月に出たものは、三日の日本之文華第一册第一號に「大家」、十八日の同誌第二號に露國 Turgenjew の「馬鹿な男」、二十五日しがらみ草紙第四號に S. S. S. の署名を以て「明治二十二年批評家の詩眼」がある。「大家」は翌年五月しがらみ草紙第二十號「鷗外文話」に收めた。

二月一日國民新聞創刊號に「祝辭に代へて」、十三日の國民之友第六卷第七十三號特別寄書欄に「市區改正

論略」、二十五日のしがらみ草紙第五號に日本演劇協會の演說筆記「演劇場裏の詩人」があり、二十六日以下の國民新聞に「瀛西詩話」が連載された。卽ち

（一）盲帝の曲（二十六日）、同續（三月二日）、（二）今の英吉利文學（四日）、（三）美しき星（六日）、（三）白壁の微瑕（九日）、（五）、再びドーデーの事を記す（十三日）、同續（十五日）、（六）「地震」の作者（二十七日）。

で、後しがらみ草紙の「鷗外文話」に重出する。

三月三日國民之友第六卷第七十五號に「ラブルュエールが箴言數則」を掲げ、後二十六年二月しがらみ草紙第四十一號「鷗外文話」共十八に「箴言數則」として收められた。國民新聞の十七日から二十六日までに獨國 W. von Kleist の「地震」が十回に連載された。二十三日第七回の初に

連號「あ」行の「お」の字を悉く「わ」行の「を」の字に植ゑ違へたり、請ふ讀者諸君の正されむことを、其他の假名遣は一一に擧げず、漁史識す。

と六號活字で記してある。是月のしがらみ草紙第六號には、小林紺珠の名を以て「雜說」が出てゐる。

四月は上野公園の第三回內國勸業博覽會に陳列せられた繪畫に就いて、國民新聞社から批評を原田直二郎氏に囑し、氏は十一日「又饒舌」として筆を執つたが、已むを得ざる事情の爲に兄が代つて、十四、十七、十八、十九、二十三、二十七、二十八、三十、五月一、七、八、十、二十六、六月六日の十四回に「又又饒舌」を書いた。又二十三日の國民之友第六卷第八十號から Kleist の「惡因緣」を

其一（二十三日八十號）、其二（五月三日八十一號）、其三（十三日八十二號）、其四（六月三日八十四號）、其

五（十三日八十五號）、其六（二十三日八十六號）、其七（七月三日第七卷八十七號）、其八（十三日八十八號）、
其九（二十三日八十九號）

の九回に掲げ、しがらみ草紙第七號に「言文論」、「讀罪過論」、「報知異聞に題す」の三文の他に、獨逸 Ossip Schubin (Aloisia Kirschner) の「埋れ木」を譯出した。「埋れ木」は

第一、二回（二十五日第七號）、第三回（七月第十號）、第三至第六回（九月第十二號）、第七、八回（十二月第十五號）、第九、第十回（二十四年一月第十六號）、第十一、第十二回（四月第十九號）、第十二回後半（五月第二十號）、第十三回（七月第二十二號）、第十四至第十六回（十二月二十七號）、第十七至第十九回（二十五年四月第三十一號）

で完結した。この作の主人公ゲザの哀れ深い末路は、人の同情を惹かずに置かなかつた。昭和二年十月岩波文庫一一八として刊行され、卷末に小島政二郎氏の附記があり、紙數一〇二頁である。十九日國民新聞に「ふた面」と題した忍月氏に與ふる短文を掲げ、しがらみ草紙第八號に「外山正一氏の畫論を駁す」を載せた。

六月二十三、四兩日の國民新聞に「肖像に添へて國民新聞社に寄する書」、二十三日の同紙に「蘇峯先生に答ふる書」が出で、同日中西梅花氏の「森鷗外君」と題する新體詩も載せられた。

白きは雪か雪のごと、照る月影の池の面に、觀す心は言さやく、日耳曼の國ゆ持て來こし、其の、蟹の横に這ふ、眞菅の長根爰に移し、こゝにうつして益良夫の、修羅の巷に手捲く、衣のたての縱文字と、なしにけるかも君が抑も、何を忍の河の瀬に、うちも打ちたる志我良美を、命と族ちて寄り寄れる、其の花片のいろ

いろを、足搔き啄喰み戯れつゝ、心の餘所に身を置きて、浪のまにまに世と游ぶ、其の世と遊ぶ樂は、小夜更けて、小夜更けて、柳睡りし空を高み、空を高みて鳴くと云ふ。
加萬目の外はしるよしあらじ。

二十五日しがらみ草紙第九號に「外山正一氏の畫論を再評して諸家の駁説に旁及す」が出た。
七月しがらみ草紙第十號に「石桂堂の逸事」と「雜言四則」とが載つた。石桂堂は儒者荻原承、字は公寵、號綠野の別號で、兄が親戚林洞海翁から聞いた話を書いたのである。二十四日の國民新聞に「油畫裂」と題する短文を出した。八月二十三日國民之友第七卷第九十二號から獨國 Adolf Stern の「うきよの波」を載せられ
其二（九月十三日第九十四號）、其三（二十三日第九十五號）、其四（十月三日第九十六號）、其五（二十三日第九十八號）、其六（十一月三日第九十九號）
で完結した。「惡因緣」「地震」「うきよの波」は、二十四年十月十一日民友社發行第二國民小說に收めて發行された。
九月しがらみ草紙第十二號に「原田直二郎氏に與ふる書」、十一月同誌第十四號に「答忍月論幽玄書」、十二月第十五號に「忍月が再び我に答ふる書を見て」が出た。後の二つは「うたかの記」に對する批評の辯である。
九月二十三日國民新聞に「萩をみそこねたる記」といふ題で、玉麟子（井上通泰氏）、白つゆの伴（幸田露伴）嘔外（鷗外）幹武次（三木竹二郎次兄）松雲軒（賀古鶴所氏）が谷中萩寺の萩を見るつもりが雨で駄目になり、蔦谷の伊香保に遊んだ記事が出てゐたのを最近に知つた。全集にも遺珠にも洩れたものであるから、他の三人の

とも左に掲げる事とした。

萩をみそこねたる記

きたらん土曜日には萩寺の萩を見にものせんと兼て松雲軒のあるじ、鐘禮舍の翁などゝ契りおきぬ、今日はその土曜日なり、天氣如何にと起いづる、すなはち空を打仰ぐに兎の毛ばかりのくまもなき天氣なれば、いとうれしくて、午すぐる頃よりこそと契りつるも待とほしければ、一寢入せばやと枕ひきよするはしに

天氣はよしさそひし友はみな來ちふ

みちたらひたる今日にもあるかな

目さむれば雨のそぼふれるに、言はなくてまつ空を打まもれるほどに、いやふりにふり來ぬ、

人ならば我くろかねの扇もて

車をいそがせて松雲軒をおとなへば、あるじも同じ樣に空をにらまへてゐませり、さていかにせまじ、蝸牛庵主をさそひて鳥又にまどゐをやせましなどいふまに、やゝあかるみぬ。（玉麟子）

なぐらまはしき今日の空かな

★　☆　★　★　★

もち竿でさしてやりたき髭男めがむづかしき事云ひ居りしところへ、ノッシ〱と入り來りし玉麟子、是で俗談は獲麟と誤魔化し、誘はるゝがまゝに飛び出して、乘りし鐵道馬車相憎に其馬の腹へりたるや、力なくたよたよとせるを、酷くなぐつて意氣揚々たる車掌めと乙に惡く云ふにはあたらず、我等を晏子にしたるな

りとうぬぼれ、三橋で下りてムダロ澤山にあるき行く折柄雨ハラ〳〵と落し來て、傘ケ無しの露伴はかぶり笠したる僧の行くを羨やみける可笑し、かくて遂に鷗外子の門前にいたり了んぬ。(白つゆの伴)

★ ★ ★ ★

けふも例のおほかみの聲きゝて、共に吠ゆべき友もがなとおもふをりしも、日本の十二支連中打そろひて來にけり、羊の君の口より引きいだし玉ふを見ればたゞの紙にはあらで、久米仙墮落のはぎ見そこねたる記なり、之を繼げといはれてうじともつぶやかず、道すがら書きけり、奇術師の家まだ訪ねぬかたゐの笠うらみの話の中に、その僧の連れたりし戌を忘れしとて、松雲軒の主人がなげきしも十二支の緣をは離れぬなるべし．狼はまだ十二支に入らねば、此聲をいつまでも聞くべきにあらずとて、打連れて上野の山を踰え、竹二が水たまりに倒れて見事見切者となりしを見しが、これを厄拂に難なく根岸のいかほにぞ着きにける(反吐にまみれし嘔外)。

★ ★ ★ ★

本舞臺一面の平舞臺上手四枚つゞき襖にて見切り、下手上一間の床の間、巖窟中菩薩の掛物、唐かねの花生けにたが脫き棄てし藤袴の生花あり、續き一間みゝづくならぬ梟土棚、向ふの手擦にこれより先き、ささらさつさの笹藪の書割り、ままのまん中燭臺三脚、さかつぎ(さかづきにあらず)皿狼藉、伯父の意見のとつくり立てたり倒れたりねかしても見たり、渾て伊香保溫泉奥座敷夜の道具、こゝに或は坐し或は倒れ、或は鯱立ちしたる天下の名優、先づ癲病ならぬ成田屋に似たるは、目を据ゑ口を結び、無言の思入に腹のありさう

で無一物なるは幹武次、狗の聲のワンに注いだる酒におそれて、鷗のついた煙管をひねくり煙草ばかり飲むで居るは音羽屋きどりの鷗内御史、偏袒右肩僞なき赤腹つき出して、截れこゝをといぬばかりなるは、高島屋の一心太助改名の江の上滿安、圖部十二三分になりて屈伸自在の猿臂振りまはすは、三好屋の和國橋蔵次が德利振りまはすに髣髴たる露の友の五郎兵衞、雨漏路無漏ぢに迷はざる當世の豪傑、曾我十郎の和事師たる嘔内と、同苗五郎の荒事師なる露伴に介添して、世の中の敵の酒を飲まずば矢張圖部七位には成駒屋の朝比奈まがひ、最う酒はよしにせう雲軒、此役出揃にて所作たていろいろありて、とゞ蚊の聲ならぬぶん學界（會にあらず）のがんどうがへしは次狂言の種に殘して、此處歌舞伎十八番の暫くまつ黑くろ幕（狂幻作者幹武次）

九月長男於菟が生れると間も無く妻赤松氏を離緣し、十月初旬次兄とわたくしとを連れ車夫夫婦を從へて本鄕駒込千駄木町五十七番地、その頃は家よりも原地が多く、太田子爵の所有地であるため太田の原と呼ばれた處の借家に移つた。その時の事情は於菟が中央公論に揭げ、後その隨筆集「解剖臺に凭りて」と題した書中に收めた「時時の父鷗外」に精しい。於菟は暫らく千住の祖父母の許に預けられたが、乳母の乳が惡かつたので、一二箇所轉じた後、本鄕森川町の第一高等學校側で文房具と煙草を商つた平野甚三さんの家に預けられ、甚三さんの妻君が乳母となり、その母が非常に可愛がつて育てた。平野の長男久保氏は後に農學士となり、歌人萬里として知られてゐる。

この五十七番地の家の間取りなどは今記憶に殘らぬが、母は後に夏目氏の著を讀んで、家の樣子は前と違つてはゐないやうだと云ふてゐた。その頃南隣は車宿、その一二軒先に小さな癲狂院があつて、子供を亡くした女の患

者が夜悲鳴するのが聞えて厭な感がした。宅の眞裏が中學郁文館で、わたくしは轉居のため神田の錦城中學校からこの郁文館に轉ずる事にした。郁文館の前に草津溫泉があつて仕出し料理をするので、わたくし達は晩餐には度度取寄せ、客の時は必ず此處に注文した。

十月十三日國民之友第七卷第九十七號藻鹽草欄に鐘禮舍主人の名を以て譯詩「靑邱子」、十一月三日第九十九號同欄に「のばら」を載せ、後美奈和集に「於母影」を入れる時その中に收めた。

轉居後のしがらみ草紙奥附に

> この草紙は月刊にて、その價は前金一册七錢なり、半年に積て四十一錢、一年にて八十一錢、府外の人は別に一册ごとに郵稅五厘を添へ玉ふべし。送金の法は、郵便爲替にせられむこと、願はし。振込の先は社名あてにて、本鄕森川町郵便局に限る。止むを得ずして郵便切手おくらるるときは、一割增にす。廣告料は一行二十四字づめにて五錢、發行所は東京本鄕區駒込千駄木町五十七番地新聲社、脇田茂一郎發行人にて編輯役を兼ね、森篤次郎印刷人たり

とあるのは兄が書いたのである。

醫學衛生

一月二日衛生新誌第十二號、十六日第十三號に「公娼廢後の策如何」を出し、三十一日大日本私立衛生會新誌第八十號に轉載された。

二月二日衛生新誌第十四號から附錄に「衛生新論　空氣」を出し始め、九日醫事新論第三號に「惡聲」「ひらき

封一通」、十六日衞生新誌第十五號に「醫の意匠にて建てし新療院」「千八百八十九年伯林府の窒扶斯院」(三月十六日第十七號に連載)、二十六日裁判醫學雜誌第二十號に「裁判醫學上の近聞數則」。

三月二日衞生新誌第十六號に「癆症傳染統計の異議」、九日醫事新論第四號に賀古鶴所氏の名を以て「日本醫育論」、十六日衞生新誌第十七號に鷗外漁史の名で「癆症の豫防につきて」、顯微齋主人の名で「鐵道に關する衞生法」(四月二日第十八號五月二日第二十號に連載)

四月二日衞生新誌第十八號に「佐佐木謙問ノ菀夛ノ答」、九日醫事新論第五號に忍岡樵客の名で「第一回日本醫學會と東京醫事新誌」と、鷗外の名で「雜纂」「惡聲絕」、顯微齋主人の名で「群載」。

五月二日衞生新誌第二十號、六月二日第二十二號に「還東日乘」。九日醫事新論第六號に「第一回日本醫學會餘波の論」、賀古氏の名で「再び日本の醫育を論ず」。

六月二日衞生新誌第二十二號に鷗外漁史記として「屋制審議」、顯微齋主人の名で「汽車中衞生の補遺」(十六日第二十三號に連載)、九日醫事新論第七號に「地下の蘭化が心、獨逸の文、所謂和漢方醫、今之漢醫其術之忠臣論」、十六日衞生新誌第二十三號に「公娼廢後策とフリイドリヒ・ザンデルと」、鷗外漁史の名で「近視の由りて來る所」「消毒雜誌」、紺珠居士の名で「會心錄」(七月二日第二十四號、九月二日第二十八號に連載)、「衞生偶記二則」。

七月九日醫事新論第八號に「コロボツクルといふ矮人の事を云ひて人類學者坪井正五郎大人に戲る」、十六日衞生新誌第二十五號に「獨逸北派の防疫異見、同南派の防疫異見、國際衞生會と國際防疫法と」、顯微齋主人の名で「公衆衞生略說」(九月十一月連載)、鷗外漁史の名で「南留別志鈔」。

八月二日衞生新誌第二十六號に「防虎刺拉法」、九日醫事新論第九號に「反省記」「望聞問切」「滿場贊成、消毒的淸潔法、製藥者の醫學博士、利己主義、津田眞道氏」。

九月二日衞生新誌第二十八號に鷗外漁史の名で「劇場の雛形」、九日醫事新論に衞生新誌を合せて衞生療病志と改題して第十號を發行し、鷗外漁史の名で「墓田」「雜纂」、顯微齋主人の名で七月十六日衞生新誌第二十五號に接續する「公衆衞生略說」（十一月第十二號に連載）、十一日國民新聞に浮漚子の名で「防疫奇蹟」を書いた。

十月九日衞生療病志第十一號に「第十回國際醫學會」（十二月第十三號、二十九日號外、二十四年二月九日第十四號に連載）。十一月九日第十二號に賀古氏の名で「醫業禁停の處分を論ず」。十二月九日第十三號に「顯微齋漫錄」。二十九日號外に「結核療法の急報」、賀古氏の名で「醫藥兩業の關係を論ず」を書いた。

十二月「携帶糧食略考」を草して陸軍省に提出した。

公　　職

六月六日陸軍二等軍醫正に任じ、軍醫學校教官に補せられ、三十日陸軍衞生會議議員を兼ねた。

六、文壇活躍時代の中

同二十四年一月三日國民之友第八卷第百五號にキルヘルム・ハンムの記した「初演說」を譯出し、後しがらみ

草紙第四十二號鷗外文話其二十二に「議院の記念」と改題して收めた。しがらみ草紙第十六號には「矢野文雄氏と九鬼隆一氏との美術論」と題して、兩氏の論を批評した。二十八日、第三の創作「文つかひ」が吉岡書店から新著百種第十二號として刊行された。四六判、假綴、紙裝五十六頁、幸田氏の聖天樣三十頁と合綴し、表紙繪樣は木版でピラミツト及びスフインクスを現はせる風景畫の上に、留針で蝸牛の畫を附けた圖案で、卷首に落合氏の書簡が木版刷にして附けてある。挿繪は原田直二郎氏の筆に成り、日本の陸軍將校が腰かけた西洋貴婦人と對して椅子に身を寄せて立てる圖であるが、この將校の顏が兄に似てゐるといふ評判であつた。この作はザクセン國機動演習に隨つた記念で、獨逸中部の都會ドレスデンを舞臺とし、王宮の樣子、謁見の儀式は有の儘を寫したが、本文は架空談ださうである。これには讀賣、改進、報知に批評が出て、中にも忍月氏とは四回に渉つて論戰した。

二月三日國民之友第百八號に「笠雲雀」を出し、後美奈和集の「於母影」に收めた。しがらみ草紙第十七號には「千朶山房瑣語」があり、二十六日は春陽堂發行美術世界卷の三に題言を書いた。三月二十三日國民之友第百十二號にアルフオンス・ドウデエの著を譯した「政治を憎む文」を掲げ、後しがらみ草紙第四十一號鷗外文話其十六に收めた。二十三日國民之友第百十三號には青年時代草した漢文「後光明天皇論」を舊稿として掲げ、しがらみ草紙第十八號には「朗讀法につきての爭」と、小林紺珠の名を以て「西史漫鈔」を載せた。

四月十三日國民之友第百十五號に出た「造形解體學につきてギヨオテが言ひおきしこと」は、後觀潮樓偶記には單に「造形的解體學」として收めた。しがらみ草紙第十九號には小林紺珠として大學生時代の漢文「小金井觀

「樓記」を掲げた。五月三日國民之友第百十七號の「文話一則」は、しがらみ草紙第四十一號鷗外文話其十二に無題名で收められ、かげ草の觀潮樓偶記には「解嘲の必要」と改題して收めた。しがらみ草紙第二十號には紺珠譯として Hacklaender の「黃綬章」と、「鷗外文話」と題して

其一あづまや、其二盲帝の曲、其三今の英吉利文學、其四白壁の微瑕、其五ドウデエ、其六「地震」の作者、其七大家、其八鬼才、其九詩句覇王樹の如し、其十小說中人物の模型、其十一毒を以て毒を制す

が收められた。その內の二より六に至る五篇は、一昨年國民新聞「瀛西詩話」に出たものである。六月しがらみ草紙第二十一號には「レッシングが事を記す」の他に、二十二年少年園に出した「戰僧」と、初出不明の「みくづ」とが鷗外舊稾として載せられてゐる。「レッシング」は九月の第二十四號まで四回續いた。

七月しがらみ草紙第二十二號に「熊谷直好と八田知紀と」、「題言二則」との他に、前年讀賣新聞に連載した「ふた夜」の初の夜だけを鷗外舊稾として載せた。「題言二則」は中西梅花氏の新體梅花詞集題言と少年文學序とを云ふ。その中前者は詞集と此處とには、「いかなる形にもあれ云云」以下「詩人は我世と共にその言の葉の進まんことを務めよ云云」までの五條を記し、最後に「この法を說きしは大詩人ギヨオテなり。これを寫して梅花詞集の題言としたるは鷗外漁史森林太郎なり。」として、その後に年月日があつた。それをかげ草の觀潮樓偶記に入れる時、最後の「この法を云云」と年月日とを削り、その代りに初頭に「中西梅花氏の新體梅花詞集成りぬ。余ギヨオテが論詩の一段を鈔してその首に題していはく。」を加へ、題も「ギヨオテ詩を論ず」と改めた。八月しがらみ草紙第二十三號に「千朶山房瑣語」が出た。

九月のしがらみ草紙第二十四號に「山房論文」「山房放語」が出て、これから坪内逍遙氏と有名な論戰が始まるのである。この大論戰の根元は坪內氏が早稻田文學に掲げた「マクベス評註」であつた。これに關する坪內氏の文は「文學その折折」に、兄の分は「都幾久斜」に集められてゐる。新潮社の日本文學講座には小嶋政二郎氏が、最近の改造社の日本文學講座には正宗白鳥と木村毅氏とが、各その事に就いて書いて居られるから參照されるが宜い。

坪內氏との論戰の間に、大阪の山田芝迺園とも論を交へた。その頃の兄は元氣旺盛で誰をも相手とし、二三行のゴシップ的記事に對して數頁の駁論を草するのは珍らしくなかつた。田山花袋氏はその頃の事を

當年に於けるしがらみ草紙の活躍は殆ど人間業とは思はれなかつた。議論らしい議論、評論らしい評論は、此處でなければ聞かれないやうな觀があつた。外山正一氏の畫論に對する駁論は、どんなに精力と學識とを示したものであらう。それに文章の暢達と理路の透徹と學問の深遠とは、いかなるものに向つても通俗以上の見地を示さずには置かないやうな力を持つてゐた

と書いて居る。

山房論文は十月第二十五號、十二月第二十七號（附錄とも）、二十五年一月第二十八號、二月第二十九號、三月第三十號、六月第三十三號で終り、その間「山房放語」は第二十六、二十七號に、「續山房放語」と「山房推掌談」とは第二十八、第二十九號、「與芝迺園書」は第二十六號に載つた。

十月十一日民友社から第二國民小說が出版され、「惡因緣」「地震」「うきよの波」の三篇が收められた　十三日

國民之友第九卷第一三三號に「詩話一則」（後「レドキッツ」と改む）がある。

十一月十五日早稲田文學第三號から「シルレル傳」が分載され、第三號に一頁至四頁、十二月十五日第五號に五頁至八頁、二十五年一月十五日第七號に九頁至十二頁、三十日第八號は十三頁至十六頁、三月十五日第十一號に十七頁至二十頁、九月三十日第二十四號に二十一頁至二十八頁の六回で、未完のまま中絶した。

十二月しがらみ草紙第二十七號の「美術世界題言」は、二月二十六日春陽堂發行美術世界卷の三の卷頭に題したものの再録である。歳暮に「紅豆集題詞」の作がある。

是年次兄篤次郎が伊豫松山藩板倉氏の舊臣長谷文氏の長女久子と結婚した。

醫學衛生

二月九日衛生療病志第十四號に「治療餘聞」（入澤達吉氏報文を譯す）及び祖父白仙綱浄の「與三學醫書」を發表した。

三月九日同誌第十五號に「治療續聞」、四月第十六號に「コッホに繼で出でたる發明者」、鷗外漁史の名で「熊谷幸之輔君」「學友月旦」「賀古鶴所傳」「書池好夫與石黒軍醫監薦予書後」、顯微齋主人の名で「漫録」（五月、六月、九月に連載）。五月第十七號に「檢食記事」、鷗外の名で「北里柴三郎氏の近業」「彫玉飛屑」、小林紺珠の名で、「刀圭餘事」、千朶山房主人の名で「棒喝」。六月第十八號に「内科會に於ける結核素の評判」（入澤氏報文譯載）、「コッホの新療法に就きて起りし假名文字の說」。七月第十九號に、「ロオベルト・コッホが傳」（八月第二十號に連載）、「屋式略說」、賀古氏の名で「黄熱を防ぐ法の制定を求むる說」。八月第二十號に鷗外漁史の名で「命の友に望む」。九月第二十一號に「汽車中衛生新議」「獨逸醫界近事」（入澤氏報文を譯す）「大學の自由を論ず」「市區改正論略」（去年二月國民之友所載と同じ）「玉勝間抄」。十月第

二十二號に、「第十回國際醫學會の衞生部其一賣淫に處する道（（其二至其五）十一月第二十三號に載す）。十一月第二十三號に小池正直氏と共著「壁濕説」、紺珠居士の名で「衞生偶記二則」。十二月第二十四號に「結核素に就きての續報」（コッホ氏の著譯載）「キルヒヨウが六十誕辰」（入澤氏所報譯載）。

公　職

二月二十八日陸軍兵衣試驗委員仰付けらる。
八月二十四日明治二十年勅令第十三號學位令第三條により醫學博士の學位を授けらる。
十二月二十八日從六位に敍せらる。

七、文壇活躍時代の下

同二十五年一月中旬名古屋の人麗粹赤司繁太郎著烈眞具の題詞を草した。三十一日團子坂上の千駄木町二十一番地に移轉した。千住に居る父が次第に年老いて醫業が煩はしくなつたので、それを罷めて兄と同居しようといふので、毎日の如く諸方を探し歩いてゐる中に、團子坂上の見晴らしの好い家を見付けて、坂下の懇意な植木師千樹園の主人を介して購入し、父母と祖母とは千住から來り合した。五十七番地へは牛込から夏目漱石氏が移られ、有名な「我輩は猫である」はあの家で書かれたのである。夏目氏の後へは第一高等學校教授の齋藤阿具氏が

來て、今も引續き住んで居られる。

この團子坂に移轉した月日を忘れたのが、幸ひ賀古氏の許に送つた手紙があり、封筒の消印によつて分つた。

三十一日にいよいよだんご坂上に引こしまゐり候千駄木町二十一番地也今日の雪景色尤好し御招申度候へども夜になりては詮なかるべしと存候土えう午後は龜井にゆく約束には候へども日暮るれば直に歸可申候稻荷鮓少少あき箱に入れ申候坂の下にて小綺麗なるかみさんの製したる也うまくもなけれどきたなきものにはあらず早早。

四日　　鷗外



觀潮樓書齋に坐せる祖母(左)と母(右)

團子坂は潮見坂が本名で、快晴の日前面上野の森の上から白帆が見える。移轉當時の家は既に存しないが、永井荷風氏の「日和下駄」の崖の章中に寫され、兄の「細木香以」の中に由緒が記されてゐる。翌年後方の長屋建二棟と梅林とを買入れ、其處に二階建の所謂觀潮樓を新築した。この普請の設計は一切母の好みに任せ、千住の氣に入りの大工山岸音次郎が建てた。三疊の玄關から廊下に出ると、角が八疊の座敷、西に四疊半の茶室が列び、茶室の背が八疊の洋室、八疊と茶室の前は廻り椽になつて居る。廊下を北に突當つて螺旋形の階段を上ると十二疊の座敷で、東南に手摺をつけた幅三尺の椽側が

あり、座敷は北側に一間の床間と同じく違棚があり、その左右三尺づつは壁になつて居り、西は全部壁であつた。室の中央邊に無地金緣の屛風六枚折一雙を立て、南に向つて屛風寄りに机を据ゑ、座右に一つ小机があつて、そ



依田學海翁筆
合評會の圖（左方依田翁、中央露伴氏、右方鷗外）



依田學海翁筆
觀潮樓上より谷中螢澤を望む景

の上に筆硯錐小刀等文房具一切を入れた淺い箱を置き、それから背後にかけて必要書類を一山一山並べて置いた。

此處が小倉に赴任するまで書齋に使用せられ、目不醉草以下の合評會、歌會等も此處に開いた。椽側に立つて東を眺めると上野の森が黒黑として、木立の間から谷中天王寺五重塔の九輪が見え、雪の景色は殊に宜かつた。此處に挿入した寫眞は合評會の時、依田學海翁が戲れに寫生されたもので、上の三人物は左方が翁、中央が幸田氏右が兄であり、下のは二階から谷中を望んだ景で、中央の二階建は三崎南町の高濱小學校（この學校は後に廢せられ、三崎町の通りに谷中小學校が出來たが、今年五月燒失した）である。螢澤といふのは三崎町の郵便局の前から北に折れて、日暮里に至る途中、萩寺といはれた宗林寺の邊を云ひ、江戸時代の螢の名所であつたさうだ。上野の山のはづれと南の向ケ岡との間は、盆地が下谷から芝に延びた甍の海で、兩國川開きの花火も山のはづれに見える。眼の下は根津の人家が疎に在つて、夜はその燈火が沖の漁火のやうに思はれた。

　階下の八疊は東側は壁、小倉から歸京後書齋とするので書棚を造り付けた。南は二間四枚の障子、北は壁一間取つてあとを二枚障子とし、その前は洋室から二階への廊下になつてゐる。西側は北寄を和風の押入とし、南寄りの下部三尺を板戸、上部を硝子戸の本棚とした。茶室は特に言ふべき事も無く、父が在世中は常に爐に松風の音を絕なかつた。洋室は東側に一個、北側に二個兩開きの窗があり、出入口は東と南とに付けてある。原田直二郎氏の在世中この建築を聞いて、壁畫を書くと言はれたが、病氣の爲に果さなかつた。祖母と兄との臨終の間となつたのはこの洋室である。古家は父の歿後間も無く解崩して、それからは花畑となつてゐたが、母の七十の賀に四疊半の離れを造り、壁の上塗りの濟まぬ中に重體となり、遂にこの室で歿した。家の事は又後に書くことにして、この年の作品その他を記すとしよう。

四月二十五日しがらみ草紙第三十二號に「うもれ木」の第十七回から十九回までを載せて大尾となり、五月二十一日星川寺山啓介氏の城南評論第三號に「ルウソオ懺悔記」其一を譯出し（十月二十一日第八號に第二回を出した儘で中絶した）。六月二十五日しがらみ草紙第三十三號で山房論文も鋒を收め、「折薔薇」も同時に完結した。

七月二日第一の著譯文集「美奈和集」が春陽堂から刊行された。菊判、洋綴、紙裝六一二頁、角背、表紙は數枚の洋紙を糊で貼合した强靱のもの、淡綠色で天地に鷗と波とを白拔きとし、落合直文氏筆の「鷗外漁史著、美奈和集、完」が三段に斜に記され、奥附に定價なく、檢印は丸に小篆にて林太郎と現はした實印を用ゐてある。內容は、「うたかたの記、戰僧、みくづ、黃綬章、ふた夜、舞姬、惡因緣、地震、うきよの波、瑞西館、該撒、文つかひ、新浦嶋、洪水、緣葉歎、玉を懷ひて罪あり、埋木、調高矣洋絃一曲、折薔薇及び於母影」である。神代種亮氏の調査によれば、五種の異本があるさうで、卽ち

一、初版本の一　右に揭げたもの。

二、初版本の二　本文奥附一と同じ、丸背、背に卵色クロオスを用ひ、河村墨稼氏筆で「美奈和集、再版、鷗外漁史著」と水平に靑色を以て印刷され、扉は靑色紙に隸書活字にて第二版と入れてある。

三、再版本　奥附に「明治二十七年一月五日再版發行」とあり、定價金六十錢、表紙裝幀とも三に同じ。

四、訂正再版本　明治三十九年五月二日發行にして、題號を水沫集と改め、奥附に訂正再版とあり、草色クロオス表紙、包紙付、卷首に肖像及び改訂水沫集序を載す。本文多少の改訂あり、二〇七頁文つかひに一行を脫し、目次中の人名片假名を羅馬字に改む。九版まで發行し、大正震火に紙型を燒失した。

五、縮刷本　三五判洋綴、長原止水氏裝幀、大正五年八月十三日發行、卷首新に「丙辰夏日校水沫集感觸有作」と題する七絶二首を載す、十二版まで發行し、同じく紙型を燒いた。

がそれである、猶この他に

六、春陽堂文庫本　菊半截判、紙裝、假綴、同文庫五六、五七に收め、昭和八年十一月一日發行。

があり、(五)の紙型燒失によつて大正十五年九月改版發行されたさうであるが、わたくしはまだ見てゐない。又(二)の型で奥附に檢印の無いのがある。本書の出版された頃の春陽堂は、有名な美髯の持主和田篤太郎氏の盛な時分であつたが、或日齋藤綠雨氏が來ての話に、檢印の無い本を市中に見受けるから、注意し給へとの事なので、兄は軍醫學校の歸途春陽堂へ寄つて店にあり合せた無印のを一冊持歸つて、篤太郎氏を呼付けて小言をいふたのを覺えて居り、神代氏と石川巖氏と共同で出された書物往來大正十四年十二月發行第二年第六號にもこの無檢印本の寫眞が出てゐる。

八月十三日國民之友第十卷第百六十三號夏期附錄に獨逸 Frentzel の「女丈夫」を譯載し、九月二十五日しがらみ草紙第三十六號から鷗外漁史譯、三木竹二校として、獨逸 Lessing の「俘」第一節至第三節を譯出(二十六年一月第四十號に第四節、第五節、七月第四十六號に第六節至第八節を出して完結)し、十一月第三十八號に丁抹 Hans Cristian Andersen の「卽興詩人」を載せ初め、これは完結までに九年の星霜を費したもので、その細目は次の如くである。

わが最初の境界　　二十五年十一月　　三十八號

隧道、ちご	二十六年一月	四十號
美少鬘、即興詩人	同二月	四十一號
花祭上	同三月	四十二號
花祭下	同八月	四十七號
蹇丐		
露宿、わかれ		
曠野		
水牛	同九月	四十八號
みたち	同十一月	五十號
學校、えせ詩人、露肆	同十二月	五十一號
神曲、吾友なる貴公子	二十七年一月	五十二號
めぐりあひ、尼君	同二月	五十三號
猶太の翁	同三月	五十四號
猶太をとめ	同四月	五十五號
媒	同七月	五十八號
謝肉祭		

歌女	同八月	五十九號

しがらみ草紙本號にて廢刊。三十八號より五十四號までは鷗外漁史譯と署名、以後は觀潮樓主人譯とあり。

をかしき樂劇 即興詩の作りぞめ	明治三十年二月二十五日	目不醉草　卷の十四
謝肉祭の終る日	同三月三十一日	卷の十五
謝肉祭の終る日（つづき） 精進日、寺樂 友誼と愛情と	同四月二十八日	卷の十六
をさなき昔	同六月二十八日	卷の十八
書廊	同十一月三十日	卷の二十三
蘇生祭 燈籠、わが生涯の一轉機 基督の徒	同十二月三十日	卷の二十四
山寨	三十一年一月三十日	卷の二十五
血書 花ぬすびと	同二月二十八日	卷の二十六

題目	年月日	卷
封傳 大澤、地中海、忙しき旅人	同五月二十日	卷の二十八
一故人	同七月八日	卷の二十九
旅の貴婦人	同八月十九日	卷の三十
慰藉 考古學士の家 絕交書	同九月二十八日	卷の三十一
好機會 古市(上)	同十月三十一日	卷の三十二
古市(下) 噴火山	同十一月三十日	卷の三十三
囊家	三十二年九月十六日	卷の三十九
初舞臺 人火天火 もゆる河 舊羈靮	同十月二十七日	卷の四十

苦言 古祠、瞽女	同十一月三十日	巻の四十一
夜襲 たつまき	同十二月三十日	巻の四十二
夢幻境 蘇生 歸途	三十三年三月六日	巻の四十三
教育 小尼公(上)	同五月二十五日	巻の四十四
小尼公(下) なきあと 未練 梟首	同八月十三日	巻の四十五
妄想 水の都 颶風	同九月二十五日	巻の四十六

感動 ｝
末路(上)　末路(下) ｝　三十四年一月一日　卷の四十八
流離 ｝
心疾身病 ｝　同二月十五日　卷の四十九
琅玕洞 ｝

小尼公(下)は單行本にては落飾とあり、颶風は無くなり、その他上下に分れたものは悉く一つに纒められた。

序に本書の版種を此處に擧げて置く。

一、初版本二冊　菊判洋綴、長原止水氏裝幀、本文四號活字、下卷末に不翻語一覽を附す、明治三十五年九月一日發行。

二、再版本二冊　上卷首にアントニオの游蹤を示す地圖一葉、下卷末に評語集十七頁を添ふ．同年十二月一日發行。第三版以下には地圖、評語集を省き、この形式にて第十二版まで發行され、以後は縮刷合本となつた。

三、縮刷合本　初版本の金模様を空押しにして、書名と譯者名とを金文字で現はし、本文は九ポイント活字、卷首に初版例言の他に第十三版題言を載せ、大正三年九月十二日發行。初版本に比すれば用字その他に異同が多い。第十九版まで發行し、癸亥の震災で紙型が燒失した。

四、校訂本　神代氏の手に成り．本文九ポイント活字、振假名も多く、氏の詳しい記錄が添へてある。大正

十五年十一月十日發行。以上何れも春陽堂の版である。

五、改造社全集本　現代日本文學全集第三編森鷗外集に收めてある。菊判洋裝、本綴と假綴と二種あり、三段組總振假名附，わたくしの書いた小傳と略年譜とが首尾に添へてある。昭和二年一月一日發行。

六、岩波文庫本　同文庫二五〇―二五三に收められ、小嶋政二郎氏の卷末記を添へ、昭和三年四月十五日及び五月五日發行。

七、春陽堂全集本　明治大正文學全集第七卷森鷗外集に收めてある。四六判洋綴二段組、恩地孝四郎氏裝幀、高橋邦太郎氏の小解を添へ、昭和四年一月一日發行。

この他に春陽堂文庫第五〇冊として刊行の豫告が出てゐるが、本稾を終るまでには出版されない。

十二月二十五日しがらみ草紙第三十九號には露西亞レルモントフの「ぬけうり」が譯載されてゐる。

小說戲曲の他には、八月のしがらみ草紙第三十五號に「觀潮樓偶記」、十月、十一月の同誌第三十七、三十八號に「審美論」が出てゐる。

醫　學

一月九日衞生療病志第二十五號に　Virchow の原著を譯した「細胞病理論の現地位」、二月、三月の第二十六、二十七號に入澤達吉氏の報告を譯した「歐羅巴醫界の近事」と、「第十回國際醫學會の衞生部」と「軍陣衞生部」との狀況を紹介し、四月第二十八號に「英國衞生制度略」、五月、六月の第二十九、三十號に「第十回國際醫學會」に就いて記し、七月、十月，十一月の第三十一、三十四、三十五號に入澤氏による「歐羅巴醫界近

事」、八月、九月、十月の第三十二、三十三、三十四號に「衞生新篇、榮養篇」、別に九月には、「嗚呼キルヘルム・ロオト逝きぬ」、十月には「英國軍醫制度」を揭げた。

公　職

五月三十日陸軍病院建築案審査を囑託された。

是年慶應義塾に於て審美學の講師を囑託され、日清役出征頃まで繼續したさうであるが、その月日が一寸分り兼ねた。

同二十六年一月二十五日しがらみ草紙第四十號に、連載物の他に「烈眞具に題す」があるが、前年赤司麗粹氏著書の卷頭に寄せたものの再錄である。

五月十五日神田學齡館から出版した少年雅賞に「淮南子の道應訓」と題し、漢の淮南王劉安の著淮南子二十一篇中の道應訓から、少年向きの話を三つ拔き出して紹介した。二十五日しがらみ草紙第四十四號から、星川寺山啓介氏の城南評論を合併し、社名をしがらみ社と改め、卷頭に「無名氏に答ふる書」を載せた。

六月一日民友社第三國民小說を出版し、中に「女丈夫」が收められた。

醫　學

一月九日衞生療病志第三十七號に「ツベルクリン成績一覽」、二十一日同志號外に「ペッテンコオフエル疹菌を喰ふ」、二月九日同誌第三十八號から附錄に「衞生新篇　食品及嗜好篇」を連載し始めた。三月二十八日軍醫學校より軍醫學校業府國文之部第一が刊行され、小池正直氏と共著「壁濕の檢定」が載せられた。五月九

日衛生療病志第四十一號には「造家衛生の要旨」と、「傍觀機關」を連載し、六月、七月、九月に「旡妄談」、八月の第四十四號に「學士の稱號」、「岡目集」を掲げた。

公　職

七月七日本職を免じ軍醫學校長心得仰付けられ、兼職は故の如くであつた。十一月十四日陸軍一等軍醫正に任じ、軍醫學校長兼陸軍衛生會議議員に補し、十二月四日陸軍病院建築法案の起草を囑託せられ、十二月六日正六位に敍し、十二月二十五日中央衛生會委員を命ぜられた。

同二十七年一月二日寺山星川氏著淨瑠璃史に漢文の序を草した。三月明治大帝が大婚二十五年祝典を擧げさせ給ふに當り、在職陸軍將校同相當官より獻品の議が出た時に同委員の名を以て「告彫造家檄」を作つた。種種論議の末に神武天皇東征の際功のあつた可美眞手命の銅像を獻ずる事になつた。この檄は二十五日しがらみ草紙第五十四號にも載せられた。同時に載つた「與某等論型品書」も二月十三日委員會で述べたもので、型品（プラスチツシエクンストウエルケ）の事を説明して參考に供したのである。六月しがらみ草紙第五十七號に「答評劇者某書」、八月第五十九號に「エルテルの譯者」を載せ、日清間の平和破れて出征する爲、この號を以て廢刊となつた。

醫　學

衛生療病志には前年に續いて「傍觀機關」「旡妄談」を書き、三月四月の第五十一號五十二號に「舟車衛生論」を載せ、七月陸軍一等軍醫岡田國太郎氏が起草した「兵士の養性」に序を書いた。十月出征により衛生療病志第五十七號で廢刊した。

公職

五月二十四日恩給局から本年勅令第四十九號により內閣總理大臣の認可を經て內閣恩給局顧問醫を囑託され、七月十一日村田連發銃戰時爆藥數額及徒步兵裝具調査委員を命ぜられた。

日淸間の平和破れ、八月二十四日中路兵站軍醫部長を仰付けられ、十月一日更に第二軍兵站軍醫部長として出征し、十一月二十四日勳六等に敍し瑞寶章を賜はつた。

同二十八年四月二十一日大佐相當官の陸軍軍醫監に任ぜられ、六月臺灣に轉征する事となり、一度廣嶋に歸つたので、次兄が面會に赴いた。六月十五日臺灣總督府から衞生委員を命ぜられ、七月二日同じく衞生事務總長心得を命ぜられ、八月八日第二軍兵站軍醫部長を免じ、臺灣總督府陸軍局軍醫部長を仰付けられた。時の總督は海軍大將樺山資紀伯、陸軍局長は陸軍少將大嶋久直氏であつた。九月二日同部長を免じ、軍醫學校長事務取扱を仰付けられて凱旋し、二十日戰役の功により功四級金鵄勳章並に年金五百圓及び單光旭日章を授けられ、十月三十一日改めて軍醫學校長となり、十一月十五日從五位に敍せられ、十二月二十一日被服裝具陣具及携帶糧食審査委員を命ぜられた。

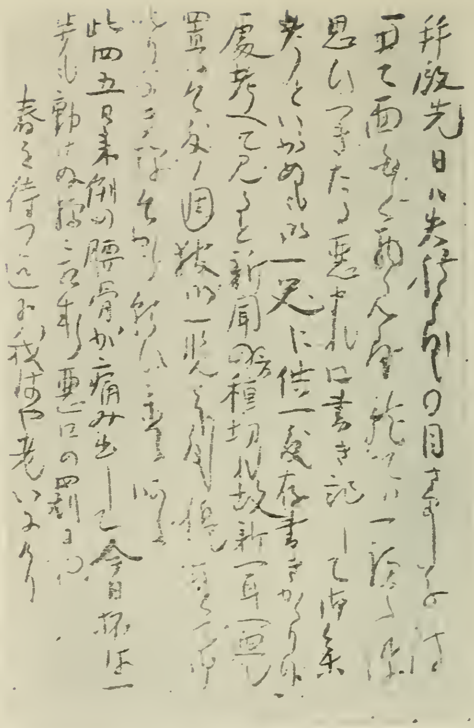
八、目不酔草時代

同二十九年一月三十一日雜誌目不醉草が創刊された。歸休庵の名を以て「鷸翮搔」(卷の六迄續く)、鷗外の名を以て「洋畫南派」を書いた。この創刊號を見て二月一日正岡子規氏の寄せた葉書がある。

拜啓先日は失禮致候○目さまし草待兼て面白く拜見致候就ては一讀之際思ひつきたる惡まれ口書き記して御參考とはいかぬも御一笑に供へ度存書きかかり候處考へて見ると新聞の方種切れ故新聞へ廻し置候今度の週報御一覽被下度候但しあとで御叱りなき樣今から願ひ置候呵呵

此四五日來例の腰骨が痛み出して今日杯は一歩も動けぬ樣に相成候惡口の罰にや

　春を待つ迄に我はや老いにけり

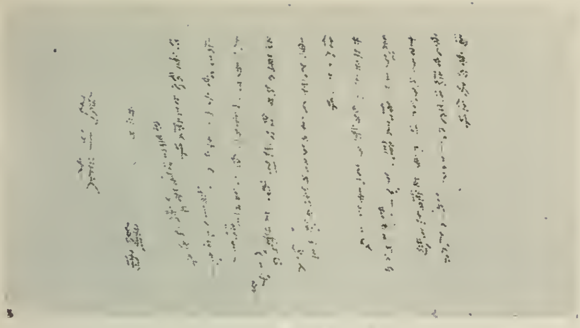


正岡子規氏

この頃までまだ歩いて出かけられたらしいが、これから漸次惡くなつたものであらう。わたくしは正岡氏の日本新聞の週報に書かれたものを見ようと思つて、東京帝大内の明治新聞雜誌文庫へ往つたが、新聞が無いので分らなかつた。

目不醉草卷一は原田直二郎氏の蜘蛛の巢に蝶を配した圖案の表紙で、正太夫の金剛杵、歸休庵の鷸翮搔、竹二

の匪權太、高燕（高須）の稻荷森、虛子の七部集、露伴の司馬溫公、紅葉の風流妄語、鷗外の洋畫南派に、鳴雪、子規、飄亭、碧梧桐、虛子の俳句、霰を詠んだ古人の句とが出てゐる。卷二が出た後の頃虛子氏に贈つた手紙を、松屋吳服店の明治大正文豪遺墨遺品展覽會で寫して置いた。



齋藤緑雨氏

拜見仕候急くことには無之候又三號には少しにても七部集御起草御送り下さるまじきか十五日とは申せども幸田などのが十七八日になることしばしばなれば其位にてもよろしく十五日には評論など纒めて活板にやり跡は待ちても宜く候大根の花紫の大德寺俳句と云ふものは斯うも力を費やさずして面白きことを言はるるものかと驚申候三號には句も少少御出被下度正岡君の許へ御送りにて同君等のを倂せて出すやうになれば尤妙に御座候。

三日　森

高濱雅兄

二月卷二には「獨逸新戲曲」を書き、三月卷三から「三人冗語」と題し、新刊小說の合評を始めた。脫天子は露伴氏、登仙房は正太夫氏の匿名である。卷三には別に「樂塵」一篇がある。三月五日太陽第二卷第五號に「青年小說評判」が載つてゐる。

四月四日父靜男が六十一歲で歿し、向嶋須崎町弘福寺に葬り、法號を俊德院靜山紹泰居士とつけた。父が醫療に熱心な事は襄に述べたが、他の事は一向無頓着で、子供の事は一切母に任せ、趣味としては盆栽いぢりと煎茶、後には小鳥を飼養した。隱居してからは帳面を數冊作つて、新聞に出た小說或は自分が面白いと思つた記事を切拔いて貼付するのを樂みにしてゐた。兄が盛に文壇で戰つてゐた頃は、寄贈される新聞が十種にも達し、兄が關係の事を切り拔いて、あとを家中が讀んでわたくしが父の室に運んで行くと、父は印をつけて置いて翌日それを貼るのである。父は歿するまで眼鏡を用ひず、齒も丈夫で六十になつて氷砂糖を噛割る程であつた。酒は昔は少し飮んださうであるが、わたくしが物心覺えてからは盃を持つた事は無い。煙草は水戶の雲井といふ刻みを好んだが、晩年喘息の氣味から止めて、玉露の相手に上等のカステラか羊羹をたべてゐた。

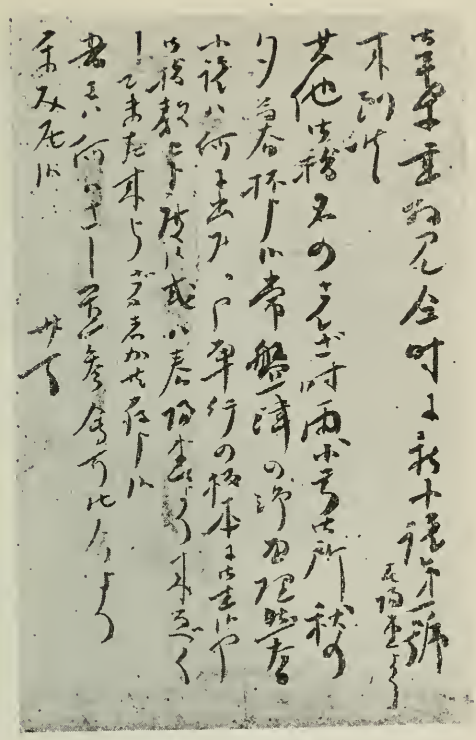
四月二十五日めさまし草卷の四には大村西崖氏と「印度審美說」を、六月三十日卷の六には「園藝略說」を揭げた。

七月二十九日博文館發行文藝俱樂部第二卷第九編臨時增刊海嘯義捐小說に「問答のうた」があり、三十一日めさまし草卷の七に歸休庵の名で「よもの山」がある。

九月二日めさまし草卷の八から三人冗語を「雲中語」と改題し、三人の他に依田學海、饗庭篁村、森田思軒の諸氏が加はつて、每月盛に論議した。寫眞は森田思軒氏の葉書で

御葉書拜見同時に新小說第一號春陽堂より來到仕候其他御指名のさんざ時雨、小弓御所、秋の夕暮抔中候常盤津の淨留理然たる小說は何に出居候や單行の板本に御座候や御指敎被下度候或は春陽堂より來るべくして

まだ來らざる者か共存中候。



森田思軒氏

五日には何はさし置參會可仕今より樂み居候。

卅一日

とあり、常盤津の淨瑠璃然たる小說とは面白い評である。三十日卷の九には「南派源委」、十月卷の十より十二月卷の十二まで歸休庵の名で「孤膽」が載つた。

十二月十八日評論集「都幾久斜」が春陽堂から刊行された。菊判、洋綴、紙裝九九六頁、卷末索引十一頁を添へ、表紙には月草を墨刷淡彩で現はした清雅な體裁である。後品切れとなつて、春陽堂から頻に再版を申出でたが、坪内博士との論戰文が多いために、同博士に對して差控へた。

前年頃から始めたと思ふが、正月十九日の誕生日を祝つて、當日が休日で無い時はそれに近い休日に弟妹を集めて、母と共に食事を共にし、食後の歡談を樂んだ。目不醉草が追追盛になつて、文學者が來出してからは、その中の最も親しい人人をもこの宴に招いた。

九月三十一日小池正直氏と共著「衞生新篇」第一冊が松崎蒼虬堂から刊行され、次で翌年六月十六日第二冊が出た。爾後屢增訂改版合本一冊となり、軍醫學校に入學する軍醫は皆參考書として購求した。

公職

一月二十二日陸軍大學校教官に兼補し、四月十三日又陸軍衞生會議議員を兼ね、十一月二十五日勳五等に敍し瑞寶章を授けられ、十二月十五日戰時衞生事蹟編纂委員を命ぜられた。

同三十年元旦發行の新小說第二年第一卷に獨逸 August Kopisch の「イスキヤ嶋の誕生祭」を「はげあたま」といふ題で譯載し、二月太陽第三卷第二號に「今日の文學界」を寄せた。

五月二十五日岡野紫水氏が發行した新作文庫第一號に「西洋定芝居の始」と題する短篇を寄せた。談話體になつてゐるが、自筆の草稾に鷗外漁史談話と書して、談話の二字を抹消してある。談話筆記の誤謬多きを厭つて自分で書いたものと思はれる。この原稾は昭和八年十二月反町茂雄君の弘文莊待賈古書目第二號に金五拾圓として出てゐた。六月二十五日、七月十八日の第二號、第三號には「劇場の大さ」が掲載され、その原稾も現存してゐるさうである。

同五月二十八日春陽堂から「かげ草」が刊行された。菊判、洋綴、紙裝七二六頁、表紙は濃綠色にて上下の帶狀に井字形としのぶ草とを畫いてある。翻譯「女丈夫、ぬけうり、はげあたま、俘」と、雜纂「レッシングが事を記す、シルレルが醫たりし時の事を記す、石桂堂の遺事、觀潮樓偶記、毒舌」に、姉小金井喜美子の翻譯、創

作を合せ收めた。四十四年九月改訂して、四六判、背クロオス紙裝で刊行した。

五月二十五日目不醉草卷の十七から、新作の合評を止めて、標新領異錄と題して古文藝書の合評をする事となり、左の諸書が評論に附せられた。

まきの十七　五月二十九日　村井長庵巧破傘
まきの十九　七月二十六日　好色一代女
まきの二十　八月二十六日　水滸傳
まきの二十二　十月三十一日　東海道中膝栗毛
まきの二十五　三十一年一月三十日　神靈矢口渡
まきの二十七　四月十七日　琵琶記

この合評の時は、大抵次兄が頭取となつて各一節毎に內容の概略を紹介し、又一人女が出る時は西鶴に精しい淡嶋寒月翁を訪ひてその說を筆記し、水滸傳、琵琶記の時は、支那小說戲曲に通ぜる森槐南氏の說を筆記して載せた。此處に饗庭篁村翁の矢口渡の評に添へて次兄に送つた手紙と、槐南氏が琵琶記の時の葉書とを掲げよう。篁村翁のは

拜啓先日は如例失禮一人にて三四人前の酩酊只只恐縮仕候偖矢口渡の評下手の長談義初段だけにて斯の如し二段目女中勢ぞろひへ原文と近松とを對照致し候ときは是も五枚くらゐあり段段の評の終りに紀上太郎の傳のやうなもの風來異聞ともいふべきを付け候と小生のばかりにてこんなのが十八九枚とも相成べく高い棧敷

へやたら詰は餘りに憚多し女中勢揃だけはヌキに致し可申や是は鷗外先生へ御話し申置候ゆゑ御序に一寸御相談願上候又折返し一寸御一報願度候。

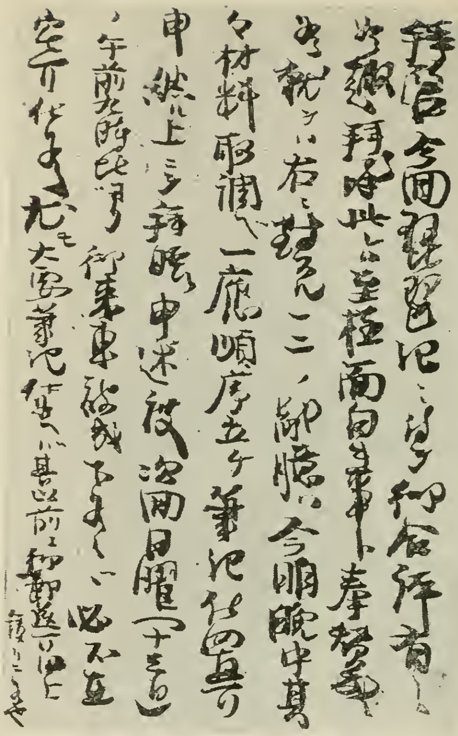
矢口渡文句の評蜀山人の隨筆奴凧（これは博文館の溫知叢書中にも有之候）に有之候是は頭取の御手數ついで、其段段へ御書入有之度候先は珍しく早くかきかけ候ところを褒められん爲見本さし出申候わけに御座候

匆匆

十月十八日　　與三郎

三木様

蜀山曰風來は悪書悪筆此上なしト小生の風來に私淑候ところは此一義に御座候イヨ紙鳶堂丸出しーイ



森槐南氏

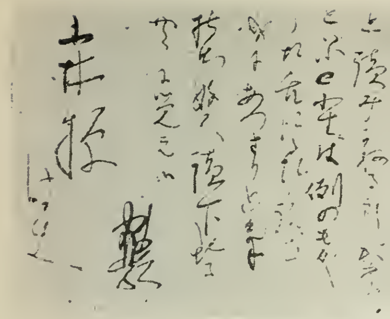
眞面目と輕妙との交つたところに翁の面影が偲ばれる。なほ何日の會の時か忘れたが、例の通り泥醉した處が、ひどい雨が降り出して、十一時頃には根岸の森田思軒氏も谷中の幸田氏も歸られ、篁村翁一人殘つた。十二時近くなつて車を雇ひ、次兄が助けて二階から下りて玄關まで出たが、いきなり

次兄の腕をつかまへて、雨が降つて歸へれないどうしようと、ワアと泣き出されたのには面喰つたが、次兄と車夫とで漸く車に乘せて、向嶋小梅村の宅へ送らせた事もあつた。槐南氏のは琵琶記合評の時のもので、三月九日附である。

　拜啓今回琵琶記ニ付テ御合評有之候趣拜承此レハ至極面白キ事ト奉賛成候就テハ右ニ對スル一二ノ鄙臆ハ今明晩中其其材料取調ベ一應順序立チ筆記仕置可申然ル上ニテ拜晤申述度次回日曜（十三日）ノ午前九時比ヨリ御來車被成下候ハバ必ズ在宅可仕候尤モ大要筆記仕候ヘバ其以前ニ御郵送可申上積リニ候也。

八月一日新小説第二年第八號に「通例人の一生序」がある。當號に揭げられた嵯峨の屋主人作にかかる小說の序で、坪内逍遙氏の序と共に出てゐる。九月の同誌第九卷に洒落本式の小說「そめちがへ」を載せたが、世評は餘り宜しくなかつたやうである。賀古氏の手紙の一節に

　染ちがひ一枚ふとんに枕二つのあたり實景其ままにてどうしても待ち合ひ遊びを知らぬ人の筆になりたりとは思はれぬといふもの多し、きむすめは些と讀みかねる所があるといふ。小生には例のモタモタした話を誠にあつさりと氣持ち好く讀下したるやうに覺え候。


賀古鶴所氏

とある。この小説は創作集「煙塵」に收められる前に、春陽堂が三十四年一月二十九日發行した青簾といふ單行本に、篁村、紅葉、得知、弦齋、南翠、美妙、思軒、三昧、露伴、末松青萍、三宅雪嶺、川崎紫山等諸氏の小說、隨筆と共に收めて發行された事を、岩田準一氏から敎へられた。

九月三十日目不醉草卷の二十一に「復平子尙書」が出た。

醫學

元旦中濱東一郞、靑山胤通等諸博士と謀り、公衆醫事會を設立し、雜誌公衆醫事を發行した。

十月十日公衆醫事第一卷第十號に「狂犬病略說」を掲げた。

公職

三月十九日陸軍大臣子爵高嶋鞆之助の名を以て、勅令第三十五號で陸軍武官官等表改正の件が公布せられ、その附則で「本令發布の際從來の軍醫總監は軍醫監に、軍醫監は一等軍醫正に、一等軍醫正は二等軍醫正に、二等軍醫正は三等軍醫正に、各辭令書を用ゐずして任ぜられたるものとす」と定められた。今迄軍醫部最上級の軍醫總監は少將相當官であつたのを中將とする爲に、新に大尉相當官の一等軍醫の上に少佐相當官の三等軍醫正を設け、順次に軍醫監を少將に相當するやうにしたので、位置は變らぬが、名稱が逆戻りの形となつた。

四月一日明治二十七八年戰役に繼ぎ再び臺灣地方に於て軍務に服し其功少からざるに付き金五百圓を賜ふと賞勳局から發表された。

七月十二日醫務局第一課長小池正直墺國出張不在中同課長事務取扱仰付けられ九ケ月間その事務を取扱つた。

九月十三日兼陸軍大學校教官を免ぜられ、十月十一日中央衞生會溫泉及海水浴取調法委員を命ぜられた。

同三十一年目不醉草二月から「審美新說」を出し初めた。

卷二十六（二月二十八日）、卷二十九（七月八日）、卷三十（八月十九日）、卷三十二（十月三十一日）、卷三十三（十一月三十日）、卷三十五（三十二年二月十八日）、卷三十七（五月三十一日）、卷三十八（七月三十一日）、卷三十九（九月十六日）。

これは Volkertの審美上時事問題 Aesthetische Zeitfragenの梗槩で、三十三年三月二十七日前年の「審美綱領」と同體裁の和裝一冊として春陽堂から出版した。

八月九日から時事新報に「智慧袋」を連載したが、序言に觀潮樓主人と署し、（二）から鷗外譯補となつて、その據る所の原書は不明である。

（一）序言八月九日、（二）十日、（三）十一日、（四）十二日、（五）十三日、（六）十四日、（七）十五日、（八）十七日、（九）十八日、（十）十九日、（十一）二十日、（十二）二十一日、（十三）二十三日、（十四）二十四日、（十五）二十五日、（十六）二十六日、（十七）二十七日、（十八）二十八日、（十九）三十日、（二十）三十一日、（二十一）九月四日、（二十二）六日、（二十三）七日、（二十四）八日、（二十五）九日、（二十六）十日、（二十七）十一日、（二十八）十三日、（二十九）十五日、（三十）十六日、（三十一）十七日、（三十二）十八日、（三十三）二十日、（三十四）二十二日、（三十五）二十三日、（三十六）二十四日、（三十七）二十五日、（三十八）三十日、（三十九）十月一日、（四十）二日、（終）五日。

十一月二十一日西周傳が半紙判和紙和裝で西男爵家から刊行された。養嗣子紳六郎男から依囑により、手記その他の資料によりて編纂し、十月假印刷に附して勝海舟伯以下故人の知友に配布して訂正增補を受け、それを整理したもので、固より非賣品である。十二月四日久米桂一郎、岩村透、大村西崖三氏と合著にかかる「洋畫手引草」が、半紙判和紙和裝一冊として畫報社から刊行された。

醫學衞生

二月二十五日及び三月の公衆醫事第二卷第二號第三號に談話「同感と慈悲と」(市村淳士筆記)を載せ、初夏陸軍二等軍醫正牧山健吉氏著學校衞生學の序を作つた。六月一日公衆醫事第二卷第六號に「甘瞑 Euthanasieの說」。八月同誌第八號彙報欄に「納涼生どのよ」を出した。

公職

十月一日本職を免じ、近衞師團軍醫部長兼軍醫學校長に補せられ、陸軍衞生會議議員は故の如く、十四日偕行社編纂部幹事を囑託せられた。

九、沈默時代

同三十二年一月七日日不醉草卷の三十四から、「雲中獨語」と題して、一人で新刊小說の批評を書いた。

前年から隣家に文科大學教授で、當時猶結髮してゐる根本通明翁が移轉して來られたので、兄は時時往つて周易の講を聞いた。六月八日豐前國小倉に轉任する事になつて暇乞に往つたらば、出立の日に翁は煙管筒のやうに造られた藤四郎吉光作の短刀に

藤四郎吉光作短刀

喬遷ヲ賀シ併テ行旅ノ靈護ニ餞シ奉ル

明治三十二年六月

根本通明

森林太郎樣

と自筆で認められた書付を添へて持參せられた。

兄が東京を去るに臨んで「鷗外漁史を葬むる文」を讀賣新聞に寄せたと二三の評傳に載つてゐるが、それは翌年元旦福岡日日新聞に掲げた「鷗外漁史とは何ぞ」(後に記す)の誤である。兄が陸軍出身以來地方の隊附となつたのは、これが始めの終りであつて、それには種種の經緯があつて、わたくしが現に記憶してゐる事實もあり、又書類も手元に集めてある。關係者も今は大抵故人となつたから、何時かこの一件だけ纒めて發表して置きたいと思つてゐるが、此處には省略して置き、兄が某氏の食言を憤つて辭職しようとしたのを、母やわたくし達兄弟が切諫した爲に思ひ止まつて赴任したといふ事だけ書いて置く。その當時の書いたものに隱流の號を用ひたのも、左遷の意を寓したのである。然し赴任後は師團長井上光中將(後大將男爵)、參謀長山根武亮工兵大佐(後中將男爵)にも深

く信任せられ、又公私の友人も出來て、愉快の日を過した。卷頭の寫眞は出發の前に博文館の大橋乙羽氏が來て撮影したものである。

六月十五日大帝國の創刊號に「山口古庵の事を記す」と題して、嶋原役に籠城した畫家山口右衛門作の事蹟を書いた。二十九日春陽堂から「審美綱領」が和紙和裝二冊として出版された。Eduard von Hartmann の美の哲學 Philosophie des Schoenen の大綱を編述したもので、凡例に「是書は翻譯若くは抄譯に非ず、唯義を取りて編述せるのみ」、又「是書は義を取りて編述すと曰ふと雖も、亦所謂通俗審美學の窠臼に墮つることを避けたり、所以者何といふに、通俗の體は義を取りて全きこと能はず、且その深きを淺からしめ高きを卑からしむる弊は、平素原著者の厭惡する所なればなり」といひ、その「原著の既成審美學系統中相待上最完全なるものと信じて編述」したことも同じ凡例中にいふてある。高山林次郎氏がその批評を帝國文學に出したのを見て、讀賣新聞に書を寄せたのを、九月一日、二日に涉つて「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の書翰」と題して紙上に載せ、四日高山氏が「森氏の書翰に就きて」と題して書かれ、その駁文が十日「審美綱領の批評に對する森鷗外氏の第二信」として載せられた。同月十六日の福岡日日新聞第六千號の記念號に請はれて「我をして九州の富人たらしめば」と題する文を載せたのが、地方新聞に寄書した初めである。これには富者の心掛けを論じ、浪費を戒しめ有益な事業に投資せんことを勸告した。

十月のめさまし草まきの四十から莵狹彥の名を以て「隣のたから」と題し、歐洲文藝家の略傳著書の梗槪を速載したが、

まきの四十　Rudyard Kipling
まきの四十一　Leo Tolstoj
まきの四十二　Gerhart Hauptmann
まきの四十三　Giosue Carducci
まきの四十七　Marie von Ebner-Eschenbach

の五回で止んだ。猶十一月のまきの四十一には猿大海の名を以て「久留米彫畫家傳」と題し、桂永壽、同永保、三谷永伯、同永恕、同永就五人の略傳を載せた。

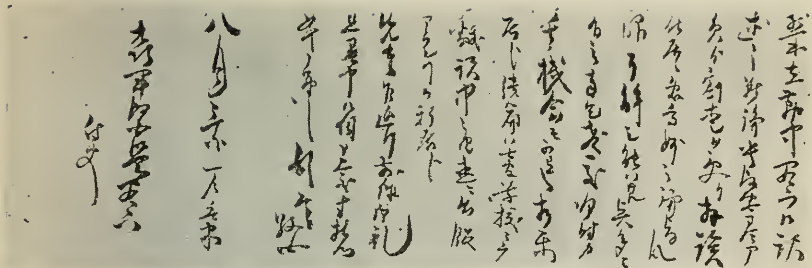
小倉に赴任した半年の後、十二月十九日附でわたくしにくれた書翰に、その頃の起居狀況が記されてゐるから左に揭げて置く。

この頃は午前九時出勤午後三時退出、直ちに衣服を更へて佛語教師の宅に參り、六時に稽古濟み歸りて湯をつかひ晩食し、直ちに葉卷一本啣えて散歩に出で申候、一本がなくなるまで小倉の町を縱横無碍に歩めば、丁度一時間位立ち至極體によろしく候、それにて九時頃に相成申候。それより佛語の手帳を淨書し、又梵語を少しやれば十時半か十一時になり、直ちに寢ることと致し候。それ故何か不意の用が出來ると、大に時間の狂ひが生じ申候。例えば十六日に福岡日日新聞が兼て賴みおきし新年初刊に出すべき原稾を迫り來りし故、書きかけたる手紙の返事を止めて原稾を書かんとして居ると、獸醫部長山根道章頓死の報あり、往つて見れば師團長はじめ詰め切り故その儘列席、夜中に歸り申候。翌十七日は日曜なり、常は午後一時佛語のさらひ

あるを休み、朝から晩まで原稾を書き、例の大きなる新聞の一ペートジを一ぱい塡むる程書き申候。此度のは隨分へんてこなるものにて、「鷗外漁史とは誰ぞ」といふ題に有之候。翌朝少し直して待ち居候使にわたし申候。郵便では遲きゆゑ持つて汽車で福岡へ往くとの事にて候ひき。今十九日は佛語が土曜日の分が淸書してない位の仕合せなれば、役所の隙にさらへておき間に合せ申候。只今散歩より歸りて筆を取り申候。右の一日の時間割は日月水木金と五曜日の事にて、火土の兩曜日には佛語をならひに行くかはりに兵法を講義に行き申候。此方も師團長はじめ大熱心なれば、中中おろそかにはなり不申候。まづざつとこんな工合なれば、どこへ行くにも馬と徒步とに限るゆゑ、運動になり腹が減り、飯のまづいやうなことはいつも無之、東京に居る時よりはこれ丈は體によろしきこと確なりと存候。

文中福岡日日新聞への寄書は元旦の條に記す。兵法とは普魯亞の陸軍大將 Clausewitz の “Ueber den Krieg” を云ひ、その第一卷「戰の本質」、第二卷「戰の理論」は殊に難解を以て聞えてゐる。兄は獨逸留學中に後參謀本部次長で卒した陸軍中將田村怡與造氏が當時大尉で早川姓を稱してゐたのと共に研究した事があるので、井上師團長、山根參謀長の勸めで將校の爲に講義し、師團から石版印刷とし、「戰論」と題して關係者に配布された。後陸軍士官學校に於て佛蘭西譯本 “Théorie de la Grande Guerre” から第三卷以下を重譯して大戰學理と題し、兄の譯二卷を合せて出版した。この事は軍人社會に兄の聲望を重からしめ、山縣元帥に名を知られる因となつた。

一戶兵衛將軍が熊本から金澤第六旅團長に轉任せられて後、三十四年八月三日に發せられた書中に戰論の事が



一戸兵衛將軍

見えるから序に抄出する。

熊本在勤中閣下御譯述之戰論貴師團司令部員ヨリ割愛ヲ受ケ拜讀仕居候處高妙之論旨凡眼了解シ能ハサル點多多有之奉乞敎度何時カ其機會モ可有之相樂居候續篇ハ士官學校ニテ翻譯中之由速ニ出版アラン事ヲ祈居申候。

十二月二十五日毎日電報に加減坊といふ人が文學者總まくりの中に森鷗外を評した。これについて翌年一月母に贈つた手紙に

毎日の記事は確に一度も私と物言ひしことなき人の書きたるものにて人物論は少少かんちがへと存候但しおめでたい人物と見られたるは結局幸に候

と書いてある。

公職

六月八日陸軍軍醫監に任じ、第十二師團軍醫部長に補せられ、二十八日日本赤十字社から福岡支部副長を囑託された。支部長は福岡縣知事である。七月十日正五位に敍せらる。

同三十三年元旦福岡日日新聞に掲げられた「鷗外漁史とは誰ぞ」は、「われ筆を執つて文士と呼ばるるが故に、本職の上に誤解を招くこと多く、彼小說家た

り何ぞ大事に托するに足らんやとの言下に森林太郎を評するに至る、この誤解を避けんが爲に鷗外漁史は死せり」との意を敷衍したのであつて、この一文は當時の文壇の視聽を動かし、新聞雜誌に種種評論された。十五日の大阪朝日新聞には（鷗外漁史とは誰ぞとは何ぞや）、二月五日の中央新聞には黑田湖山氏が（石黑男と鷗外漁史）と題して論じた如きはその一例である。一月八日母に送つた手紙に

四日の御書状拜見いたし候鴨の肉瓶詰及剃刀二箇正に落手仕候潤三郎中學の成績宜しく於莵無事之由承知いたし候祖母樣變ることも無之候哉伺上候

新年には井上中將に野猪一疋贈りしものあり後それを料理して心安きもの四五人招かれ參候中將に或る酒やより額を賴まれたれど何と書くが好きか分らずとの事故魏の武帝（曹操）の何以解レ憂惟有二杜康一（ナニヲモッテカトカンウレヘヲタダアリトカウ）といふ詩より惟有杜康の四字を取りて書かれて可然と申候處お手本になるやうに書初に書けと被申大閉口いたし候併し筆硯唐紙が備へあり中將も無駄書せられ候事故我流にて一尺四方位の大字を書き候處後（おせじながら）三日程習うて書いたと被話候大笑の事に候其晩師團長大分醉はれての話に曰く。一體軍醫部はひどい奴が揃うて居る圓滿のおやぢに對して同盟罷工をやつたがそんな事は步兵にも砲兵にも例のない事だ。又江口の話の出し時師團長曰く。江口のやめるときは森なども手傳つたらう。予曰く。それは中將のお考は大分外と違ふ外では予は小倉へ來たがらぬやうに思ひ居たり辭令を受けしとき陸軍省の連中は首を集めて評議し予のどうするかを伺ひ居るさまなりき。師團長曰く。待て待てその話は後になつてから話さねば行かぬさうすると小說になる（これは私の前途を惡くおもひての言にはあらずと存候）〇中略 右のやうなる事を話して別れ申候

中將はえらいと評判の年少將官なれど甚だ心安く東京にて威張り居る將官とは大に違ひ申候長谷川なども戲談を被申候へども井上中將程打解けたる事は無之候。

八日　林太郎

母上様

又十五日の手紙には

一月八日及九日の御書狀拜見いたし候蠣殼町より福岡日日新聞に出したる「我をして九州の富人たらしめば」と「鷗外漁史とは誰ぞ」とをめさまし草に出すと申來候或は最早活版屋へまはし候やとも存候へども若しまだならば暫く見合せ候樣御申遣被下度候九州にて書きたるものは當方に澤山あり「小倉日記」などの類まだ世に出さぬ都合に候福岡日日は是非書けと申事故止むことを得ず候へども東京では私のものの出るのは嫌ふものが多く出せば直に蜂の巣をつつきたるやうに騷ぐに定まり居り此方には何の益もなく候に付少し見合せ度存候〇めさましには早速別に原稿を書きて送可申候「卽興詩人」「隣のたから」の外にも隙だにあらば有益なるものを書き可申と存じ居候。

とある。初刊の新小說第五年第一號にある「初日の出選評」は、同誌臨時增刊初日の出に揭げた小說の評で、坪內逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴三氏も書いてゐる。十一日から十四日までの東京日日新聞に隱流の名で原田直二郎氏逝去に就いての追想を寄せた。

二月一日の二六新報から千八の名を以て「心頭語」を載せ始め、翌三十四年二月十八日まで八十七回に分載さ

れた。餘り煩はしいからこの掲載日は省くこととする。中には一月に一回しか出ないことがあるので、調査にかなり無駄な手數を費した。序に「續心頭語」の事を此處に書いて置くが、これは三十四年八月二十二日、九月二十五日、十月三日、十四日、十九日、二十三日、二十八日、二十九日、三十日、十一月二十一日、十二月十二日の十二回に分載された。

二月から安田善之助氏（〇現在の善次郎氏）が資本主となり、次兄三木竹二が編輯主任として雜誌「歌舞伎」が創刊された。

三月六日めさまし草卷の四十三に書いた「讀者諸君に告げ奉る辭」は、毎日新聞に載つた加減坊の評論に對する辯駁である。

六月一日歌舞伎第三號に「霄行記」と題して、公用で東京に歸つた折歌舞伎座を覗いた時の雜感を書いた。

七月十四日福岡縣企救郡教育支部會の請によつて、同郡役所で「普通教育の軍人精神に及ぼす影響」を講演し、その速記は福岡日日新聞二十六日より三十日まで連載され、二十九日福岡縣教育會に於て「フリイドリヒ・パウルゼン氏倫理說梗槩」を講演し、その筆記は十二月二十八日發行の福岡縣教育會會報第十六號に載せられた。二十四日二六新報に無名氏の署名で出した「雲峯評」は、新小說第九卷に揭げた露伴、天外、鏡花、靑靑園、曙山、麗水、眉山、風葉、鶴伴、秋聲、魯庵、得知、春葉、抱月諸氏の小說の短評である。

九月一日二六新報に隱流の名で「小包郵便物に就いて」と題する一文を寄せた。これはその頃東京その他から小倉へ送る小包が、食料品のものに限つて故意に破壞するのかと思はれる程の體裁で着する爲、當局の注意を促さうとしたのである。この頃北淸事件が起つて、第十二師團に出兵の命下らんとす形勢があつたので、九月二十

一日博渉會例會で「戰時糧餉談」を講じ、その要旨は福岡日日新聞二十二日、二十三日に載せられた。しかし師團は遂に出兵するに至らなかつた。

十二月二十日臨時軍醫部會議を開き、「隊附軍醫宿直の件」について訓示した。師團の軍醫には勤務時間外に當直があつて、その當直は病院内の勤務で、別に規則はなく順番に好意的に勤めたのであつたが、或時見習士官が中毒したので、病院の當直軍醫に往診を求めた處、院內勤務であるからと往診を拒絕した。よつて他の軍醫に請求すると、或人は病氣といひ或人は事故ありといひて拒絕し、その內に中毒者は死亡した。そこで軍醫の怠慢不親切といふ非難が起つたから、軍醫を招集して「諸士は規定上には抵觸する處はないが、道德上には大なる罪を犯した事になる。若しかの見習士官をして諸士の家族か親戚の一人であつた時に、諸士はこれを拒絕するかどうか。要するに道德上の責任觀念が足らぬからである」と訓諭したのである。

醫學衞生

九月、十月公衆醫事第四卷第七號第八號に「西班牙國首都賣淫制度」を載せ、九月二十一日小倉博渉會で講演した「戰時糧餉談」も、十二月第十號に掲げられた。

同三十四年元旦の福岡日日新聞に「倫理學說の岐路」と「小倉安國寺の記」の二篇を載せた。前者は倫理學ほど諸說の一定しないものは無いとて、近出の一書を取つてその更互相反對する諸方向を列擧し、この岐路旁徑の如何にして生ぜるかを示したもの、後者は小倉市竪町の安國寺の由來と、住持たりし高德の逸事を記したものである。

二月十五日めさまし草卷の四十九から「審美極致論」を出し初め、十月二十五日の卷の五十四で完結し、翌年二月二十五日綱領、新説と同體裁で春陽堂から刊行された。これは Jena 大學教授 Otto Liebmann の實相分析 "Zur Analysis der Wirklichkeit" 中の文二十一篇を鈔出したもので、兄は凡例第二に

翻譯義を謬る、以て翻譯と稱するに足らず、義を傳へて正しきことを得ば、善きことは則ち善からん、未だ美を盡せりとは謂ふ可からず。若し能く筆墨の間、作者の口吻を髣髴するに至らば、翻譯の能事畢れるに庶幾からん。審美極致論は公餘の渉筆なりと雖、亦頗る力を此に用ゐたり。

といふてある。兄のこの翻譯に對する態度は斯樣な論文に止まらず、戯曲小說等に就いても同樣であつたとわたくしは思つてゐる。

三月洋畫家大下藤次郎氏の著水彩畫の栞に序を作り、五月二六新報に無名氏の署名を以て、マキアエリイの著作で小冊子ながら難解を以て知られた「人主策」の提要鈔解を二十四回に分載した。

（一）十二日、（二）十三日、（三）十五日、（四）十七日、（五）十八日、（六）十九日、（七）二十日、（八）二十一日、（九）二十三日、（十）二十四日、（十一）二十六日、（十二）二十八日、（十三）二十九日、（十四）三十日、（十五）六月一日、（十六）三日、（十七）五日、（十八）九日、（十九）十一日、（二十）十四日、（二十一）十七日、（二十二）十九日、（二十三）二十日、（二十四）二十一日。

十一月歌舞伎第十八號に「見聞の儘」と題し、演說、新聞記事等の誤謬四條を指摘した。

母が年來心配した兄の獨身は、小倉でも問題になつてゐたが、大阪控訴院長を勤めた判事荒木博臣氏の長女茂

子との婚約が整ひ、十二月冬休みを利用して歸京、醫學博士岡田和一郎氏の媒酌で婚禮を行ひ、翌年一月相伴ふて歸任した。

醫學その他

八月三十一日公衆醫事第五卷第八號に「脚氣減少は果して麥を以て米に代へたるに因する乎」を掲げ、九月十九日福岡市東公園一方亭にて開催せし博渉會の講演「水の說」も、十月二十五日公衆醫事第五卷第九號に、十二月二十三日小倉偕行社の講演「北淸事件の一面の觀察」も、翌三十五年五月二十五日同誌第六卷第三號に載せられた。

一〇、藝文及び萬年艸時代

同三十五年元旦の福岡日日新聞に未定稾「卽非年譜」、門司新報に「和氣淸麻呂と足立山」を載せた。黄檗の名僧卽非禪師は小倉藩主小笠原忠眞の歸依を得、福聚寺を建立して師を開山とした。寛文十一年五月二十日病みて此處に逝く、世壽五十六、法臘三十九、二三の書によりて禪師の年譜を作つたのである。後者には和氣淸麻呂が神護景雲三年道鏡の怒に會ふて大隅國に配流せられ、足の筋を斷たれたが、豐前國に至りて宇佐八幡の神託により、足立山の麓に湧き出でし溫泉に浴し、足故の如く癒ゆるとの傳說の考證を試みた。心の花第六卷第一號に

はゆめみるひとの名で長詩「鶯の巣」を寄せた。

二月二十五日めさまし草が卷の五十六で廢刊した。三月十五日金港堂から佐佐醒雪氏主宰で文藝界が創刊され、兄は「譯文一則」を寄せたのが「情學は以て科學として立するに足るか」である。

三月東京に轉任する事となり、二十四日小倉偕行社の送別會に「洋學の盛衰を論ず」を講演し、その筆記は六月十日公衆醫事第六卷第四號及び十五日第五號に載つてゐる。

小倉に殘した事業として山田弘倫博士の「軍醫としての鷗外先生」に擧げられたのは、(一)偕行社管理の下に醫學研究所を附設し、將校及びその家族診療の便を圖り、差支なき限り一般地方人の診療に應ずることとした事。(二)歩兵第十四聯隊の井戸掘下げをなして炭層に到達し、分析の結果優良炭なるを確め、師團長に報告し、その結果紫河河口左岸地區は爾來海軍用地となつた事。(三)第十四聯隊の給水法として紫河河岸陸軍用地に鑿井してタンクを設くる事となり、射擊場附近に位置を選定した、これが現今小倉造兵工廠給水タンクである。(四)小倉市は一般に水質不良で、水量も豐富ならぬ所多く、且防疫上よりも必要があつた爲に、軍隊衞生の目的を達すると同時に、軍用過剩の水量を更に市中に供給すべき方針を以て、水源地を紫河上流金邊峠の谷に探窮し、遂に淨水道が設置さるるに至つた、是が小倉市現在の淨水道の基礎である事等が算せられる。

わたくしが山田博士の著によつて敎へられた事には、猶歩兵大佐大島貞恭氏の銅像銘を撰んだ話がある。

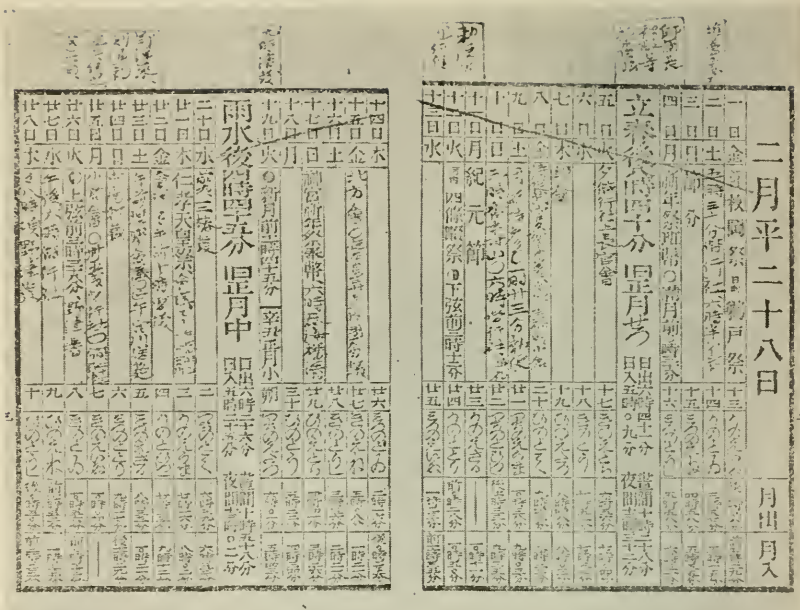
大嶋先生銅像

用兵之道　傳自西方　疇若厥事　乃翁濫觴

先生紹業　典則益彰　祗承王命　陶冶治良
都征淸役　我武維揚　門下多士　千載流芳

といふので、小倉在勤中東京からの依賴で撰んだのださうである。

兄は三十二年六月中旬着任當時小倉驛に近い立見といふ宿屋に居り、次で鍛冶町に借屋してそれに住し、十二月から馬借町のカトリツク敎會牧師の許に通つて佛蘭西語を學び、また梵語の研究をし、翌年暮に京町に移轉した。在勤中の私的生活は後の創作「鷄」「獨身」等でその一班が窺はれ、同地で獨逸語學者福間博氏、安國寺住職玉水俊虠師といふ僧侶二人の友を得た事は同じ「二人の友」に寫されてゐる。福間氏は石見國安濃郡刺鹿村の人、獨逸語に精通して東京に居つたが、兄の跡を追つて小倉に來たのである。兄はその造詣の程度を試みて、靑年士官の獨語敎授に推薦し、三十四年八月山口高等學校に赴任したが、兄が東京に轉任すると間も無く山口を辭して上京し、後第一高等學校の敎師となり、四十三年喉頭癌で歿した。玉水師は豐前國企救郡松ケ江村の人、小倉市外の安國寺に住し、兄に唯識論の講義をし、兄からは獨逸語の哲學入門の講を聽いてゐた。兄が轉任すると直ぐ上京し、根津の下宿に福間氏と同居して觀潮樓へ日參し、母や家族に佛敎の講義をした。兄が日露役に出征中病に罹り、房州に轉地して療養を加へ、後小倉に歸つて市外西谷村三岳護聖寺に住職となつたが、その示寂は何年かわたくしは知らない。於菟の時時の父鷗外には福間氏よりもやや先に寂されたやうに書いてあるが、門司市の吉永卯太郎氏が寫し送られた、四十三年十一月十四日附で玉水師に送つた兄の書狀があるから、その示寂はもつと後であらうと思ふ。



公私の會合等を記入して覺書に代用した明治三十四年の略暦

大分の人矢頭良一氏といふ青年は科學的頭腦の持主で、燕の飛ぶのを見て空中飛行器の發明を思ひ付いたが、その考案を實地に應用する資力がない爲に、自動計算器を發明してその賣上げを以て飛行器の完成を期し、一器で加減乘除ともに出來る計算器を作つたので、兄が感心して大學教授などにも紹介し、種種世話をしたが、眞の目的を達せぬうちに病死した。

　兄は小倉に居つた時は神部署發行の略暦を公私の會合その他の覺書とし、後から日記に詳しく書する事にしてゐた。わたくしは小倉日記の中から、檢閲視察等で旅行の途次見聞した舊蹟名墓を抄出して、帝國古蹟調査會の雜誌古蹟に寄せた事がある。

小倉から母に寄せた書簡は、わたくしが着信

の順序に重ねて綴ぢて數冊を作つたが、後廢毀して多くは新聞切拔きを貼る臺紙にした。古い切貼帖は蠹蝕が甚だしくなつて、明治二十年以來のものを悉く燒いてしまつた。わたくしは貴重な文學資料であるから、如何にもして保存して置きたいものと思つたが、當時まだ學生の身分で母や兄と同居し、一室を書齋にも寢室にもするのであり、切貼帖は數十冊あつて動かせば煙の如く蠹魚の糞が飛散する有樣であるから、殘念ながら灰とするのを見て居つた。

四月一日太陽第十三卷第五號に新體詩に關する談話筆記が出てゐる。三日竹柏會大會に「マアテルリンクの脚本」といふ題で講演し、その筆記は六月一日心の花第六卷第六號に載せられ、翌年八月一日歌舞伎第三十九號に轉載した。

五月一日歌舞伎第二十四號に、觀潮樓主人の名で「ハムレットと烏雞國太子と」と題し、ハムレットと支那小說西遊記中の烏雞國太子とその事蹟の類似點を述べ、この頗似は偶然なるか、又印度古傳說中更にこの二說話の本源があるのではないか、好事の士は檢討して可なりと結んである。

六月一日歌舞伎第二十五號にしほや主人口述、春浦生筆記として「ミセス·バアトリング·カンペル」が載つた。二十五日上田敏氏の藝苑と合同して「藝文」が創刊された。この合同の橋渡しは千葉鑛藏氏であつて、兄が前年結婚のために歸京中、千葉氏からその話が持出され、今年轉任歸京して具體的に進み、五月中旬その頃根岸に在つた料亭岡野で兄と次兄と、上田氏の他に平田禿木、畔柳芥舟、登張竹風、戸川秋骨の諸氏とが會合し、雜誌の內容體裁等に就いて相談し、下旬又觀潮樓に各自書いたものを持寄り、題號を藝文と定めて文友館書店から發行

する事となつたのである。この藝文は八月十一日第二號を出した後、文友館と衝突を起して、十月十五日「萬年艸」と改題し、更めて巻第一から刊行する事となつた。藝文巻第一には、「題辭」「やまひこ上　りんたらう」「審美假象　森鷗外」「卒塔婆小町合評　森隱流」、八月十一日巻第二には、「分身、受戒　無名氏」「やまひこ中」「金色夜叉合評　森隱流」「きつねばな　一園丁」が載つてゐる。萬年艸となつて十月十五日巻第一に「題辭」「やまひこ下」「心中萬年艸合評　森隱流」「藝文巻第一評語集　發行人某」、十一月十五日巻第二に韻語「ほうぐ（筆）ゆめみるひと」「やまひこ」「藝文第二評語集」、十二月三十一日巻第三に韻語「ほうぐ（遠近）ゆめみるひと」「倶舍論達意中の洋說　森林太郎」「萬年艸第一評語集」がある。

七月十日明星第三巻第一號に森しづかの名で「安語」、八月九月の歌舞伎第二十七、二十八號にしほや主人の名で「俳優學校の必要を論ず」、十一月の同誌第三十號に「袈裟と王旻が妻と」兩者事蹟の相似を記した。

九月十一日丸善書店の學燈第六十四號に「ヂュウリング氏の著書目錄」、十一月一日の同誌第六十六號にその訂正增補「前號のヂュウリング氏著書目錄に就て」を寄せた。

十一月伊原青青園氏の著市川團十郎に序を書き、十二月二十九日伊井蓉峰のために作つた「玉匣兩浦嶋」が、縱五寸、横三寸七分、四十三頁の小形假綴、長原止水氏圖案の紙裝で、歌舞伎號外として刊行された。

醫學その他

七月二十五日公衆醫事第六巻第六號に「陸軍衛生部學術研究會の實施方法に關する所見」を掲げ、是月恩田重信氏編獨羅和譯新醫學大辭典に序を書いた。

三月十四日本職を免じ第一師團軍醫部長に補せられた。

公　職

同三十六年一月一日心の花第七卷第一號に長詩「小犬」を寄せ、歌舞伎第三十二號に「玉匣兩浦嶋自註」を載せ、二日から市村座で伊井蓉峰の浦嶋太郎、兒島文衞の乙姫、福嶋清の後の浦嶋太郎、市川粂八の赤女で上演された。これが兄の作の舞臺に上つた最初である。同月長女茉莉が生れ、原抱一庵譯聖人歟盜賊歟の序を作つた。

二月一日歌舞伎第三十三號に「浦嶋初度の興行に就て」、二十一日萬年艸卷第四に「ほうぐ（ふたり）」、「唐土一代男」（梗槩）、「新社會合評」「萬年艸第二評語集」を載せた。二十八日久米桂一郎氏と同選「藝用解剖學（骨論之部）」が畫報社から出版された。菊判、洋綴、クロオス裝二一六頁、圖版が七十二面挿入してある。三十八年十二月十三日卷尾に全身筋肉概目十頁を補ひ、全體に訂正を加へて再版された。三月一日歌舞伎第四十四號に川上音次郎の劇を批評した「明治座のオセロ」と、落語を伊井蓉峰が劇に演じた「芝濱の革財布の出典」とを口述し、鈴木春浦君の筆記したのが載つた。

四月十四日萬年艸卷第五に「ほうぐ（火浣布）」、逸名氏の名で「譯詩四首（山のあなた、秋　わかれ、水無月）」、戀川春町作金金先生榮花夢、芝全交作大悲の千祿本二種の黃表紙の合評（六月五日卷第六に連載）が載つた。

五月十五日學鐙第七年臨時號に "Zusammenstellung Wichtigster Erscheinungen im Gebiete der Modernen Novellistik und Dramatik" を揭げたが、その緒言の獨逸文を讀んだ獨逸人某博士が見て、「他國人の書いた獨逸文で斯の如く美はしいのは見た事が無い」と激賞したさうである。この投稿に關した兄と內田魯庵氏との書翰が

殘つてゐる。兄のは齋藤昌三氏の所藏で、

鑛物字書御贈被下奉謝候。三十枚とは少少おどろき候へども何とか可仕存居候書名のみが並ばぬやうに文句を入れることも工夫可仕候Maeterlink この頃少少讀み進み候その Mystik は素人哲學たることを免かれざるべしと雖も論文中の譬喩などいかにも觀照的にして人にはつとおもはせるところあり感服と存候

三月二十七日

魯庵翁の著おもひ出す人人の鷗外博士の追憶中に

或る時尋ねると極細い眞書きで精精と寫し物をしてゐるので、何を寫してゐるかと訊くと、其頃地學雜誌に連揭中の「鑛物字書」であつた。ソンナものを寫すのは馬鹿馬鹿しい、近日丸善から出版されると云ふと、然うかイイ事を聞いた、無駄骨折をせずとも濟んだと云つた。（夫から一と月ほどして出版されたのを寄送すると、大遍喜んで禮狀をよこした。）

とあるのは、この時の事である　字書を送る時に臨時增刊の原稿をも賴んだのであらう。原稿が出來て兄から校正の事を申込んだと見えて、翁が返事の葉書はわたくしの處にある。

御はがき拜承印刷所の都合に由り些か延引仕候へども明日中に悉皆原稿交附（玉稿はすでに渡しおき候）凡そ一週日後に校正回附の事と存じ候御仰も有之候事なれば無論校正相願可申候也

四月十七日

牛込區東五軒町
內田貢

とある。六月の第七年第六號に「前に投寄せし獨逸文書目の補遺訂正」が出てゐる。

六月一日歌舞伎第三十七號に「公平新聞（序幕）」の口譯が出て、翌三十七年一月の第四十四號、三月の第四十六號に載つたが、出征のため中絶し、後に大久保榮君が第四幕以下を續譯した。これが歐洲劇梗槩口譯の最初で、皆鈴木春浦君が筆記した。六日萬年艸卷第六にイプセンの「牧師」を譯し、原作の第二幕を第一幕とし、九月二十三日卷第八に第二幕を載せたが、完成をせず單行本にもならなかつた。卷第六にはこの他に韻語「ほうぐ（燈）」が載つてゐる。六日國語漢文學會に於て「人種哲學梗槩」を講演した。これは佛蘭西人 Gobineau 伯の Rassenphilosophie に據つたもので、十月二十一日春陽堂から菊判、假綴、紙裝で刊行した。

七月一日東洋畫報第一卷第五號に「春朝秋夕」を載せた。D'Annunzioの作つた一幕物「春朝夢」「秋夕夢」の粗筋を書いたものである。

九月十五日薩摩琵琶歌「長宗我部信親」が曩の「玉匣兩浦嶋」と同一體裁で國光社から出版された。これは醫學博士弘田長氏の委囑で作つたもので、兄は一日夕食後にわたくしを連れて帝國圖書館に往き、閉館の眞際まで殘つて當時の軍記及び九州の地誌地圖を調査し、その結果を翌月萬年艸卷第九に「長宗我部信親自註」と題して載せた。この歌が出來上つた時は、觀潮樓の階下八疊の座敷に、京橋に開業してゐた次兄、小金井の姉及び母、わたくし等を集めて朗讀した。或人がこれを小倉時代の作といふのは誤である。卷第九にはその他に、江村學人

の言語の起原の後に「言語の起原附言」と、妄人の名で「妄語」（翌年元旦の巻第十、二月十日の巻第十一、三月十五日の巻第十二に連載）が載つてゐる。

十一月二十八日早稲田大學の課外講義に Samson-Himmelstjerna の "Die gelbe Gefahr als Moralproblem" の大要を講じ、三十七年五月三日春陽堂から「黄禍論梗槪」と題し、曩の「人種哲學梗槪」と同體裁で出版した。

十二月一日歌舞伎第四十三號に「マアテルリンクの脚本」に接續する「脚本モンナワンナの梗槪」が出た。

その頃帝大の學生であつた小山内薫氏も、是年あたりから觀潮樓へ來られたらしい。わたくしも友人平塚篤君に連れられて、初て同君を訪問し、八千代女史にも姉君にも會つた。又氏の手を經て鶯亭金升氏から先師梅亭金鵞自筆の草雙紙草稾を一冊貰つた事もある。八千代女史は母に大層愛されて、その岡田三郎助畫伯に嫁せられた媒酌は三宅克己畫伯であるが、その橋渡しは母であつた。

醫學衞生

四月八日八社會で「衞生談」を講じ、その筆記は五月十日公衆醫事第七卷第二號に載せられた。

日露兩國間の風雲急なるを觀て、十月三十一日軍醫學會に於て「千八百十二年拿破崙第一世露國侵入時の軍隊病類」を講演し、同月十五日、翌年一月十二日の公衆醫事第七卷、第七、八號にその筆記が載つた。

十一、日露戰役出征

同三十七年元旦の萬年艸卷第十に「安語」（二月十日卷第十一、三月十五日卷第十二に連載）の他に「萬年艸卷第三至第九評語集」、歌舞伎第四十四號に隱流口述として「脚本公平新聞の筋書」、（三月第四十六號で出征の爲中絶し、以下は大久保榮君が稾を繼いだ）心の花第八卷第一號に「膠山絹海帖序」が出た。十七日例年の誕生小集と送別とを兼ねて知友を招いた。その人人は上田柳村、畔柳芥舟、千葉掬香、小山内薰、北里龍堂、伊原青青園、久保田米仝、川尻清潭、伊井蓉峰、大久保榮、鈴木春浦の諸氏に次兄とわたくしとが加はつた。

一月十九日乃木希典大將が第一師團軍醫部に兄を訪はれたが、會不在であつた爲手紙を遺され、翌日又使者を以て書を送られた。長子勝典少尉が求めたいといふ獨逸小說の可否を照會されたものである。それに就ての囘答に對する禮狀と、以上三通を後に表裝して家藏とし、又兄の自筆を以て寫したのに識語を添へたのが、麹町の乃木講家元町田金六氏に藏せられてゐる。大將の書狀は

其一

舌　代

獨乙文學書之儀に付御指教相願度参上仕候明日明後日午前中は在宅不仕候得共右兩日之中師團司令部へ御出

務相成候節一寸御しらせ被下候得者御役所へ可罷出候間此段御許容相願候　頓首

一月十九日　　乃木希典

森　仁兄　尊下

其　二

拝啓

昨日御留守に申上置候御願之儀今日は無據終日不在候間明日にも又又從是可相伺候此段御違約謝罪迄如此候　頓首

一月廿日　　希典

森　仁兄　尊下

其　三

拝啓

愈御勇健奉賀候然は過日御教示に據り本人え申遣はし候處全く友人等之噂に依り一讀之念を起し候迄の事と申越候就而は尊臺御著述之水泡集幷に其中に御加へ相成候詩の原書相求め度申候水泡集は何店に有之候哉未だ拝讀も不仕候間自分も一讀仕度且又右申上候如き原書の有之候向は御示奉願度候右御願迄如此候　頓首

一月廿五日　　　　　　　　希　典

森　賢　臺　尊下

右三通は明治三十七年の初に將軍の子息が獨逸の小說を讀まむと欲して將軍に共書を買はむことを請ひしに將軍そは書の善惡を森に問ひたる上にて許すべしとて予と往復したまひし時の東牘なり

大正十年三月二十日　　　　森　林　太　郎記

兄の識語は

とある。將軍の書面の鄭重なると共に、嚴格な中にも子息のためを思はるる至情が伺はれて、自ら頭の下がるを覺える。兄が乃木將軍の知遇を得て、外國語に關する件を多く相談された事は、佐佐木信綱氏のやまとところの後に書いた兄の「戴冠詩人」の中に見えてゐる。前記町田氏は乃木將軍の崇拜家であると共に、軍人の筆蹟、遺品などを蒐集せられて居り、兄のものでは詩を書いた扇子、陶器の他に、陸軍省で辨當代りにした燒芋を乾固めて桐箱に入れ、大迫尙敏大將、摺澤靜夫中將に箱書をして貰つて所藏し、わたくしの宅へも持參して見せられた。

一月下旬第二軍軍醫部長を仰付けられ、軍司令官奥保鞏大將の幕僚となり、「第二軍の歌」を作つたのが二月一日心の花第八卷第二號を初め地方新聞にまでも載せられた。

二月二十五日國文學第六十二號萩の家主人追悼錄に一文が載つたが、曩に明星の追悼號に掲げられたものと同じである。

三月一日歌舞伎第四十六號にそれがしの名で「獨逸ズウデルマン氏の脚本について」、心の花第八巻第三號に新體詩「寫眞」を載せ、十四日富士川游氏著日本醫學史の序を作つた。萬年艸は三月十五日巻第十二に「讀者諸君に告げまゐらす」の一文を掲げて廢刊した。三十一日歌舞伎臨時刊行第四十七號として脚本「日蓮上人辻說法」を出した。菊判、紙裝十二頁、久保田米僊氏表紙繪、口繪に作者及び主役の寫眞一葉がある。

四月二十四日讀賣新聞に森高湛未成稾として「無題」、五月一日歌舞伎第四十九號に「諸新聞の日蓮評」、七月第五十一號に「批評子の無學」、八月心の花第八巻第八號に短歌「ゆめ」、九月第九號に「太子河の邊より」として短歌及び漢詩が載つた。

第二軍は第一、第三、第四の三箇師團で編成せられ、軍司令部は四月二十一日御用船八幡丸に搭じて宇品港を發し、二十四日海州灣に於て聯合艦隊司令長官東鄉平八郎大將と會見し、五月八日猴兒石より上陸し、軍の主力は二十五、六兩日敵を攻擊して金州及び南山を占領し、六月十四、五日南下の敵を得利寺で擊破、十七日渡樹、蓋平に前進した。此日から七月四日までの間に兵卒は夏衣袴に更衣した。七月六日より九日まで蓋平附近の戰鬪に參加し、次で轉戰又轉戰、二十三日より二十五日まで大石橋附近の戰あり、後數日此處に駐まり、二十九日より八月三日に亘り更に海城附近占領の戰に加はり、同月二十六日前進を起し、二十八日沙河の線に進出、三十日首山堡附近の戰、九月二、三兩日遼陽城外の戰に參加した。博文館の從軍寫眞班等が寫眞にある兄の顎髯をのばしたのは、沙河の對陣頃からであるらしい。

寺崎廣業畫伯は第二軍に從つて、金州、南山の戰を觀、その後旅順二〇三高地攻擊の狀を觀られ、次で病を得

て歸朝し、年內であつたと思ふが（或は翌年春かも知れない）一日觀潮樓を訪ふて見聞を語られた。その話の中で今もわたくしの印象に殘つてゐるのは、五月二十七日南山攻擊の壯烈な狀況と、十一月三十日の夕闇に乃木司令官の二子保典少尉の屍を負へる從卒が、司令官とも氣付かずその狀況を語つて野戰病院の所在を問ふた事との二つである。後に歌日記を見ると、前者は「唇の血」、後者は「乃木將軍」と題して記されてゐた。田山花袋氏は博文館の從軍記者として、大分長い間從軍され、營口でハインツ・タヲヲテの「死體マリイ」とアナトオル・フランスの「蜂姬」とを獲て兄に贈り、兄は海城に近い陣營に夜の小閒を偸んで之を讀み、燈下に筆を執つて梗槩を書いたのが、六月一日心の花第八卷第六號に「營口で獲た二書の解題」と題して載せられた。田山氏も歸朝後一度來て話されたが、寺崎氏の快活な話し振と違つてゐた爲か、氏の語つた中からは何にも記憶に殘つてゐない。

遼陽占領の後舍營地內で軍夫が便所の穴を掘る時古墳に探り當て、發掘して人骨、土器及び漢時代の五銖錢數枚を獲、人骨は小金井の義兄に贈り、土器と古錢はわたくしに送られて、今も所藏してゐる。後に東京帝國大學から出張した鳥居龍藏氏も同樣のものを得られたさうである。

上　演

自四月一日　日蓮上人辻說法　歌舞伎座

日蓮上人　市川八百藏　　進士善春　市村羽左衞門
比企能本　片岡　市藏　　娘　妙　尾上　梅　幸
放　下　尾上菊五郞　　放　下　中村吉右衞門

敍位敍勳

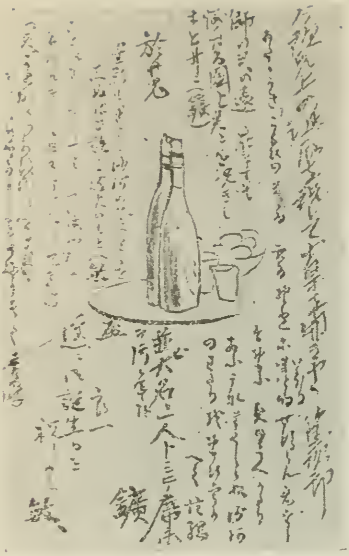
九月十三日從四位に敍し、十一月二十九日勳三等に敍し瑞寶章を授けられた。

同三十八年元旦心の花第九卷第一號に「陣中手束」、二月第二號に「犬の聲（新體詩一、短歌一）」と戰地との贈答があり、三月第三號に長歌一篇、四月第四號に「陣中手束」、五月第五號に「戰地より（文章と短歌七）」、六月第六號に、戰地より（短歌二）」、七月第七號に新體詩二、歌二、九月第九號に「戰地より（短歌七）」がある。

一月二十一日誕辰祝を觀潮樓に開き、來會者一同で葉書に寄合書をして戰地に贈つた。最初に次兄が

今夜兄上の誕辰を祝して小集を開き申候　　篤次郎

次に佐佐木信綱氏が



明治三十八年一月誕辰記念小集
席上より戰地に送れる寄合書

あたたかきこよひのまとゐ雪の野邊にいほりせすらん君をしそおもふ　君のうへかたりあふかなまたしらぬ沙河のわたりをおもひうかへて　信綱

千葉鑛藏氏は

並ビ大名ノ一人トシテ席末ヲ汚シ申候　鑛

師の君の遠く在ますそ戀なる國と君とを祝きしまとゐに

上田敏氏は

遥に御誕生日を祝し申候　敏

星影も異なる沙河の冬のそらをしぬはひ語る燈火のもと

大久保榮君は中央に麥酒瓶、コップ菓物鉢を畫き

ことほきのかきりつくしていはふかな君あれましし日にまとゐして　さかえ

最後に小金井の姉は

君かことかたりあひつつふくる夜におとしめやかにあめふりそそく　喜美子

と書いてある。

戰地では一月二十五日黑溝臺の會戰があつて、時は滿洲の極寒期であり、戰鬪頗る壯烈を極め、數夜氷雪上に行動した爲に我兵員の凍傷に罹つた者が少なくなかつた。

兄は部下及び病院等からの報告を綜合して「黑溝臺附近會戰に於ける低氣溫の戰鬪狀態、創傷及衞生勤務に及ぼす關係詳報」と題し、軍醫團雜誌に公表した。

二月十八日夜より鴨綠江軍は敵の左側に策動し、三月八日馬軍鄲附近の敵を攻擊するに至つたので、第二軍は逐次左翼より前進し、軍は渾河兩岸の敵を擊退して奉天西南方に進出、三月四日林監堡、東勝堡の線を占領、八日諸軍は一齊に敵を追擊し、九、十兩日第二軍第三軍と共に全く敵を奉天に包圍し、遂に大勝を博し、北方の敵兵掃蕩の後第二軍は現地に停止し、他の諸軍は鐵嶺附近に之を追擊し、十六日に至つて共行動を中止して戰力の恢復を圖つた。

當時兄は各軍軍醫部長中の故參として、奉天戰後殘留せし露國赤十字社關係の諸員を歸還せしむるに當つての處置取扱の全權を荷つて非常の苦心をしたが、屢起らんとした難問題も圓滿な解決を告げた。昭和九年三月刊行された陸軍軍醫總監醫學博士山田弘倫氏の「軍醫としての鷗外先生」と題する著書にその事情が精しく記されてゐる。上述せる第二軍の行動も同書によつて敎へられた。兄自身の行動は、歌日記に日附と場所とが記入してあるので知る事が出來る。

四月「陣中三人記のはしがき」が成つた。陣中三人記は第二軍司令部の參謀騎兵中佐鈴木莊六（後參謀總長大將）同歩兵少佐金谷範三（後參謀總長大將）、同高柳保太郎（後中將）の三氏が陣中生活を小說體にして、十日毎に交代して書いたもので、當時同軍の從軍記者坪谷善四郎氏が金谷氏より記念に貰ひ受け、大正十五年七月一日新靑年第七卷第八號に一部分を抄錄發表された。

兄は奉天占領後城內の骨董店で、朝鮮宣祖の朝に名醫許浚が主任となつて編纂し、光海君の五年（慶長十八年皇紀二二七三年）板行された東醫寶鑑二十五卷を求め、それを知らされた書狀に銀何圓で購入したとあつたので、その意味を聞いた處、次の便中に

東醫寶鑑は運搬途中也、銀何圓とは銀票何圓をいふ內地の錢幣卽金票に換ふるときは一割引となるといふて、戰時發行の銀票二種と、奉天に行はれた支那紙幣とを送つて來た。

十月二十三日凱旋順序を示され、三十九年一月元旦出發と定まつて、「からの煠今一度はいて歸れとや　歸休庵」と書いた葉書を送つてくれた。戰時中の長詩短歌は心の花、明星及び妻子、わたくし共兄弟、知友に葉書に

認めて贈られ、又自分でノオトに書留めて置いたので、四十年九月十五日に春陽堂から「歌日記」と題し、四六判、洋綴、布裝四八七頁、葦原綠子氏の寫生畫二十七葉、久保田米斎氏の畫六葉、寺崎廣業氏の木版彩色畫一葉、寫眞版八葉を挿入して刊行した。

佐藤春夫氏は「歌日記」に據つて陣中の竪琴と題する記事を昭和九年三月一日發行の雜誌文藝第二卷第三號に載せられ、六月於菟の「父鷗外の陣中消息と凱旋」の一文を附し昭和書房から多くの圖版を加へて刊行された。於菟は陣中から貰つた葉書を集めて、雜誌冬柏第五卷第五號に載せた。わたくしの手許にあるのは明治三十八年中の發信で、最初に贈られたのが軍司令官奧大將、參謀長大迫尙道少將、砲兵部長稅所篤文少將自署のもので、七月六日の消印がある。以下日附の順に並べて寫さう。

七月十三日（當方より送りし繪葉書）

うつほ木の舟なす皮をはきて布く窩集のなつにわれあこかれぬ　注云窩集は北滿洲の大林なり（歌日記に「七月十三日於古城堡」二首の第二にある。）

同十四日

これは學校の恤兵葉書なり〇南山葉書はなし〇東醫寶鑑は運搬途中也〇銀何圓とは銀票何圓をいふ內地の錢幣卽金票に換ふるときは一割引となる〇於菟の太公感狀を受くる繪葉書着す（東醫寶鑑の事は本文に記した。）

八月八日（陸軍恤兵部繪葉書）

健啖す暦とほりのけさの秋　　歸休庵　（歌日記「八月八日於古城堡」六句あれどこの句無し。）

九月二十三日

あららきの仆れもやせんいくさ皆石かきとりて家つとにせは　　高湛（歌日記「九月六日古城堡より遼河の邊なる古城子に往くとき雙樓臺の下を過ぐ」と前書あり。）

十月七日（奉天宗廟の一部を示す寫眞葉書）

かささきの天つをとめにはませしはこの世をかりのやとり木の實か　　高湛（歌日記「四月二十七日於昭陵」の二首一句の中にあり。）

同月九日

かりきひの戈を偃せたり露の中　　歸休庵（歌日記「九月二十二日古城堡より亮合堡にゆく」と前書す。）

何窩棚何地黃なるもみち哉　　歸休庵（歌日記「十月七日古城堡より長嶺子に往く」と前書す。右二葉とも戰地發行第三師團慰勞會記念葉書に書す。）

投鋒や大魚逸する天の川　　歸休庵（歌日記前書「明治三十七年九月九日於遼陽」、句は日記に「大魚逸して」とあり、戰地發行遼陽戰鬪記念葉書に認む。）

同月二十一日

めてんとはすれと迷のこき烟まつ目に浮ふ畑のはなけし　　源高湛（歌日記「明治三十七年六月十六日於尖山子」二首一句の先頭にあり、米國製支那人阿片吸入の繪葉書に認む。）

同月二十二日

まだ何も書いて出さずにこちらにある繪葉書に大い人形が艸の中に竝んでゐるのと塔とはあれはどこの景色ですか（問はれた葉書の景は今覺えず、送られたるは恤兵部葉書の陣中溫浴と題する圖にて甕の風呂に浴せる男と窗より顏を出せる女とを畫き、中間に？を墨書せり。）

十二月十五日

木からしに大天幕のあふり哉（歌日記「十月十七日於古城堡」の中戰地發行遼陽塔寫生畫の葉書に認む。）

同月十六日

魂を招くこと遠からすあきの空　歸休庵（歌日記「九月二十四日於達蓮臺祭場」とし、末句秋の風とあり、戰地發行第二軍招魂祭記念葉書に認む。）

同月二十二日

おいぬれはまろ寢にぬかぬ頭巾かな　歸休庵（歌日記「明治三十八年二月於大東山堡」十一句の七にあり、本派本願寺寄贈繪葉書に認む。）

同月二十五日

凱旋順序をききて

からの煤今一度はいて歸れとや　歸休庵（歌日記「十月二十三日凱旋順序を示さる」とあり、米國製支那風俗を寫せる繪葉書に認む。）

わたくしは次に兄の知友が戰地に贈つた通信の中から二三を擧げて見ようと思ふ。いづれも三十八年中のもので、最初の小杉氏のだけはわたくしにおこされたので、轉送を託された書物の名は今思ひ出せない。

一月九日附小杉天外氏は

拜啓別封拙著一冊送上候間御手數恐入候へども何卒出征御令兄まで御届け被下度御願申上候　草草

九　日

相摸小田原

小　杉　爲　造

二月十一日畔柳芥舟氏は獨逸製の繪葉書に

孤燈の下滿洲の天を想望して遙かに先生の御健康を祈りたてまつり候

紀元節夜認

同僚博士原勝郎中尉として第三軍岐部兵站司令部にあり同僚博士桑木嚴翼同じく中尉として大本營翻譯係に勤務中。

次の一葉は內地からでは無く、第三軍司令部の人人が神武天皇祭の佳節に兄に寄せられたものである。第三軍の爲に兄が「箱入娘」といふ旅順口を箱入娘に見立てた軍歌を作り、日清役の雪の進軍の節で軍樂隊が作曲した。美人の左頰に乃木司令官、その下に河合操（參謀後大將）、御蔭で落した男が引立ちました　白井（二郞、後中將）、下方に一戶兵衞（參謀長、後大將）、落合泰藏（軍醫監、軍醫部長）、今澤義雄（少將、工兵部長）、牟田敬九郎


第三軍司令部寄合書

（少將、砲兵部長、後中將）、吉田文治（監督監、經理部長）、吉田平太郎、松浦寛威（何れも後中將）、井上幾太郎（後大將）等諸將の寄合書で、これだけ筆蹟の集まつたのも珍らしいと思ふ。

六月九日消印の佐佐木信綱氏のは女學世界の附錄繪葉書に

福陵の御作御遣し給り南京孝陵にものせし折の石人石獸のさまなとそぞろに思ひ出られ候野口ぬし誠に悼ましき限に候

明日は三木ぬしの御案内にて眞砂座に伊井の聞貫一見に參り度存じゐ候都は青葉涼しく候御わたりいかがにやと遙に察上候　早早拜具

福陵の御作とは、歌日記に（明治三十八年四月十一日於福陵）として

天地のわかゆる春の新草のみとりの中に石の馬立つ。

巨鼈せおひ靈螭まもれる白石の神功の碑たかさ三丈。

春來とも知らすかほなりみささきの白土をかの楡のうつほき

の三首を指す。九段坂上に立てる川上大將銅像の作者大熊氏廣氏は、その銅像の繪葉書に

謹啓爾來御疎音打過申候處愈御健勝奉大賀候閣下御出征後ハ美術社會モ淋敷相成安藤氏ニモ久敷面會不致上野臺ニ油繪展覽會開設相成候得共格別ノ大入リモ無之候一昨年十二月ヨリ故川上大將銅像依托ヲ受去廿八日除幕式施行相濟申候同家ニ於テモ御滿足ニ被思召大將遺愛ノ自筆箱書ヲ有スル九谷焼華瓶壹對ヲ贈與被致不存寄得光榮申候本日繪葉書手ニ入リ候ニ付御目ニカケ候時下折角御自愛奉祈候　拜具

五月十八日　　大熊氏廣

同じ彫塑家新海竹太郎氏の數枚ある中に、提燈行列の繪葉書に

御健康を祝す

美術世界は極めて寂寥に候得共洋畫の研究所は何處も盛況に御座候

銀座の勸工場內の戰爭畫展覽會は晝夜共大繁昌にて上野の諸展覽會などは實に顏色なしと云ふ次第に御座候

頓首

七月廿四日　　新海竹太郎

八月十七日の消印ある岡野知十氏は

夏瘦や捉迷藏の人の肩

思ひよらぬ芳句に接し

すかすかしくも見ゆる小扇

御脇とにはこれなく御はがきのすゞしきままに

半面休刊にて伺上べくを怠り却て恐入候　　知　十

とある。夏痩の句は歌日記に（七月二十九日於古城堡）として、歌一首、句四首ある中、句の最初に擧げてある。小山内氏兄妹も數度送られてゐる中から一枚づつ書き拔かう。五月二十九日附の薫氏のに

小生も不日國民兵役に服する事に相成申候

素人芝居にはあれど先日「辻說法」の再び上場せられたるを見心うれしう感じ申候都は青葉の心よきを旅行禁せられたるは情なう存じ居候　早早

とあり、素人芝居とは五月十一日より五日間文士演劇若葉會が「日蓮上人辻說法」を歌舞伎座で上演されたのをいふ。

十一月十七日の消印ある八千代女史のは、九代目市川團十郎の二女實子扶伎子が追善興行に口上を述べてゐる葉書に

おとつひの初しぐれにて萩もしをにも一ときに枯れ申候はかなしく候年の內には御かへりもなしとや千駄木の皆樣鞘町の御方方さぞかし御待ち久しく入らせられ候御事と存じ上候はしくれにもならぬ我我までも長（三四字汚れて不明）□□□さおもはるる共月日の中に御事なかれかしとのみいのりあげ候これは追せん興行の姉妹におはし候　かしこ

と書かれてゐる。これに對して兄からは十一月三十日附で小山内氏に

きちかうや紫帽子あねいもと

但し一輪はまだ莟なりとかや
只今より旅順見物に一寸出かけ候
と返事が來た。



寺崎廣業畫伯向島百花園寫生畫

寺崎廣業畫伯は肉筆又は印刷の葉書で數回贈られてゐる。その內から向嶋百花園のペン畫スケッチを此處に挿入して置かう。

その他伊井蓉峰、川尻清潭、鈴木春浦等の諸氏もある。皆兄の萬里遠征を慰める好意ならぬはない。兄は大切にして持歸つた後、記念としてわたくしに讓つてくれたのである。

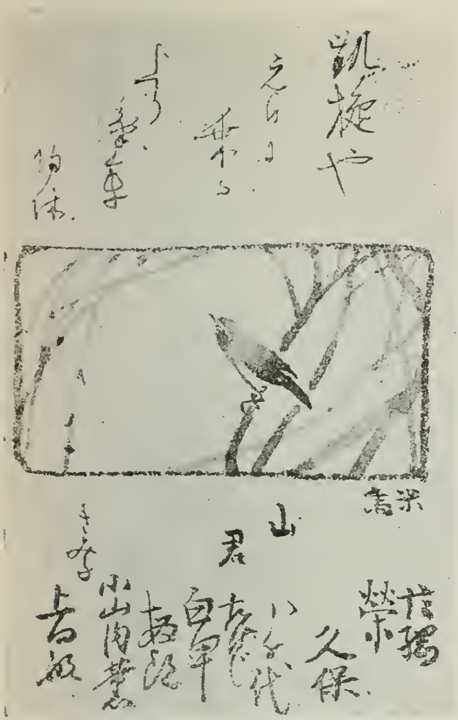
上演

自五月十一日　日蓮上人辻說法　若葉會　歌舞伎座

日蓮上人　岡　鬼太郎　　進士善春　栗嶋狹衣
比企能本　松本當四郎　　娘　妙　岡村柹紅
放　下　伊坂梅雪

十二、活躍準備時代

同三十九年一月一日昌圖を發し、この時「凱旋や元日に乘る上り汽車」の句がある。旅順の戰蹟を見學し、盤龍山砲臺で磨製石斧を拾ひ、大連から乘船し、七日宇品に着し、十二日東京に凱旋、軍司令官以下幕僚一同と闕下に拜謁した。二十一日誕生日と凱旋の祝を兼ねて開いた觀潮樓の會には、上田敏、佐佐木信綱、小山內薰、同八千代、伊原靑靑園、大久保榮、平野萬里、吉田白甲、久保田米齋、わたくし共兄姊弟、於菟が集まつた。



明治三十九年一月二十一日誕辰兼
凱旋祝宴寄合書

同月三十日嶋根縣法政會第七回總集會が金淸樓に開かれ、招待された兄は「高粱の話」をなし、翌年

三月一日心の花第十一卷第三號に載せられた。

二月一日心の花第十卷第二號に新體詩「敵襲」、三月第三號に同「せめては草」が載つた。兄の從軍中最も危險を感じたのは、三十七年五月十七日楊家屯に宿營の日、奧司令官は幕僚を從へて南山の敵陣の様子を探りに出られた、その後へ眞夜中に敵襲の知らせに、衞兵は一箇小隊に過ぎず、兄が最上官であつたから、指揮する爲に營を出で、衞兵は散兵となつて様子を伺つてゐたが、哨兵の錯誤であることが知れて引上げた。この時兄は全く戰死の覺悟を極めたさうで、「敵襲」はその時の様を詠んだものである。

四月八日竹柏會大會で「ゲルハルト・ハウプトマン」を講演し、その筆記は五月一日心の花第十卷第五號に載り、十一月十日春陽堂から四六判、洋綴、クロオス裝二四六頁、寫眞六葉挿入、卷末參考書目四頁を附し、長原止水氏圖案の表紙で刊行された。三十日中庸堂書店から出版した高濱長江氏著旅ころもの卷頭に「三十七年六月十五日祝家屯にて　ぬれ衣を家にやらばやみちすがら友をうしなふ旅のしるしに　源高湛」とある。

六月一日藝苑卷第六に「改訂水沫集序」がある。前月二十日春陽堂が美奈和集の訂正を請ひ、題號を水沫集と改めて刊行した卷首に冠したものである。同一日趣味に新作風の新體詩「都鳥」を掲げ、光風第二年第三號に課題女子と美術教育に就いての同人閑話が出て、その中に腰辨當の名で一言してゐる。これは齋藤昌三氏の好意で知ることが出來た。

同月十日歌會常磐會が兄と賀古氏との勸告で成立した。四十二年四月二十日出版された常磐會詠草初篇の附錄に、井上通泰氏の談話を筆記した常磐會の沿革并に會則がある。

明治三十九年六月十日の夜、森林太郎、賀古鶴所の二氏が小出粲、大口鯛二、佐佐木信綱の三氏と余とを濱町一丁目なる酒樓常磐に招きて明治の時代に相當なる歌調を研究する爲に一會を起さん事を勸められた。余はかねて小出翁と共に現時の歌風に極端なる舊派と極端なる新派とあり、其兩極端の間に又あまたの派があつて、後進の嚮ふ所に迷ふべき事を慨いて、何とかせずばなるまいなど云ひ合つたこともあるから、無論森賀古二氏の勸告に應じた。大口、佐佐木二氏も異論はなかつたから、卽座に森賀古二氏が幹事となり、小出、大口、佐佐木の三氏と余とが選者となつて、一會を起す事に定まつた。其後賀古氏から話のついでに此事を山縣公爵に申し上げた所が、公爵も非常に喜ばれて力を添へらるる事を約せられた。そこで會名を附ける段になつて、森氏がむつかしい名を附けるよりは、常磐で出來た會であるから常磐會と附けたらばよからうと云はれたのでそれにきまつた。

第一回の會は同年九月二十三日に飯田町六丁目なる賀古氏の邸に開いた。其後一月もかかさず開會して、本年の二月には第三十回の會を開いた。會合を催すのは多くは第三日曜の午後四時からである。

選者は初は小出、大口、佐佐木の三氏と余とであつたが、第八回の會卽四十年四月から鎌田正夫氏が加はつて五人となつた。然るに四十一年五月十五日に小出翁が卒去せられたので又四人となつた。

これでその成立の由來が知られるであらう。四十二年の第三十三回から須川信行氏が選者に加はつたのを知つてゐる。常磐會の事を書いたから、序にそれに關した手紙を二つ擧げて見よう。一は陸軍少將伊豆凡夫氏で

拜啓常磐會御創立の趣を以て小生へ歌出せとの御示し汗顏至極に御座候戰地などにては境遇上つまらぬ詩歌

もひねくり候得共元來學びしものに無之候故題に向て詠む如きことは閉口仕候乍併今後折角勉強可仕候間御指導を願ひ度候　拜具

一月十二日　　伊　豆　凡　夫

鷗　外　博　士　殿

餘　寒

いたつらに過き行く月日おしむより薄らく寒さわれはいのらし

一は陸軍大將中村覺男爵のもので

前略常磐會兼題二月分更ニ御通報奉謝候來年一月分ノ兼題ハ未タ承リ不申如何哉

當十二月分ノ兼題左ノ如ク寢言ヲ並べ申候近近佐佐木君ニ送致シテ添削ヲ乞ハントス御一笑迄ニ左ニ

梅

すすみゆく世におくれしと梅の花春をもまたてさき初めにけり

南　天　燭

菊の花霜に枯にしあとつきて千代をしめたる庭の南天

戀

世の中に戀てふことのなかりせは人をつらしとおもはさらまし

御批評可被下候

十二月十八日　中むらさとる

森　閣　下

とある。

七月一日東亞之光第一卷第三號に腰辨當の名で新體詩「日下部にて」を掲げた。十二日祖母淸子が八十八歲にて歿し、母と於菟とが遺骨を携へて近江土山常明寺に赴き、祖父の墓側に葬つた。

八月立秋節中澤廣勝氏の爲に「白石先生印譜引」を草した。

九月一日歌舞伎第七十七號に一社友の名で「助六は下劣か」を寄せ、十月一日第七十八號から「觀潮樓一夕話」と題して、歐洲新戲曲の口譯を出し始め、晩年まで殆ど間斷なく揭載され、これで初て我邦に紹介された作者が多い。千葉龜雄氏は

歐洲戲曲の價値に目を開かして吳れた翻譯家が森鷗外博士である。坪內博士の沙翁劇も結構である、惜しいことに古典だ。近代といふ身についた生色、その生色をあらゆる國籍の上に多樣に見せて吳れたのが森鷗外氏である。(中略) 氏はその頃 (明治四十年代以後) ひどく戲曲に感激を持つて居たらしい。自分でも戲曲を創作し、同時にそれからそれと歐洲の代表的作物を見せてくれた。並べられた翻譯戲曲を眺めると、文字通りその時代その國文壇での代表作をいしくも氣持のよいほど端的に間違無しに拾ひ上げてゐる。それが爲にどれほど多くの戲曲が讀み捨てられたことであらう。

といふてゐる。そして十月のには「ハウプトマンのウント・ピッパ・タンツット」と「オヰデイプスとスフィンクス」、

十二月の第八十號には「王の子供達」が出てゐる。

九月山崎紫紅氏の戲曲集ななつ桔梗の卷首に「きちかうや眼汝かために靑し　歸休菴」の一句を題した。十月五日光風第二年第四號には、三十八年八月八日古城堡で詠んだ六句の中の「秋立つ日勅使迎ふる陣屋かな」が、陸軍恤兵部製の繪葉書に認められた由の付言で揭げられた。

十一月一日心の花第十卷第十一號に小說「朝寢」、音樂新報第三卷第十號歌劇號に「歌劇の事ども」の談話筆記が出た。

十二月一日東亞之光第一卷第八號に腰辨當の名で新體詩「火事」がある。

上　演

四月十日初日で眞砂座に伊井一座によつて「はげあたま」が演ぜられ、主な配役は伊井蓉峰のドン・アントニオ、村田正雄のドン・カルロ、木村操のテレザであつた。

九月八日初日で「玉匣兩浦嶋」が歌舞伎座に二度目に演ぜられ、配役は伊井の浦嶋太郎、河合武雄の乙姫、村田正雄の後の浦嶋太郎であつた。

十一月一日から五日間東京毎日新聞演劇會の名を以て、歌舞伎座で「日蓮上人辻說法」が演ぜられた。配役は岡鬼太郎の日蓮、岡本綺堂の進士善春、栗嶋狹衣の比企能本、濟月女の妙であつた。

敍　勳

四月一日明治三十七八年戰役の功に依り功三級金鵄勳章並に年金七百圓及び勳二等旭日重光章を授けらる。

公職

凱旋後の殘務整理が終つて、八月十日、第一師團軍醫部長に復し、陸軍軍醫學校長事務取扱兼勤仰付けられた。

同四十年元旦心の花第十一卷第一號に小說「有樂門」、二月第二號に妄人の名で「妄語」、本名を以て「手宮彫文集說」、元旦歌舞伎第八十一號に、觀潮樓一夕話「脚本ミットメンシュの粗筋」二月第八十二號より六月第八十六號まで同「シラノ・ド・ベルジュラックの粗筋」、七月第八十七號に同「雜事」として、前月演藝書報に天潮といふ記者が、兄の談話筆記として「自然主義を論じて我が脚本作家に及ぶ」と題したものは、出鱈目であることを辯駁した。八月第八十八號には一夕話「エドモンド・ロスタンが事」と「脚本サロメの粗筋」、十月第九十號に同「脚本我君（マイン・フュルスト）の譯」、十一月第九十一號第九十二號に同「短劍を持ちたる女の譯」を掲げた。

明星には元旦未歲第一號に長詩「かりやのなごり」、四月第四號に長詩「空洞」、八月第八號に長詩「直言」、十月第十號に短詩「一刹那」が出た。

三月觀潮樓に歌會を開き、竹柏會の佐佐木信綱、新詩社の與謝野寬、根岸派の伊藤左千夫の三氏を中心とし、故石川啄木、吉井勇、平野萬里、太田正雄の諸氏は最初から來會し、その後漸次人が加はつて四十二年の夏まで繼續した。

歌會の事が出たから、四十二年六月二十八日附で伊藤伊三郎氏に贈つた手紙を明星から引かせて貰うこととしよう、自分の歌に就いての意見が記されてゐるからである。

拜啓先頃はかけと申す書御贈被下拜見いたし候又今回は雜誌をも御見せ被下是又御禮申上候偖批評云云の事は折角の御思召には候へ共何とも申上兼候何故と云ふに小生は舊派と申す人人よりも新派と申す人人よりも一人前の歌人として承認せられ居るものに無之候只自分が勝手に歌はこんなものではなきかと思ひて試作するのみにて世評がそれをどんな風に待遇し居るかは雜誌等にて御承知の事と存じ候然れば人の作を彼此申すべきには非ずと考居候小生の我儘なる判斷によれば現狀にて歌を見せてこれが歌か歌でないかと問うて極めて貰うても好いと云ふやうなる人は知り不申候古き歌を善く詠む人には新しき境地に丸でわからぬ處があり又新しき歌を詠む人も皆偏頗にて己れと違ふ趣味は排斥するやうに相見え候小生は下手ながらどなたにも絕對的には服從不仕候定めてあいそのつきたる事と御聞取被成べきやう存じ候へ共御催促を受けて已むを得ず意中をかくさず申述候他に御吹聽は御無用に被成度候　早早

四月故森田思軒氏の全集が發行せられるので、「思軒文の卷端に題す」を草した。

六月十七日から三日間西園寺公望侯駿河臺の邸に雨聲會を開き、兄は二日目に出席した。

七月博文館から家庭衞生講話第二編として「衞生學大意」を刊行した。菊判、假綴、紙裝一六〇頁である。

八月九日二男不律が生れ、翌年二月五日百日咳で夭した。

九月春陽堂が出版した菊池正助氏著馬と主に、「序に代ふる詩」として「歌日記」にある「我馬病めり」が載せてある　但第三節の一丈に滿たざる　高粱ごしに」が　序には「尺に滿たざる」に作られてゐる。

是年橫濱商業學校の爲に校歌を作り、小松耕輔氏が作曲した。

公　職

八月十三日美術審査會委員を仰付けられ、第三部（彫刻）部員を命ぜられた。

十一月十三日陸軍軍醫總監に任じ、陸軍省醫務局長に補せられ、二十二日明治三十七八年戰役衞生史編纂委員長を仰付けられた。

「軍醫としての鷗外先生」によれば、明治八年松本順氏が陸軍本病院長に就任し、明治十二年十月林紀氏が陸軍軍醫本部長の職名にて第二代の局長となり、同十五年九月松本氏が再び陸軍軍醫本部長に就任し、同十九年三月始めて陸軍省醫務局長の職名の下に橋本綱常氏が就任し、同二十三年十月石黒忠悳氏が第五代の局長となり、七年にして退職され、石坂惟寛氏が之に代り、同三十一年八月小池正直氏局長に就任し、在職九年四ケ月にして更迭があり、兄は第八代の局長となつたのである。

同四十一年元旦の歌舞伎第九十三號に Frank Wedkind の戲曲「出發前半時間」の其一が出たが、十日主宰者の次兄が歿したので、五月に至つて第九十四號以下が伊原青青園氏の手によつて繼續する事となり、それに「出發前半時間」其二（六月第九十五號其三で完結）と「ハウプトマンが最近の二作」とを掲げた。猶元旦の心の花第十二卷第一號に Timm Kröger の「ソクラテエスの死」、明星申歲第一號に Arthur Schnitzler の「アンドレアス・タアマイエルの遺書」と、ゆめみるひとの名で短歌「舞扇」を載せた。

十日次兄篤次郎（筆名三木竹二）が四十二歲で歿し、向嶋弘福寺に葬り、法號を篤證院一乘圓融居士といふた。明治二十四年東京帝國大學醫科大學を卒業し、內科を專門として初め日本橋區蠣殼町に開業し、後京橋區南鞘町

れ移つた。少年時代より觀劇が好きで、遂に劇評家として名を成すに至つた。次兄は分家となつたのであるが、妻久子との間に子が無いので、わたくしがその跡を襲ぐことになつた。

二月明星第二號に Wilhelm Schaefer の「父」、四月第四號に Anna Croissant-Rust の「いつか君は歸ります」（後黃金杯に收める時「いつの日か君歸ります」と改めた）五月、六月の第五號第六號に Jacob Wassermann の「黃金杯」、八月第八號にゆめみるひとの名で新體詩「潮の音」、十一月終刊號に Arno Holz und Johannes Schlaf の「わかれ」、七月、八月歌舞伎第九十六號九十七號に Hermann Bahr の「奧底」、九月、十月の第九十八號九十九號に Hermann Sudermann の「花束」、十一月第百號に Schnitzler の「猛者」、十二月第百一號に Hugo von Hofmannsthal の「癡人の死」、十月心の花第十二卷第十號に Selma Lagerlorf の「牧師」が掲載された。

六月二十六日文部大臣官邸で開かれた臨時假名遣調査委員會第四回會合に於て、陸軍を代表して現在の假名遣に對し反對意見を述べ、その結果文部省案が撤回され、次で委員會も廢されるに至つた。その時の演說は美濃判和紙に十七行二十七字詰二十枚に印刷され、卷頭に「祕」の朱印を捺して配附された。同月二十九日棠陰會の名によりて編纂した、「能久親王事蹟」が春陽堂から刊行された。菊判、洋綴、クロオス裝二七一頁、年譜十二頁、寫眞三十二面、地圖二葉が挿入してある。殿下に隨つて臺灣に出征した川村景明大將、阪井重季中將等の囑により、宮家からも資料の御貸下げを得て脫稿し、假印刷に附して關係者に配布し、その意見に據つて更に補訂を加へた。又同月コッホ博士が來朝して、當局が歌舞伎座に招待して曾我兄弟、千本櫻、道成寺の歡迎觀劇會を催すについて、依賴を受けてその筋書を獨逸文に譯し、小冊子として來會者に配附したのが "Festspiele aufgefuehrt

zu Ehren. Robert Kochs im Theater Kabuki am 16 ten Juni 1908." で、八頁、石井柏亭氏圖按の表紙を附けてある。

九月初旬落合直文氏編「言泉」の序を作つた。

十二月わたくしは京都帝國大學教授上田敏博士の推薦で京都に赴任した。わたくしは始め朝鮮に赴く希望であつたが、身體の弱いのを案じて許してくれなかつた兄は、京都は親友上田博士の推薦である爲に許してくれたのであつた。

公　　職

五月三十日臨時脚氣豫防調査會官制公布せられ、その會長を仰付けられた。官制は六月一日官報を以て發表され、委員、臨時委員、幹事は二十三日任命された。

九月二十六日教科用圖書調査委員會委員を仰付けられ、二十八日文部省からその主査委員、第一部員を命ぜられた。

十三　文壇再活躍時代

同四十二年は一時文壇と關係を絕つた兄が、再び旺盛な創作的活動を開始した年である。木下杢太郎の太田正

雄氏は岩波書店版日本文學講座の森鷗外にその原因として、(一)夏目漱石が三十八年以來矢繼早に傑作を發表し、それを興味を以て讀み、そして技癢を感じた事(キタ・セクスアリスに見える)(二)當時の自然主義に對する反感、(三)昴が創刊されて著作發表の機關となつた事、(四)歌舞伎に毎號歐洲戲曲の翻譯梗槩の口述筆記を載せた、この割合氣樂な翻譯の爲方が又氣樂に小說を作らしむる動因となつた事、(五)陸軍に於ける地位が安定して周圍に遠慮や氣兼なしに思ふままに振舞ふことが出來る事の五箇條を擧げてゐられる。一月一日雜誌昴(スバル)が創刊された。

雜誌新聞に掲載された數が多いから、創作、翻譯、詩歌等に分け、單行本、上演物と共に表示しよう。

イ、創作

戲曲 プルムウラ	昴	第一號	一月一日
半日	同	第三號	三月一日
假面	同	第四號	四月一日
對話 鸚鵡石	同	第五號	五月一日
追儺	東亞之光	第四卷第五號	同
魔睡	昴	第六號	六月一日
大發見	心の花	第十三卷第六號	同
ヰタ・セクスアリス	昴	第七號	七月一日
鷄	同	第八號	八月一日

	團子坂	東亞之光	第四巻第九號	九月一日
	金貨	昴	第九號	同
	金毘羅	同	第十號	十月一日
脚本	静	同	第十一號	十一月一日
	影と形	同	第十二號	十二月一日

ロ、翻譯

戯曲	僧房の夢(Gerhart Hauptmann)	歌舞伎	第一〇二號	一月一日

三月第一〇四號まで三回に連載、但第一〇二號には「古寺の夢」としてあつたが、此處には後の改題に従つて置いた。

	顔(Richard Dehmel)	心の花	第十三巻第一號	一月一日
戯曲	耶蘇降誕祭の買入(Arthur Schnitzler)	新天地	第二巻第二號	同
同	奇蹟(Maurice Maeterlink)	歌舞伎	第一〇五號 第一〇六號	四月一日 五月一日
同	ねんねえ旅籠(Gustav Wied)	心の花	第四號	四月一日
同	債鬼(August Strindberg)	歌舞伎	自第一〇七號 至第一〇九號	自六月一日 至八月一日
同	サロメ(Oscar Wilde)	同	第一一〇號 第一一一號	九月一日 十月一日
	最近獨逸脚本梗槩	昴	第九號	九月一日

戯曲 家常茶飯（Rainer Maria Rilke）	太陽	第十五巻第十三號	十月一日
同 秋夕夢（Gabriele D'Annunzio）	歌舞伎	第一一二號 第一一三號	十一月一日 十二月一日

八、詩　歌

海のをみな	東亞之光	第四巻第四號	四月一日
我百首	昴	第五號	五月一日
横濱市歌			六月

二、雜

ユリウス・パアプの戯曲論	昴	第二號	二月一日
「假面」談（鈴木春浦筆記）	歌舞伎	第一〇七號	六月一日
時談片片	新潮	第十巻第六號	六月一日
當流比較言語學	東亞之光	第四巻第七號	七月一日
俳優渡英は乾度有望だ	歌舞伎	第一一〇號	九月一日
佛國滑稽畫家	方寸	第三巻第七號	九月二十五日
現代思想	太陽	第十五巻第十三號	十月一日
讀みながら思つた事	心の花	第十三巻第十號	同
予が翻譯の態度（談話筆記）	文章世界	第四巻第十三號	同

予が立場　新潮第十一卷第六號　十二月一日
ホ、新聞
シユレンテルのボルクマン評　國民新聞　自七月一日至七月四日
ジヨン・ガブリエル・ボルクマン　同　自七月六日至九月六日
ヘ、單行本
阿育王事蹟　大村西崖氏共著　一月一日　春陽堂
菊判、洋綴、クロオス裝、三九八頁、寫眞三十九面、附錄に年表、書目、索引、補正あり。裏表紙内側に地圖を入れるやう袋を付け、地圖は後から出版すると豫告がしてあるが、遂に出版されなかつた。
一幕物　六月十日　易風社
菊判、洋綴、クロオス綴、四二六頁、歌舞伎に出でた「猛者、短劍を持ちたる女、奥底、我君、出發前半時間、花束、僧房夢、痴人と死と」を收めた。
東京方眼圖　八月十日　同
縱七寸一分、横二寸六分、洋綴クロオス裝、地名索引一七四頁、方眼圖二六面、大判地圖一面。東京市内及び隣接郡部の地圖を縱を「い」より「ち」までの八に、横を「一」より「十一」に碁盤目に分ち、索引と相俟つて所要の場所を檢出し得る仕組みである。今でこそ珍らしく無いが、我邦で作られたのはこれが最初である。

ジョン・ガブリエル・ボルクマン　十一月二十日　書報社

四六判、洋綴、クロオス装、久保田米斎氏装幀、三五九頁、昭和七年九月一日世界名作文庫四〇四として、春陽堂から刊行された。

ト、上　演

自六月一日　假面　伊井蓉峰一座　新富座

村田正雄の杉村博士、伊井蓉峰の學生山口、木村操の金井夫人、福嶋清の植木屋、丸山操のその妻。

自十一月　日　ジョン・ガブリエル・ボルクマン　自由劇場　有樂座

昴第三號から「椋鳥通信」と題して歐米各國の最近思潮、文藝上の新事實を紹介し、大に若い人人の好評を博した。「假面」は初めて試みた現代劇である、「靜」は古代劇を現代語で書いて見たのであるが、時勢が早すぎた爲に世間の嘲笑が甚しかつた。「ヰタ・セクスアリス」は少年期から歐洲留學に出發する迄の生活の性慾的方面を書いたもので、全著作中唯一の發賣禁止處分を受けたものである。

五月二女杏奴が生れた。

六月音樂學校の囑によつて横濱市歌を作つた。初刷のものは縱四寸六分、横八寸の洋紙に活字で歌詞だけを印刷し、作者名も作曲者名もない。後刷は縱八寸九分、横六寸四分の二折、表紙二度刷の樂譜本となり、作曲者南能衛氏の名も現はされてゐる。同月二十四日都新聞の「歴訪録」欄に、この作歌についての兄の談話が出てゐる。

七月十七日千葉掬香氏譯建築師の爲に對話體の序を作り、八月易風社から發行した坪内雄藏、內田貢兩氏編二

葉亭四迷の內に「長谷川辰之助」を書いた。

七月二十四日博士會の推薦により、明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條により文學博士の學位を授けられた。

九月一日中央公論第二十四年第九號に現代人物評論共二十として、森鷗外論が載せられ、嶋崎藤村、三宅雪嶺、永井荷風、戸川秋骨、井上通泰、芹茱子、水野葉舟、田山花袋、星雲子、小山内薫、大野洒竹、石黒忠悳男（以上掲載順）諸氏によつて論ぜられた。

同四十三年一月新刊の雜誌に掲載された創作、翻譯は左の如くである。

創作

獨身　昴　第二卷第一號

小倉に於ける獨身時代の事を書いたもの。

牛鍋　心の花　第十四卷　同

杯　中央公論　第二十五年　同

電車の窓　東亞之光　第五卷　同

翻譯

白（Rainer Maria Rilke）　趣味　第五卷第一號

釣（Peter Altenberg）　女子文壇　第六年　同（滿五週年記念號）

曲戯　負けたる人（Wilhelm von Scholz）　新小説　第十五年　同
午後十一時（Gustav Wied）　太陽　第十六巻　同
曲戯　人の一生（第一場）　歌舞伎　第百十四號
「人の一生」は五月第百十九號まで五回連載

他に森田草平氏の煤煙に「影と形（煤煙の序に代ふる對話）」を書いた。これは前年十二月昴に出たのと同樣である。後「我一幕物」に收める時に後の一場を省略し、題も單に「影」となつた。

一月の單行本は次の二種である。

黄　金　杯

翻譯集、菊判、洋綴、紙裝二三三頁、久保田米僊氏裝幀、「黄金杯、いつの日か君歸ります、父、山彦、顔、ソクラテエスの死、わかれ、耶蘇降誕祭の買入、犬、牧師」、一月一日刊行、春陽堂。

續　一　幕　物

翻譯戯曲集、菊判、洋綴、クロオス裝四〇六頁、岡田三郎助氏裝幀、「サロメ、奇蹟、債鬼、ねんねえ旅籠、秋夕夢、家常茶飯、附錄現代思想（對話）」、一月十日刊行、易風社。

二十五日原田直次郎先生記念會の名を以て原田先生記念帖が審美書院から發行された。原田氏の友人門下生等の追想談が收められ、兄のは東京日日新聞三十三年一月十一日以下四日間に連載された鷗外茗話の記事が、訂正すべき必要を認めぬといふので、其儘で收めてある。

二月一日昴第二卷第二號に出た創作「里芋の芽と不動の目」の主人公理學博士増田翼は、陸軍衛生材料廠長藥劑監羽田益吉氏の事を書いたものださうである。

三月昴第三號から創作「青年」が翌年八月まで連載された。この小說の初めに一寸と事實相違の點があつて、話題となつた事がある。それは小泉純一が根津權現表坂上の下宿に大石狷太郎を訪問し、まだ眼が覺めないと聞いて、それでは散步して來るからと下宿を出て坂の方へ步き出したところに「右は高等學校の外圍、左は角が出來たばかりの會堂で、その傍に小屋のやうな家から車夫が聲を掛け云云」とある。あの坂上は丁字形になつてゐて、下宿の前に立つて東の一本道が根津權現の鳥居前に出る坂に向ひ、右と左は文の通りであるが、車夫の小屋は會堂の傍では無くて、下宿の北側のはづれで、その後も長くトタン葺の鷄小屋のやうな形を存してゐた。同月には趣味第五卷第三號に Leonid Andrejew の「齒痛」、帝國文學第十六卷第三號に Wilhelm Schmidt-Bonn の「鴉」を譯載し、六日與謝野寬氏の著相聞の序を書き、二十三日博文館發行吉田博氏著魔宮殿見聞記に四號活字三頁に涉る序を書いた。

四月一日中央公論第二十四年第四號春期大附錄號に載つた脚本「生田川」は小山內薰氏の依賴で自由劇場の爲に書いたもので、五月二十八日から有樂座で同劇第二回公演として、「出發前半時間」、「犬」と共に上演された。脚本發表と同時に歌舞伎第百十七號に鈴木春浦君の筆記した「新脚本生田川に就いて」と題する談話が出たが、それに誤謬があるので、翌五月の第百十八號に自ら正誤を書いた。

五月一日三田文學が創刊され、それに「棧橋」を寄せた。舊藩主龜井茲常伯が渡歐されたる際の橫濱棧橋の光

景を寫したものである。東亞之光第五卷第五號に Michel Peterovich Artsybashev の「罪人」、太陽第十六卷第六號に Gustave Flaubert の「聖ジュリアン」(上)を譯載し、(中)は六月一日第八號、(下)は七月一日第十號に出た。

六月は三田文學第二號に創作「普請中」、中央公論第六號に同「ル・パルナス・アンビュラン」、歌舞伎第百二十號には Eduard Stucken の「飛行機」(九月の第二十三號まで四回)昴第六號には既記連載物の他に「一二三の脚本筋書」が載つた。七月には三田文學第三號に創作「花子」が載つて、中にロダンが出て居る 十二日大村西崖氏の「日本繪畫小史」の爲に序を書いた。八月は三田文學第四號に創作「あそび」、東亞之光第八號に同「木精」、文藝倶樂部第十六卷第十一號に Edger Allan Poe の「うづしほ」がある。九月は東亞之光第九號に Artsybashev作「笑」、學生文藝第一卷第二號に同作「死」が譯載された。

是月秋菊池正助氏著凍筆日記に序を書いた。

十月歌舞伎第一二四號以下三回に Barnard Shaw の「馬盜坊」が出た。同月嶋村苳三氏譯「ユリアヌス」の序を書き、又單行本が二部刊行された。

現代小品

翻譯集、菊判、洋綴、紙裝二四六頁、「鴉、白、アンドレアス・タアマイエルが遺書、釣、午後十一時、聖ジュリアン、齒痛、罪人、負けたる人」、十月五日刊行、大倉書店。本書は後に「歐洲文藝名家傑作集」と改題して、同店から刊行されたさうであるが、わたくしはまだ見ないのでその體裁を述べることが出

來ぬ。

涓　滴

創作集、菊判、洋綴、紙裝二四五頁、平福百穗氏裝幀、「杯、花子、獨身、棧橋、あそび、普請中、木精、大發見、電車の窗、追儺、懇親會、牛鍋、里芋の芽と不動の目、ル・パルナス・アンビュラン」、十月十六日刊行、新潮社。

十一月は三田文學第七號に創作「沈默の塔」、新潮第十二卷第五號に同「身の上話」、太陽第十六卷第十四號に「第一回應募脚本の選擇に就いて」が載つた。新潮には同社から提出した質問十條に對する諸家の意見を以て森鷗外論を掲げた。その質問

一、公人私人として
二、明治の文藝に對して奈何なる功績ありや
三、その翻譯と創作
四、多く書く所以
五、文藝に對する態度
六、文壇に對して神經質に過ぎずや
七、キタ・セクスアリスに現れたる鷗外
八、赤門及び三田との關係

九、其性癖嗜好等

十、門下生を多く有せざる理由奈何

に對し、井上通泰、內田魯庵、小山內薫、賀古鶴所、蒲原有明、小杉天外、相馬御風、高濱虛子、馬場孤蝶、與謝野寛等十氏が意見を述べられた。同月十四日本間久氏著枯木の爲に「枯木の後に書く」を草した。

十二月三田文學第八號に創作「食堂」が載せられ、新潮第六號に「一幕物の流行と現代語の史劇」と題する談話筆記が出てゐるが、中村武羅夫氏の話によれば、兄が自身で書いて渡したものであるらしい。饗庭篁村翁編馬琴日記鈔に後序を書いたのはこの歲晚で、その中に別に八犬傳の序を書いた事が見えるので、全集普及版を出す時も種種捜索したが、見たといふ人もあり否定する人もあるので、いまだに決定出來ぬのは遺憾である。

上　　演

四月（初日不明）東京俳優學校の手で「奥底」が有樂座、五月二十八日初日で自由劇場が「生田川」「出發前半時間」「犬」を有樂座、十一月二十三日初日で新時代劇協會が「馬盜坊」を有樂座で興行した。

公　　職

九月八日農商務省から伊太利萬國博覽會美術品鑑査委員を囑託された。

同四十四年元旦發表の作品は左の如くであつた。

一、創　　作

蛇　　　　　　　　　中央公論　第二十六年第一號

二、翻譯小說

一疋の犬が二疋になる話（Marcel Berger）　心の花　第十五卷第一號

襟（Osip Dymov）　三田文學　第二卷　第一號

二髑髏（Hugo Andressen-Moellershoeffer）　東亞之光　第六卷　第一號

三、翻譯戲曲

人力以上（Bjornsteirne Bjornson）　歌舞伎　自第一二七號 至第一三一號

五月まで連載された。

首陀羅（August Strindberg）　新小說　第十六年第一卷

後「新一幕物」に收むる時「パリアス」と改題した。

一人舞臺（Strindberg）　女子文壇　第七年　第一號

四、單行本

人の一生、飛行機

翻譯戲曲、菊判、洋綴、紙裝三七六頁、中村不折氏裝幀、「人の一生」（Andrejev）「飛行機」（Stucken）を合册、春陽堂刊行。

元旦新潮第十四卷第一號に、生田長江氏が「夏目漱石氏と森鷗外氏」と題する評論を書いた。

二月は連載物の他に、三田文學第二卷第二號に創作「カズイスチカ」が出た。大學卒業後洋行前千住の父の許

で診察した特殊の患者落架風（下顎脱臼）、一枚板（破傷風）、生理的腫瘍（妊娠）の三話である。同月三男類が生れ、十五日左の創作集が春陽堂から刊行された。

煙　塵

菊判、洋綴、表紙紙装、背及び裏表紙クロオス、久保田米僊氏裝幀、二八五頁、「鶏、身上話、ファスチエス、金貨、金毘羅、沈黙の塔、そめちがへ」を收む。

十六日の讀賣新聞から Gerhart Hauptmann の「寂しき人人」が左の如く連載された。是れより先一月二十七日の同紙に

寂しき人人　　　森　鷗　外

來る四月自由劇場に於て演ぜらるべき脚本なり。原作者は有名なる獨逸現代の劇曲大家ハウプトマン、鷗外氏苦心の譯に成る。近日の紙上より掲載すべし。

との豫告が出た。

第一幕　(一)十六日、(二)十七日、(三)十八日、(四)十九日、(五)二十日、(六)二十一日、(七)二十二日、(八)二十四日、(九)二十五日、(十)二十六日　(十一)二十八日、(十二)三月一日、(十三)二日、(十四)三日、(十五)四日、(十六)五日、(十七)六日、(十八)七日。

第二幕　(一)八日、(二)九日、(三)十日、(四)十一日、(五)十二日、(六)十三日、(七)十四日、(八)十五日、(九)十六日、(十)十七日、(十一)十八日、(十二)十九日、(十三)二十日、(十四)二十一日、(十五)二十二

日。

第三幕（一）二十三日、（二）二十四日、（三）二十五日、（四）二十六日、（五）二十七日、（六）二十八日、（七）二十九日、（八）三十日、（九）三十一日、（十）四月一日、（十一）二日、（十二）三日。

第四幕（一）四日、（二）五日、（三）六日、（四）七日、（五）八日、（六）九日、（七）十日、（八）十一日、（九）十二日、（十）十三日、（十一）十四日、（十二）十五日、（十三）十六日。

第五幕（一）十七日、（二）十八日、（三）十九日、（四）二十日、（五）二十一日、（六）二十二日、（七）二十三日、（八）二十四日、（九）二十五日。

後昭和七年九月二十五日世界名作文庫二一〇として、春陽堂から刊行された。

三月は三田文學に創作「妄想」、三越第一卷第一號に同「さへづり」、四月は昴第三卷第四號に「最近獨逸文學梗槩」、二十二日東京經濟雜誌第六十三卷第千五百九十一號鼎軒田口博士七回忌記念號に「鼎軒先生」を掲げた。

五月三田文學第五號に創作「藤鞆繪」を出し、歌舞伎第一三一號に「人力以上」が終るとともに、Wilhelm Schmidt-Bonn の「街の子」（十月まで六回）を掲げた。二十五日神戸又新日報は、今人古人（第一七）に「森林太郎氏」と題して略歴を紹介した。

六月帝國文學第十七卷第六號に Jakob Julius David の「世界漫遊」、東亞之光第六卷第六號第五週年記念號に Herbert Eulenberg の「塔の上の鷄」、七月三越第一卷第五號に創作「流行」、新小説第十六年第七卷に Albert Samain の「クサンチス」、三田文學第二卷第七號に Evgeni Nikolaevich Chirikov の「板ばさみ」、中央公論第二

十六年第七號諸家の嶋村抱月論中に「嶋村君に就て」を載せた。

七月二十日「寂しき人人」が菊判、洋綴、クロオス装二八〇頁、藤嶋武二氏装幀で金尾文淵堂から刊行された。昭和七年九月春陽堂の世界名作文庫二一〇にも收められた。

八月一日中央公論第八號に創作「心中」、三田文學第八號に創作戯曲「なのりそ」（九月第九號にて完結）を載せ、五日「重印蔭草」の序を書き、九月春陽堂から出版された。

九月一日昴第三卷第九號から創作「雁」が出始めて、左の如く二十四回に連載された。兄が大學學生時代の事を書いたもので、昭和八年三月四日JOAKの名作物語に德川夢聲君の解説で放送された。

(二)第十號、(三)第十一號、(四)第十二號、(五)四十五年二月第四卷第二號・(六)第三號、(七)第四號、(八)第六號、(九)第七號、(十)大正元年九月第九號、(十一)第十號、(十二)第十一號。

九月一日新潮第十五卷第三號の（此頃の世間の問題）の中に、德田秋聲氏が「舞鶴心中と鷗外氏の心中」と題して書かれた。

十月一日中央公論第二十六年第十號に創作「百物語」を出し、三田文學第二卷第十號から創作「灰燼」を出し始めたが、完結に至らなかつた。

十一月一日歌舞伎第一三七號に「手袋」を出し、翌年三月の第一四一號で終つた。同月十八日西園寺侯爵邸にて雨聲會の第二回が催された。十二月十七日金葉堂から Henrik Ibsen の戯曲「幽靈」が縱五寸七分、横三寸六分、洋綴、クロオス装三三〇頁で刊行され、昭和七年八月十五日春陽堂世界名作文庫四〇三にも收められた。

十一月一日新潮第十五卷第五卷の（現代作家の研究）に、馬場孤蝶氏が「鷗外漱石兩先生」と題して書いた。

上演

初日	題目	演劇者	劇場
四月十三日	痴人と死と	新時代劇團	有樂座
六月一日、二日	奇蹟	自由劇場	同
同月	僧房の夢	演劇同志會	同
十月二十六、七日	寂しき人人	自由劇場	帝國劇場
十一月末	手袋		高等演藝館

公職

五月十六日文藝委員會官制が公布せられ、十七日同委員會委員を仰付けられた。前年から噂のあつた文藝院がこの形で實現されたのである。

八月十七日美術審査委員會委員を仰付けられ、第二部（洋畫）主任を命ぜられた。

十四、歴史小説の製作

同四十五年一月一日中央公論第二十七年第一號に創作「かのやうに」、文章世界第七卷第一號に同「不思議な鏡」、昴第四年第一號に Ewers の「己の葬」、三田文學第三卷第一號に Hans Kyser の「汽車火事」、心の花第十六卷第一號に Rilke の「祭日」、東亞之光第七卷第一號に Dathew von Liliencron の「老曹長」、帝國文學第十七卷第一號に Hans Land の「冬の王」、文藝俱樂部第十八卷第一號に Vladimir Galaktionovitch Korolenko の「樺太脫獄記」、女子文壇第八年第一號新年特別號に Rilke の「驅落」、歌舞伎第一三九號に Verhaeren の脚本「僧院」、東京日日新聞に同「みれん」が掲載された。「僧院」は八月第一四六號まで連載し、大正三年六月第一六八號より九月第一七一號に至つて完結したが、宗教上の詞が困難な爲に最も骨が折れたさうである。又「みれん」は三月十日まで（一月六、八、九、二十二、二十四、二十七、三十一、二月三、五、十二、十九、二十六、二十八、三月三、四日休掲）分載完結し、七月五日籾山書店から橋口五葉氏圖案蝴蝶模樣の表紙をつけた四六判、洋綴、紙裝三八一頁で刊行され、大正五年十二月五日には三五判、洋綴、クロオス裝二九〇頁の縮刷版にもなつた。これは大版の鷗外全集には收められなかつたが、普及版には第十三卷に入り、昭和三年四月十五日岩波文庫三一一―三一二にも入つてゐる。菊半截判、假綴、紙裝一八〇頁に小嶋政二郞氏の附記が五頁ある。

その他俳味第三卷第一號に「俳句といふもの」と題し、父と上京した時の事や祖父の俳句などが記されて居り、與謝野晶子女史著新譯源氏物語の序も是月に作られた。二月三月は連載物の外に新作は無かつた。

三月二十五日わたくしは京都から郷里に結婚の爲に歸り、三十日式を擧げた。妻は兄の幼年の師米原綱善翁の長女である。母は東京から京都に來て家を探してくれ、暫らく一緒に居てから歸京した。

四月一日中央公論第二十七年第四號春期大附錄號に創作「鼠坂」、演藝俱樂部創刊號に Schmidt-Bonn の「ヂオゲネスの誘惑」、歌舞伎第一四二號に連載中の「僧院」のほかに Schnitzler の「戀愛三昧（リイベライ）」（九月第百四十七號にて完結）、女子文壇第八卷第四號特別號に Wilhelm Schäfer の「父と妹」が載つた。猶中央公論には諸家の「坪內逍遙論」があつて、その中に「坪內逍遙君」の一篇がある。

四月審美書院から、希臘羅馬諸神傳が半紙判、和紙和裝四冊として出版されたが、これは大村西崖氏の編纂した原稿を兄が校閲し、更に高楠順次郎、久米桂一郎兩氏が一閲し、末松謙澄男と兄とが序文（前年九月草）を書いたのである。

五月一日中央公論第二十七年第五號に創作「吃逆」、昴第四卷第五號に Henri de Régnier の「不可說」が載つた。十五日美術審查委員會官制中改正の件裁可せられ、十六日の官報を以て公布、附則に「現に委員たる者は本令施行の日に於て解任せられたるものとす」とあり。同月岡崎桂一郎氏著日本米食史の序を草した。

六月一日三田文學第三卷第六號に Karl Vollmoller の「正體」（八月まで三回にて完結）、中央公論第六號諸家の與謝野晶子女史論の中に「與謝野晶子さんに就て」がある。十五日太陽第十八卷第九號（博文館創業二十五週年記念臨時增刊「蜚飛二十五年」）には創作「藤棚」を揭げ、同月安藤鶴城氏著犬の實用的研究、及び石川戲庵譯ルウソオ懺悔記に序文を草した。七月は連載物の他に新作は無く、「みれん」刊行の事は前に記した。

大正元年八月一日中央公論第八號に創作「羽鳥千尋」、昴第八號に Franz Molner の「破落戶の昇天」が載つた。十五日籾山書店から「我一幕物」が「みれん」と同じ橋口五葉氏圖案蝴蝶模樣紙裝で刊行された。四六判、

洋綴三五八頁、「プルムウラ、玉篋兩浦嶼、生田川、靜、日蓮上人辻說法、假面、なのりそ」（以上脚本）「團子坂、さへづり、影、建築師、」（以上對話）「長宗我部信親」（敍事歌詩）「脚本プルムウラの由來」、「玉篋兩浦嶼自註」「兩浦嶼の衣裳と道具」（久保田米僊）・「日蓮上人辻說法故實」（久保田米僊）、「長宗我部信親自註」が收めてある。

九月一日は三越第二卷第十號の創作「田樂豆腐」の他、昴、三田文學、歌舞伎とも連載物である。十日曩に易風社が出した「一幕物」正續を合して籾山書店から刊行せられた。菊判、洋綴、クロオス裝、小口染、紙數四〇六頁である。

十月一日中央公論第十號に「興津彌五右衞門の遺書」を出したのが、歷史小說の初めである。菊池寛氏は新小說鷗外追悼號に

森鷗外氏の歷史小說に依つて、初て近代味のある歷史小說に接したと云つてもいい。語を換へて云へば、鷗外氏が日本では最初に近代小說の手法を以て歷史小說を書いたと云へると思ふ。然らばその手法は何であるかと云ふと、峻嚴な現實主義である。

鷗外さんの歷史小說は、その手法も題目もあくまでリアルである。決してウソを書かない、鷗外氏以後に出た歷史小說は、芥川氏のものにしろ自分のものにしろ虛構がある。が鷗外氏にはそれがない、飽くまでも理責めである。煉瓦を一枚宛疊みあげて行つたやうに理責めである。何處にもゴマカシがない、あやふやがない。整然として義理明白である。が鷗外さんのこうした合理癖徹底癖は、とうとう小說では滿足し切れなくなつて、小說よりはもつとゴマカシの利かない傳記物考證物に走つてしまつたのであらう。

といふてゐられる。兄自身は大正四年元旦心の花に寄せた「歴史其儘と歴史離れ」に歴史小説を書き出した動機を記してゐる。その要點は

小説には事實を自由に取捨して纏まりを附けた跡がある習であるが、かう云ふ手段をわたくしは近頃小説を書く時全く斥けてゐる。なぜさうしたかといへば、その動機は簡單である。わたくしは史料を調べて見て、その中に窺はれる「自然」を尊重する念を發した。それを猥に變更するのが厭になつた。これが一つである。わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。これが二つである。

わたくしはあの類の作品が、他の物と違ふ點は、巧拙は別として種種あらうが、その中核は右に陳べた點にあるとわたくしはおもふ。

十月の昴第十號に Marcel Prevort の「田舍」(十二月完結)、歌舞伎第一四八號には Goethe の戯曲「ギョッツ」(大正三年三月完結)が出た。

十一月司馬僧正著拙者は大石內藏助ぢやの序文を草した。司馬僧正は井上卓一氏、卽川柳家として有名な劍花坊氏ださうである。この序文の自筆は久しく吉田書店にあつたが、今は臺北帝國大學瀧田貞治氏の架藏に歸した。

十二月は中嶋清譯「復活の日」の序を作つた。この兩月には新作は無い。

上演

初日	題目	演出者	劇場

一　月	幽靈、手袋	演藝同志會	有樂座
四　月	猛者	土曜劇場	同前
五　月	癡人と死と	同前	同前
六月五日	ヂオゲネスの誘惑	同前	同前
七　月	飛行機	同前	同前
十　月	街の子	同前	同前
十月十一日	家常茶飯	有樂座女優劇	同前
十一月二十九日	僧房夢	同前	同前

小山内薫氏外遊送別として興行された。

同二年一月初刊の雜誌に發表されたものは

阿部一族	創作(歷史小說の二)	中央公論第二十八年第一號
ながし	創作	太陽第十九卷第一號
復讐（Régnier）	翻譯(四月完結)	三田文學第四卷第一號
馬丁（Alexei Tolstoi）	同前	昴第五年第一號
請願（Ewers）	同前	心の花第十七卷第一號
老人（Rilke）	同前	帝國文學第十九卷第一號

一人者の死 (Schnitzler)　同　前　東亞之光第八卷第一號
夜の二場 (Frida Steenhof)　同　前　大正演藝創刊號

で、十五日には冨山房から「ファウスト」第一部が刊行された。文藝委員會の囑によつて譯したもので、四六判、洋綴、太田正雄氏裝幀、小口染、五〇七頁、第二部は三月二十二日刊行、七九九頁である。同六年十一月十一日縮刷版が菊半截判で刊行せられ、體裁は右の通り、紙數六八二頁、昭和三年岩波書店の岩波文庫に收め、七月と九月に分刊された。

二月十日「青年」が籾山書店から例の橋口氏の蝴蝶模樣表紙、四六判、洋裝で刊行され、二十一日「戀愛三昧」が近代脚本叢書第一編として、現代社から三五判、洋綴、杉浦非水氏圖案表紙で出版された。櫻井忠溫氏著銃後のために「題言七則」を書いたのもこの月である。

三月一日新日本第三卷第三號に Jules Clarete の「猿」、新思潮第三號(卷數不明) Anatole France の「舞踏」を載せ、三十日籾山書店から「新一幕物」が蝴蝶模樣表紙で刊行され、「人力以上、パリアス、一人舞臺、夜の二場、馬盜人、ヂオゲネスの誘惑」が收めてある。

四月一日中央公論第二十八年第四號に歴史小說の第三「佐橋甚五郎」が出た。五月一日心の花第十七卷第五號に「譯本ファウストに就て」、三田文學第四卷第五號に Molher の「最終の午後」が載り、二十八日實業之日本社から翻譯小說集「十人十話」が出版された。四六判、洋綴、紙裝、橋口五葉裝幀、二八三頁。「世界漫遊、一人者の死、冬の王、父と妹、塔上の鷄、請願、汽車火事、二髑髏、勞動、老曹長」が收めてある。

六月一日新小說第十八年第六卷に Poe の「病院横町の殺人犯」、三田文學第四卷第六號に Molner の「辻馬車」を載せ、又陸軍衞生制度史の序文を作つた。十三日文藝委員會官制が廢止せられた。十五日籾山書店から歷史小說集「意地」が出版された。縱六寸四分、橫四寸三分、洋綴、紙裝、一四〇頁、「阿部一族、興津彌五右衞門の遺書、左橋甚五郎」を收めた。二十八日雙木園主人著重刊戲曲小說通志の序を作つた。

七月一日中央公論第二十八年第七號に創作「槌一下」、三田文學第七號に Michael Alexevich Kuzmin の「フロルスと賊と」とが載り、五日籾山書店から創作集「走馬燈」「分身」が一箱に收めて刊行された。走馬燈は縱六寸四分、橫四寸二分、洋綴紙裝、小口染、二四九頁、「藤鞆繪、蛇、心中、鼠坂、羽鳥千尋、百物語、ながし」、「分身」は一七四頁で、「妄想、カズイスチカ、流行、不思議な鏡、食堂、田樂豆腐」が收めてある。二十三日警醒社から Shakespeare の「マクベス」が「フアウスト」と同體裁の洋綴、クロオス裝、二七七頁、小口染、太田正雄氏裝で刊行され、卷頭に坪內雄藏博士の序文がある。

八月一日昴第五年第八號に Karl Hans Strobl の「刺絡」(十月まで三回)、三田文學第八號に Maxim Gorjki の「センツアマニ」を載せ、十日ホトトギス第十六卷第十號二百號記念催能について諸家から寄せた感想の第二回中に「能は極端に樣式化したる人間の行爲である」と唯一行が認めてある。

九月一日三田文學第九號に「ギヨオテ年譜」、東亞之光第八卷第九號に「不苦心談」、(フアウスト誤譯指摘四ケ條) 文藝俱樂部第十九卷第十二號に Leo Graf Tolstoi の「出家(パアテル・セルギウス)」、十月一日ホトトギス第十六卷第十號に史實小說「護持院ケ原の敵討」、三越第三卷第十號に創作脚本「女がた」、三田文學第十號に Frédéric Boutet

の「橋の下」、十一月一日昴第五年十一號に「ノラの解題」、三田文學第十一號に Camille Renonnier の「聖ニコラウスの夜」（十二月まで二回）が載り、八日アララギ伊藤左千夫記念號の爲に「伊藤左千夫年譜」を作つた。單行本は左の三種がある。

ノ　ラ　四六判、洋綴、小口染、警醒社刊行。

本文二四六頁、解題二十一頁、昭和七年八月十五日世界名作文庫四〇二として春陽堂から刊行された。

フアウスト考　四六判、フアウストと同體裁（太田正雄氏裝）、文藝委員會の囑による。本文三七二頁、目次二九頁、富山房刊行。

ギヨオテ傳　四六判、右と同じ、五八六頁、富山房刊行。

十二月一日昴第十二號に Georg Hirschfeld の「防火栓」を載せたが、同誌は發行後五年目の本號を以て終刊となつた。本月の近代創刊號に「ノラと秋夕夢」がある。籾山書店から出版した田中榮三氏の近代劇精通に森鷗外補とあるが、全冊に補訂を施した意味では無く、本書に獨逸作品の梗槩九十二篇を與へたのによるのである。

上演

初日	演題	演出者	劇場
一月二日	飛行機	土曜劇場	有樂座
三月二十七日	フアウスト	近代劇協會	帝國劇場
五月一日	フアウスト	同前	大阪帝國座

五月四日	阿部一族	伊井蓉峰一座	明治座

（上の巻）阿部屋敷、（中の巻一）熊本向陽院詰所、（同二）本堂、（同三）元の詰所、（下の巻一）阿部屋敷、（同二）同屋敷裏門、（同三）元の屋敷の七場に脚色された。

八月一日	秋夕夢	近代劇協會	有樂座
九月二十六日	マクベス	近代劇協會	帝國劇場
九月二十九日	僧房夢	新派劇	京都明治座
十月一日	女がた	公衆劇團	有樂座
十月二十六日	女がた	同前	大阪中座
十一月十一日	女がた	同前	京都明治座
十一月廿一日	秋夕夢	近代劇協會	大阪近松座
十一月廿八日	負けたる人	舞臺協會	帝國劇場

ファウストが初て東京で上演せられた時、わたくしは京都に居つた。それが大阪北濱帝國座で興行されると定まつて、兄から五月五日附で

拜啓近代劇協會ヘハ此葉書ト同時ニ賴遣候上山夫婦カ伊庭孝カガ面會可致候。Faustハ訂正本近日出來ノ上御送可申候

と葉書で知らせてくれたので、八日にわたくしは妻を連れて大阪に赴き、中之嶋の旅館（名を忘れた）に伊庭氏を訪

ひ、同氏と同伴して帝國座に行き、上山氏夫婦その他の人人にも面會し、場所を取つて貰つて見物した。樂屋へ麥酒を寄贈した爲に、歸る前寫眞に銘銘自署して、裏面に

大正二年五月八日　近代劇協會同人

鷗外先生譯ファウスト第一部
近代劇協會大阪上場記念
森　潤　三　郎樣

と書いたのを送られ、夜に入つて歸洛した。

醫學衞生

六月一日陸軍衞生制度史に軍醫團長として緒言を書いた。

公職

二月五日臨時宮内省御用掛を仰付けられた。この拜命は當時宮内省で衞生上の顧慮から大膳寮に完全な施設をなすべき必要を認めたが、侍醫寮は平素此の衞生試驗等に關係しないので、特にその建築及び指揮を託せられたものである。これに就いては報知、時事、やまと、大阪每日各新聞に記事が出で、三月一日太陽第十九卷第三號醫界評論に日東學人が六頁に涉つて批判を試みた。

同三年一月一日中央公論第二十九年第一號（三百號記念號）に創作歷史小說「大鹽平八郎」、三田文學第五卷

第一號にも「大鹽平八郎」と題して、その執筆の由來、平八郎年譜、徒黨裁決の結果等を揭げた。同時歌舞伎第一六三號に Strindberg の脚本「稻妻」(五月にて完結)、昴の同人によりて創刊された我等に Wied の「尼」が發表された。二月一日新小說第十九年第二卷に創作「堺事件」、三田文學第二號に「ギョッツ考」、我等第二號に「譯詩九篇」、三月一日新小說第三卷に脚本「曾我兄弟」、番紅花創刊號に、創作「サフラン」、我等第三號に戲曲「オレフエウス」(未定譯稾)新思潮(號數不明)に France の「舞蹈」を載せた。

四月一日太陽第二十卷第四號に歷史小說「安井夫人」、番紅花第一卷第二號に Melchior Lengyel の「毫光」、我等第一卷第四號に「舊劇の未來」に就いての意見を揭げた。三日文學博士佐佐木信綱氏著明治天皇御製譯註やまと心の附錄に「戴冠詩人」と題して、ルウメニアの妃 Carmen Sylva が乃木將軍に贈られた詩の事から、將軍と兄との關係が述べてある。三日は本書の刊行された日で、この文は二月二十一日に成つてゐる。五日籾山書店から創作小說集「かのやうに」が刊行された。縱四寸九分、橫三寸六分、假綴、紙裝、箱入、「かのやうに、吃逆、藤棚、鎚一下」を收め、二四三頁の小冊である。十七日通俗教育普及會發行の日本孝子錄の序を書いた。二十日讀賣新聞日曜附錄に談話「ハアゲマン氏の事」、二十四日の同紙に談話「柵草紙のころ」が出た。

五月一日我等第五號に「カルル・ハアゲマン」を揭げ、五日 Hofmannsthal の戲曲翻譯「謎」が現代社から、四六判、洋綴、クロオス裝三八四頁、箱入で刊行され、七日鳳鳴社から「天保物語」が、菊判、洋綴、紙裝二三一頁、表紙は橋口五葉氏裝、「護持院ケ原の敵討、大鹽平八郎」の二篇が收めてある。

六月一日我等第六號に「譯詩十一篇」、七月一日同誌第七號に Frédéric Mistral の「ソルボンヌの蛙」、番紅花

第五號に Lord Dunseny の「忘れて來たシルクハット」が出てゐる。二十日發行通俗教育叢書第二編古今孝子錄に序を書いた。

七月十八日東京堂が刊行した副嶋八十六氏著義太夫新論に題詞を書いた。

八月一日我等第八號に Aage Madelung の「父の讎」、心の花第十八卷第八號九月第九號に「北遊記」が出た。「北遊記」は是年五月四日軍隊衞生視察のため上野を發し、仙臺、盛岡、靑森、函館、札幌、旭川、弘前、秋田、山形、福嶋を經て、十九日東京に歸る、その間寸暇を利用して觀覽せる圖書館、寺院、舊家の、所藏品、名家の墳墓に就いての記錄である。

九月一日太陽第二十卷第十一號に史傳「栗山大膳」、我等第九號に「オルフエウス」(第二稾)を出し、二十八日實業之日本社出版、世界名著物語の第六編後藤末雄氏著モリエール物語の卷頭に「解說モリエールの生涯」を書いた。

十月一日歌舞伎第一七二號に「オルフエウス」(翻譯に就いての話)を揭げた。二十三日鈴木三重吉氏現代名作集第二編として「堺事件」に「安井夫人」を合せて刊行した。三五判、假綴、紙裝、一〇五頁、津田靑楓氏裝畫である。

十一月一日歌舞伎第一七三號に「舊劇を如何にすべきか」と題して意見を述べ、十二月の同誌第一七四號に「亡くなつた原稾」を書いた。これは某雜誌記者が兄に强請して「翻譯に就きて」といふ短篇を書かせ、持歸つたきりでその雜誌にも出でず、行衞が知れなくなつた事を記したもので、兄も生前には分らずに過ぎたが、全集編

藁の事業が起つてから、大阪の船越政一郎氏によつて東京萬卷堂發行の現代二十名家文章作法講話の中にその原稿が入れてある事が知られて、幸ひ全集に收めることが出來た。

公　演

是年公演せられたもので、わたくしの知つたのは左の如くである。

初日	演題	演出者	劇場
一月二日	馬盗坊	新劇社	有樂座
二月二十六日	曾我兄弟	狂言座	帝國劇場
三月一日	戀愛三昧	黑猫座	有樂座
七月十四日	復讎	藝術座	
七月十五日	大ヂオゲネスの誘惑	有樂座喜劇團	横濱本牧演舞館

敍　位

十一月十日從三位に敍せられた。

公　職

八月十一日美術審査委員會委員仰付けられ、第二部主任を命ぜられ、九月二十二日臨時博覽會鑑査官仰付けられた。

十五、考證學者傳記の研究

大正四年元旦の雜誌に載つたものは左の如くである。

山　椒　大　夫（創作）　　中央公論第三十年第一號
歷史其儘と歷史離れ　　心の花第十九卷第一號
鑑　　定　　人（Paul Bourget）　　新小說第二十年第一卷
オデッセウスの弓　　歌舞伎第百七十五號

一月十五日國民文庫刊行會から文庫第八冊に「諸國物語」が刊行された。菊判、洋綴、クロオス裝九四二頁、天金、津田靑楓氏裝幀。

尼、薔薇 以上二篇瑞典）。クサンチス、橋の下、田舍、復讎、不可說、猿、一匹の犬が二匹になる話（以上七篇佛蘭西）。聖ニコラウスの夜（以上白耳義）。防火栓、己の葬、刺絡、（以上三篇獨逸）。アンドレアス・タアマイエルが遺書、正體、祭日、老人、驅落、破落戶の昇天、辻馬車、最終の午後、襟、（以上九篇墺太利）。パアテル・セルギウス、樺太脫獄記、鱷、センツアマニ、板ばさみ、笑、死、フロルスと賊と、馬丁、（以上九篇露西亞）。うづしほ、病院橫町の殺人犯、十三時、（以上三篇亞米利加）。

を收めてある。二十二日木下杢太郎氏著唐艸表紙の序を作つた。

二月二十二日至誠堂書店から大正名著文庫第十四編として、藝術に關する雜文三十七篇を收めた「妄人妄語」が刊行された。四六判、洋綴、クロオス裝四〇七頁、川村淸雄氏の裝幀である。

四月一日アルス創刊號に小說「天寵」、中央公論第三十年第四號に史傳「津下四郎左衞門」を發表した。四郎左衞門は名を正義といひ、明治二年正月五日京都寺町御靈社前で、御所から退出した參與横井平四郎を要擊した刺客の一人で、その遺子正高は一時次兄と大學で同級であつた。その正高が大正二年十月兄を訪ふて父の事蹟を語つた時の聞書で、兄はこれを發表するに先立て、子爵杉孫七郎、陸軍少將中岡默、鄕人山邊丈夫の諸氏に照會し、人物、場所、日時等を正確にし、又河內譽田神社の中幸男、法學博士尾佐竹猛等諸氏の注意を得た。

五月一日三田文學第六卷第五號に小說「花子」、アルス第二號に「二人の友」を載せた。前者には彫塑家ロダン翁が出で、後者には小倉で得た友人安國寺住職玉水俊虠師と獨逸語學者福間博氏が出てゐる。十五日籾山書店から昴に連載された長篇小說「雁」が刊行された。四六判、洋綴、絹繻子裝、天金二八八頁、箱入で、卷頭に橫山大觀氏畫蘆雁一葉を添へてある。絹繻子に紅、青の二種あり、又赤クロオス裝もありて、これには表紙の周圍を繞る金線を缺き、背文字の枠等に異なる所がある。

五月下旬　大正天皇陛下より最近の詩作を差出せとの命が侍從職から傳へられ、五言律を謹書して獻上した。

欲頌休明德。　深羞藻思虛。　陽熙加草木。　風化及禽魚。

日麗宮華發。　春催官柳舒。　聖恩酬未得。　奈此鬢毛疎。

七月十三日帝國軍人後援會が出版した譯本獨逸國民之將來は、獨逸國陸軍大將 Friedrich von Bernhardi の著書を、東京高等師範學校教授大瀬甚太郎氏が譯したもので、卷頭に東鄉平八郎、川村景明、明石元二郎、森林太郎の題辭の自筆を石版とし、高田早苗氏と譯者との序文があり、附錄に大竹澤治、大隈重信、立花小一郎、佐治實然氏の讀後感がある。兒の題辭は

　將軍投劍入詞林。述作還垂藥石箴。拓土秪應憑白刃。增兵何敢問黃金。由來列國强欺弱。至竟庸人淺測深。
　傳譯欲醒塵俗夢。看他耿耿濟時心。

同月十五日中央公論第三十年第八號に小說「魚玄機」を出し、八月一日心の花第十九卷第八號にある「松村夫人に」は、同夫人の譯したキャプテン、ブラスバオンドの改宗の序詞である。同月アルス第五號に小說「餘興」、九月一日新小說第二十年第九號に小說「ぢいさんばあさん」、十月一日中央公論第十一號に小說「最後の一句」が出た。「魚玄機」「ぢいさんばあさん」「最後の一句」は、いづれも所謂歷史離れの作品である。

九月五日阿蘭陀書房から「沙羅の木」が刊行された。縱六寸二分、橫四寸二分、洋綴、布裝二三四頁、天金、見出し色刷、北原白秋氏裝幀で、收むる所は Dehmel 八篇、Morgenstern 一篇、Klabund 十篇、Bjornson, Gluck, Schottelius 各一篇に、作詩沙羅の木初め十五篇と短歌「我百首」である。序によれば「沙羅の木」は雜誌明星後期の誌上に發表したものを主とし、同じ時代同じ嗜好から生れたものは他誌の分も採つて集めてある、十日には「一幕物」合本の訂正再版が出た。十月十三日通一舍から千朶山房叢書第一編として、Strindberg の「稻妻」と Verhaeren の「僧院」とを合した「稻妻」が、縱五寸四分、橫三寸八分、洋綴和紙刷、布裝三一九頁、見出し色

刷で刊行された。

十一月八日の夕、大正天皇御卽位の大禮に參列の爲東京驛を發し、翌日七條驛より直にわたくしの家に至り、十八日午前九時四十二分出發歸京まで滯在した。當時わたくしの家は出町橋の東田中村に在つて、前面は西園寺侯の別莊で、宅の二階裏からは比叡山が眺められ、御所へも近く、朝夕の行事から食事まで嗜好を知つてゐるから、兄も大層滿足してくれた。參列した大禮の實況、わたくしが案內して市內及び伏見嵯峨に遊んだ事たどは、十二日から二十二日まで東京日日、大阪每日兩新聞に「盛儀私記」と題して寄稿し、後訂正して一冊とし、親戚知人に配布した。わたくしはその原稾をも貰ひ受けて藏してゐる。

十二月二十三日千章館から創作小說集「ちりひぢ」が刊行された。四六判、洋綴、紙裝一九二頁、橋口五葉氏裝幀、「うたかたの記、舞姬、文づかひ、そめちがへ」を收めてある。

上　演

今年の上演は十月十六日から二十日まで舞臺協會が「首陀羅」を有樂座でやつた他は知らない。

敍　勳

四月二十四日勳一等に敍し、瑞寶章を授けられた。

公　職

八月十三日美術審査委員會委員仰付けられ、第二部主任を命ぜられた。

同五年元旦發表の作品を例によりて列擧すれば左の通りである。

高瀬舟（小說）	中央公論第三十一年第一號
寒山拾得（小說）	新小說第二十一年第一卷
高瀬舟と寒山拾得（緣起）	心の花第二十卷第一號
白衣夫人（Rilke）	演藝畫報第三年第一號

猶元旦から八日まで（五日を除く）大阪每日、東京日日兩新聞に「椙原品」を七回に分載した。前年大禮參列に出發する間際に、某誌に仙臺に高尾の後裔が居るといふ話が書いてあるのを見て、その誤を說くと共に、逼塞を命ぜられた伊達綱宗と、その夫人三澤氏初子、妾椙原氏品との關係を書いたもので、兄はかう云つてゐる。

私はこの伊達騷動を傍看してゐる綱宗を書かうと思つた。外に向つて發動する力を全く絕たれて、純客觀的に傍看しなくてはならなかつた綱宗の心理狀態が私の興味を誘つたのである。私はその周圍にみやびやかにおとなしい初子と、怜悧で氣骨のあるらしい品とをあらせて、この三角關係の間に靜中の動を成り立たせようと思つた。しかし私は創造力の不足と平生の歷史を尊重する習慣とに妨げられて、この企を抛棄してしまつた。

これまで兄の書いた史傳は、「栗山大膳」も「津下四郞左衞門」も、この「椙原品」も文學的の色彩があつたが、「椙原品」に續いて一月十三日より兩新聞に揭載された「澀江抽齋」から、愈本格的で新工夫の史傳が始まることになつた。

澀江抽齋は津輕藩江戶定府の儒醫で、考證學者の一人である。凡そ支那の經籍にせよ、本邦の古典にせよ、こ

れを眞に研究せんとする者は、先づその書の淵源する所を究めて、その最古最精の版本なり抄本なりを捜討し、比較考勘してその最善のものに從はねば、流傳久しく彼此乖異を生じ、古人の眞意を言語文字の間に求めることが出來ない。かう云ふ研究をすることを考證學又は考勘學といひ、この派に屬する者を考證學者と稱するのである。我邦でこの學派を首唱した人を篁墩吉田漢官となし、これに繼で起つたのを棭齋狩谷望之といふ。棭齋鑒別尤も精しく、藏書亦頗る富み、この學が確立したのはその力與つて大なるものがある。棭齋の友人に迷庵市野光彥、寶素小嶋尙質、蘭軒伊澤信恬があり、門人に抽齋澀江全善、枳園森立之が出た。兒の「觀潮樓閒話」は軍職を退いて閑散の身となつた後の談話を筆記したもので、それに

わたくしは目下何事も爲してゐない、ただ新聞紙に人の傳記を書いてゐるだけである。何故に傳記を書くかといふに、別に廉立つた理由は無い。わたくしは或時ふと武鑑を集め始めた。そして昔武鑑を集めて研究した人に澀江抽齋のあることを知つた。それから抽齋が啻に武鑑を集めたのみで無く、あらゆる古本を集めて研究したことを知つた。それからその師友に狩谷棭齋があり、伊澤蘭軒があり、小嶋寶素があり、森枳園があることを知つた。わたくしはこの人人の事蹟が、棭齋を除くの外、殆世に知られてゐぬことを知つた。そしてふとその傳記を書き始めたのである。わたくしは此等の傳記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない、ただ書きたくて書いてゐる。

といふてある。兒は此等學者の事蹟を調査しようと思ひ立つて、種種苦心の結果先づ抽齋の後嗣保翁を尋ね當てて、その所藏記錄と知友の示教とに基き、新に之を表現すべき體例を定めて筆を執り、五月十七日まで百十九回

に連載した。保翁に贈りし書翰百數十通に及べる中、傳記編纂に關係あるもの七十餘通を撰み、翁自ら之を寫し且つ（一）抽齋編纂に關するもの、（二）壽阿彌、（三）蘭軒、（四）慊堂、（五）雜件の五に分類し、又序を冠して印刷に附する積らしかつたが、翁逝去の爲その運びにも至らず、原物は悉く散佚してしまつた。

二月松本苦味氏著泰西五名家箴言集珠玉抄の題辭を書いた。

三月二十八日午後零時四十五分母峰子が七十一歳で歿し、法號は兄の撰んだ硯山院峰雲谿水大姉とつけ、自宅で告別式を擧げ、荼毘した遺骨はわたくしが奉じて近江土山常明寺に埋葬した。母の若い頃の苦心談はこの書の初にも書いたが、明治三十六年三月十三日讀賣新聞にその頃連載された名士の父母と題するものの中にも擧げられてゐる。母は太田の原の家や觀潮樓で開かれた文學者會合の席に出てその話を聞き、夜十二時過には女中を寢かせて、自分で酒肴の世話をした。また觀劇と旅行を好み、觀劇は次兄が劇評家で便宜がある爲に、歌舞伎座は大概毎回見物した。旅行も日光成田などから、わたくしが京都に居る頃は再三來て諸處見物に連れて往つた。

四月一日心の花第二十卷第四號に「告亡友三浦氏文」を載せた。大學の同窗で病理學の教授三浦守治博士を追悼した文である。

五月五日歌舞伎に連載した Goethe の「ギョッツ」が三田文學會から刊行された。四六判、洋綴、クロオス裝三六八頁、天金、太田正雄氏裝幀、カットは和田英作氏である。昭和七年八月十五日春陽堂の世界名作文庫第二〇一にも收められた。十五日母の盡七日記念に「阿蜜哩多軍荼利法」一卷を印刷して、親戚知友に配布した。縱七寸五分、横五寸、和紙刷、和裝紺表紙、袋入、五二八頁。卷頭の大村西崖氏の序に本書の由來を說明し、標題

の紙裏頁に

願以此功德回向

硯山院峰雲谿水大姉　　　　森林太郎源高湛印施

冥福爲菩提資糧

と印刷してある。十八日から六月二十四日までの東京日日、大阪毎日兩新聞に「壽阿彌の手紙」が三十二回に連載されに。四年の大晦日に築地の弘文堂で手に入れた劇神仙壽阿彌長嶋五郎作が、駿河嶋田驛の素封家桑原苾堂に宛てた罫紙十二枚綴の手紙により、發信者壽阿彌とその親戚知友、受信者苾堂とその親戚知友、手紙の中に出てゐる人物九人との事蹟を考證してある。その翌二十五日から考證學者の第二として「伊澤蘭軒」が、翌六年九月十五日まで三百七十一回に連載された。蘭軒は備後福山藩の儒醫で、その材料は後嗣徳翁と、文學博士醫學博士富士川游氏、蘭軒と同藩の濱野知三郎氏の所藏に據つたもので、記述の體例も能く整つてゐる。最後にそれに就いて

わたくしは筆を行るに當つて事實を傳ふることを專にし、努て敍事の想像に涉ることを避けた。客觀の上に立脚することを欲して、復主觀を縱ままにすることを欲せなかつた。その或は體例に背きたるが如き迹あるものは、事實に缺陷あるが故に想像を藉りて補塡し、客觀の及ばざる所あるが故に主觀を倩つて充足したに過ぎない。若し今事の傳ふべきを傳へ畢つて、言讃評に亘ることを敢てしたならば、是は想像の馳騁主觀の放肆を免れざる事となるであらう。わたくしは斷乎としてこれを斥ける。

これが史筆に對する兄の見識である。兄は主人公を傳すると同時に、その子孫の成り行きから交友をも一一穿鑿した。それに就ては

わたくしの敍法には猶一の稍人に殊なるものがあるとおもふ。（中略）一人の事蹟を敍して其死に至つて足れりとせず、其人の裔孫のいかになりゆくかを追蹤して現今に及ぶことが即ち是である。前人の傳記若くは墓誌は子を說き孫を說くを例としてゐる。しかしそれは名字存歿等を附記するに過ぎない。わたくしはこれに反して前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐるのを見、其絲を斷つことをなさずして、組織の全體を保存せむと欲し、敍事を繼續して同世の狀態に及ぶのである。

といふてゐる。

「伊澤蘭軒」を書き出してからは、京都に關係する事に就いて屢わたくしに照會あり、又氣の付いた事をお互に知らせ合つて、その都度本文に書き加へてある。五年四月十三日附の書狀には

（前略）伊澤傳ある雜誌暫時留置候テ差支無之候哉〇伊澤榛軒妻ニ付御問合セ被下奉謝候猶他ノ方面ヘモ御問合セ被下度候蘭軒妻ハ岡藩飯田休庵女ニ有之候榛軒妻モ亦飯田氏ナル由伊澤家ニテ申候後ノ方ノ飯田氏ガ不明ナルワケニ候榛軒妻名ハシホト申候

同年十二月十七日の蘭軒傳百六十六に、文政八年三月十三日蘭軒が不忍池に詩會を催した時、列席した人の中で餘語天錫を不明としてあつた。わたくしは公務が年末多忙の爲に熟讀する暇が無く、漸く御用納めとなつてから讀んで氣付いた二三の事と共に、翌年一月五日御用始の翌日餘語氏の墓の駒込龍光寺に五代續いて存すること、

四世瑞成は文化十一年に歿し、五世瑞典は嘉永元年に歿してゐるから、天錫は瑞典の字であらうと言ひ送つた。七日附で兄から

拜啓餘語ノコト忝候直ニ往ツテ見レバ曾テ弔シタ安井息軒長男朝隆夫婦ノ墓ノ隣ニ候御書キモラシノ分ハ「拙存齋余語良仙瑞成先生墓」ト題シ有之候然ルニ元祿享保安永ノ三石ハ既ニ亡シ坊サンナカナカスバヤイト驚歎イタシ候也

一月七日午後　　　　林　太　郎

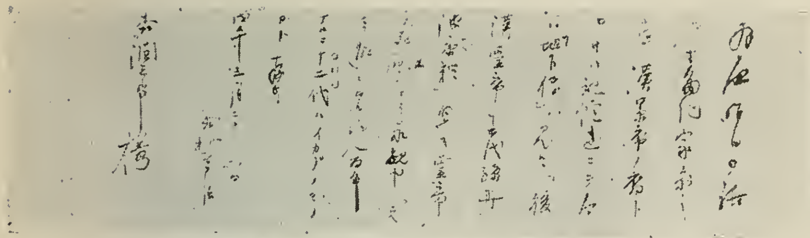
潤　三　郎　樣

と返事が來て、新聞には「弟潤三郎はこれを讀んで」云云と追加が出た。わたくしはこれで全く古い三墓は廢せられた事と思つたが、歸京後往つて見たらば、三墓は既に亡しと書いたのは誤で、その三墓は瑞典の墓を距ること西の方二間程の別の所にあつたのを氣付かなかつたのであつて、これは坊サンの爲には寃罪であつた。わたくしの手紙が着くに先立て兄から六日附で

（前略）扨貴地三本木ナル頼山陽ノ家ノアトハイカが相成居候哉山陽以後ノ家屋ノ沿革若シワカリ候ハバ乍御手數御爲知被下度御依賴申上候

等がある。翌七年東京へ歸つて、三月二十一日の夜遲くまで澀江、伊澤、小嶋より幕府漢方醫官の元首多紀家の事など話して歸つた、その翌日次の手紙が來た。

拜啓昨日御話申候多紀家系之事漢景帝ノ裔ト申候ハ記憶違ニテ今日「地下傳」ヲ見ルニ「後漢靈帝十二代孫丹波康頼」ト有之候靈帝ノ死（(189p. Chr.) ヨリ永觀中（元年 983 ）ニ至ル約八百年ナルニ十二代ハイカガノモノカト存候



多紀家系に關する書簡

兄の手紙は卷紙に毛筆で、假名はすべて片假名を用ひ、弟妹宛のものでも文言は簡潔ながら鄭寧である。「北條霞亭」の時は、霞亭を瘞した廣嶋の醫惠美三白の墓を頼まれ、赤坂一ツ木不動威德寺に得て報告したこともあつた。

「伊澤蘭軒」を書き出した翌七月六日、七日の兩新聞に「空車」を書いた。何か寓意のあることかと思ふが、わたくしは東京に居なかつたから、それについては知る處が無い。

澀江抽齋の女陸は杵屋勝久といふ長唄の師匠で、その事蹟は抽齋傳の後に記されてゐるが、是年十、十一、十二月の雜誌邦樂に、それだけを切離して「杵屋勝久」と題して載せた。

是年（月日不明）獻上本作文集の序を作つた。

兄は壯年時代毎日のやうに古人の詩を寫し、又詩集をも購入し、又時時は自分でも作つたが、盛に作り出したのは、大正五年から六年にかけてであつたやうだ。大正四年十一月十日第一集を發刊した大正詩文と題する和紙刷唐本仕立の雜誌の第三

集五年一月から載り始め、七年の終りに及んでゐる。六年五月末日少年時代の師でわたくしの岳父米原綱善翁に贈つた書簡にも

拜啓梅雨之候益御機嫌好奉賀候其後御書狀被下候ニ御返事モ不申上恐入候墓地之事ハ多年心ニ關居候ニ片付難有奉存候御詞ニ從ヒ一應落着ト仕候詩會ナド御催之趣至極結構之御樂ト奉存候小生モ近日少シヅツ作試居候御近什御示被下度奉願候

丁巳五月末日　　　　　森　林太郎

米原先生

侍史

二白夫人ニ宜御傳被下度乍憚奉願候

とある。

公演

是年公演されたものは　四月小山内氏門下の集りであつた新劇場が「稻妻」を帝國劇場で實演し、七月舞臺協會が「パリアス」を演じ、九月新劇場が「猛者」を丸の内保險協會でやつた他は知らない。

辭令

四月十二日本職を免じ、願に依りて豫備仰付けられ、七月二十二日大正四年十一月七日附を以て、大正三四年

戰役の功に依り旭日大綬章及び金貳千九百圓を授けられ、從軍記章をも併せ賜はつた。

醫務局長在職中の事業としては、(一)腸チブス豫防接種を軍隊に斷行した事、(二)軍醫團の制度を設け、中央に本部、地方師團所在地に分團を置き、毎年中央に開かるる軍醫部長會議には、重要な學術的實際的の問題を提供して對論研鑽の資とし、又有益なる講演會を開いて智見を啓發向上せしめた事、(三)軍隊衞生に關する諸般の教科書を改定した事等が重なもので、その他數數の施設は、「軍醫としての鷗外先生」に記されてゐる。醫務局長は先任者の推薦するのが鐵則になつてゐて、兄の後任は鶴田禎次郎博士、鶴田局長の後任は山田弘倫博士であつた。

陸軍を引退するに當つて、全國軍醫の醵金を以て漢籍類數百部を購入寄贈されたので、左の五絶を美濃紙に印刷して謝狀に代へた。

丙辰乞骸骨同班

諸君醵千金購書爲贈賦謝

解綬非成趣桂冠擬避賢媕婀離朽木老大免左遷褻職無所補友僚幸不捐去時叨嘉貺圖書百千篇世上爭名利群蠅逐腥羶惟吾甘守拙深知鵬鷃懸不歎貧厨素歎無買書錢一朝挿架富宿恨方纔蠲有似古東野喜迎玉川船不羨鄴侯軸五車任獨專對此忘寢食朱丹手磨研閒房有至樂足以送暮年

森　林太郎拜草

そしてその書には一一

解組丙辰初
同僚貽此書

と篆字で刻した朱印を卷頭に捺した。

同六年元旦より七日までの大阪毎日、東京日日兩新聞に「都甲太兵衞」を書いた。太兵衞は細川家の臣で、武道の腹の出來てゐる事を宮本武藏に見出された人物である。二十八日今關天彭氏著支那戲曲集等に序文を草し、五月實業之日本社發行の故文學博士上田敏氏遺稾現代の藝術の序を作つた。

八月一日黑潮第二卷第八號に施無畏庵といふ人が「杏林の人物」の一として森鷗外を論評し、醫學上にも文學上にも寸毫も取る處なき人物だと斷定した。赤木桁平氏は九月、十月の同號第九、十號にその反駁を書いた。八月三十日春陽堂から名家傑作集第十二編として「還魂錄」を刊行した。內容は明治四十三年十月出版の「涓滴」と同一である。

九月一日斯論第一卷第五號に「なかしきり」を寄せた。六日から十八日まで大阪毎日、東京日日兩新聞に「鈴木藤吉郎」を載せた。これは鈴木の族人越川文夫といふ人が、松林伯圓の講談、安政三組盃にいふた事の妄を辯する爲に、資料を蒐集して之を兄に托したから、それを整理して雪冤の筆を執つた。十月十四日には秋莊子が寄せた鈴木傳考異、十五日に逸名氏が寄せた鈴木藤吉郎の墓の事をも載せた。九月十九日より十月十三日までの兩新聞に「細木香以」を載せた。香以は山城河岸の今紀文といはれた津藤の事で、香以の歿後生前恩顧を受けた連

中が集まつて、その追悼會を開いたのが團子坂上觀潮樓の舊宅であつた緣故から書いたのである。

十月十四日から二十八日までの東京日日新聞（十八、二十二兩日休載、大阪每日は十六日より二十八日まで）に考證學者の第三「小嶋寶素」を掲げ、三十日より蘭軒傳中に現はれた「北條霞亭」に就き、新資料によつて書き出し、十二月二十六日に至つた。同月永らく休刊した帝國文學が化粧品商三輪善兵衞氏によりて再興し、後藤末雄氏が編輯主任となり、第二十三卷十月號を復活號として出すにより、鈴木春浦筆記の「觀潮樓閒話」を、翌年一月の第二十四卷第一號とに分載した。

上　演

今年は二月に京橋の鴻の巢で新劇場の連中が「奥底」を演じた他は知らない。

公　職

十二月二十五日帝室博物館總長兼圖書頭に任じ、高等官一等に敍せられた。この日

既脫朝衣賦遂初。何圖枕上落除書。石渠天祿淸閒地。且爲吾皇掃蠧魚

の詩を賦した。かくて宮內省關係の職に就くと共に、新聞とは關係を絕つ事とした。

十六、帝室博物館總長兼圖書頭

大正七年元旦より十日まで東京日日新聞に「禮儀小言」を書き、大阪毎日新聞に五日より十四日までに轉載した。これは宮內省入りの辭令を受けぬ前に送稾したのである。二月一日帝國文學第二十四卷第二號より「北條霞亭」の續稾を出し始め、九年一月第二十六卷第一號に至り、同誌廢刊のため止む。十五日春陽堂より「高瀨舟」を出版す。四六判、洋綴、クロオス裝、箱入、三三七頁、創作小說、「高瀨舟、ぢいさんばあさん、最後の一句、山椒大夫、寒山拾得、魚玄機、二人の友、天寵、餘興」。脚本「曾我兄弟、女がた」を收めてある。同日西尾豐作氏著東條琴臺に題詩を寄せた。

九月淺草公園に立つる暫に扮せし九世團十郎の銅像に刻する「堀越秀銅像銘幷序」を作り、又白木屋吳服店發行白木書帖の題辭を作つた。

十一月六日の夕博物館總長として始めて正倉院曝涼に立會のため奈良に出張した。元來兄は旅行しても宿屋に泊るのが嫌ひで、この奈良行にも主事神谷初之助氏が大變困つたが、幸ひ博物館官舍が空いてゐるので其處に泊ることとし、蒲團類は宅より送らせ、同館美術部に勤めてゐるわたくしの親友吉浦祐全君が隨行する事となつて、左の品書を渡して用意させた。原物は卷紙に一つ書きにしてあるが、此處には上から書き下して寫して置く。

机小、膳一、茶碗一、皿二枚、小丼一、飯鉢一、杓子一、塗箸、火鉢陶、火箸、茶、醬油上、鰹節一本上、炭一俵、米、奈良漬、梅干、角砂糖上、卵二十、土瓶一、湯呑一、小刀鰹節用、市の圖、

七日の夜に入り鹿の鳴音を聞いて、わたくしに寄せた葉書に

奈良ニ宿シテ始テ鹿鳴ヲ聞キ候只今モ盛ニ鳴キ居リ候

戊午十一月七日夜

奈良博物館

森　林　太　郎

森　潤　三　郎　様

とある。鹿の聲は津和野を出てから恐らく始めてであらう。正倉院は雨が降ると開かれず、朝開いても雨が降り出すと直ぐに閉ぢるので、その時を利用して諸所を見物して步いた。同月十八日に來た手紙には

葉書幷書狀皆到着イタシ候兩人共無事之由奉賀候當地眞ノ古蹟ト稱スベキモノハ日歸リノ出來ル限殆ド看盡シ候日歸リト云フ中ニモ朝ヨリ出ヅルコトヲ得シハ只一日ニテ其日ニ舊都南部ヲ見テ大ニ片ガ付候菅原、喜光寺、垂仁陵、唐招提寺、藥師寺、等其日ニ看候其日ニ柳里恭ノ墓ニモユキシニ郡山停留場トハ反對ノ方向ナルユヱ大ニ時間ヲ費シ候吉浦無恙候昨日喜田貞吉京都ヨリ來リ面談イタシ候學者ラシキ人ニテ只今迄ニ正倉院ニ來シハ同人ト近重眞澄トノミニ候昨日ナドハ八十餘名來シニ知名ノ士ハ嶋文次郎ト京都府知事トノミニ候

戊午十一月十八日

森　林　太　郎

森　潤　二　郎　様

喜田氏は當時京都帝國大學教授文學博士、近重氏は同工學博士で、法隆寺壁畫に硬化法を施した學者である。嶋氏も同教授文學博士で、漢詩人故野口寧齋氏の令弟なることは知らぬ人もないであらう。

公　職

九月六日美術審査委員會委員仰付けられ、第三部主任を命ぜられた。

同八年二月上澣絶代至寳帖の序を草し、自筆のままを印刷して載せた。本書は東京帝室博物館で開かれた特別陳列品の寫眞である。同月翻譯集「蛙」のはしがきを作り、本文は五月十三日三田文選の別冊として、玄文社から菊判、洋綴、天金、クロオス裝、箱入、四三一頁、藤嶋武二氏裝幀で刊行された。內容は小說六篇「蛙、舞蹈、鑑定人　父の讎、亮光、女の決鬪」、戯曲四篇「一街の子、白衣の夫人、忘れて來たシルクハット、手袋」、抒情詩六篇で、そのはしがきに

機會はわたくしに此書を公にせしめた。書中に收むる所は皆譯文である。わたくしは老いた、翻譯文藝を提げて人に見ゆるも恐らくは此書を以て終とするであらう。

書は何故に蛙と題するか。プロワンスの詩人ミストラルの作ナルボンヌの蛙が偶然卷頭に蹲つたがためである。

しかし偶然は必ずしも偶然でない。文壇がトロヤの陣なら、わたくしもいつの間にかネストルの位置に押し進められた。其位置は久戀の地ではない。わたくしは蛙の兩棲生活を繼續することが今旣に長きに過ぎた。

歸りなむいざ、歸りなむいざ、氣みじかな靑年の、鐵椎の頭の上にうちおろされぬ間に

己未の二月

とある　翌九年六月改めて單行本背革紙裝として同社から出版された。
三月長男於菟が秋田の醫原平藏氏の長女富貴子と結婚した。
十二月十八日春陽堂から傳記集「山房札記」が刊行された。四六判、洋綴、クロオス裝　箱入、三八六頁、「栗山大膳、椙原品、都甲太兵衛、壽阿彌の手紙、鈴木藤吉郎、細木香以、津下四郎左衛門」を收めた。

公職

九月五日帝國美術院規程が勅令を以て公布され、八日帝國美術院長を仰付けられた。

同九年元旦の白樺第一號に Strindberg の「ペリカン」を譯載した。二月十九日中央美術協會發行紫錦帖に題辭を書いた。三月から翌年八月にかけて培風館から標準日本お伽文庫六冊が、兄と鈴木三重吉、松村武雄、馬淵冷佑と四氏同撰で刊行された。これは現行のお伽噺の體に慊らず、斯の如くならざるべからずとの見解を示したもので、第一編日本童話二冊、第二編日本傳說二冊、第三編日本神話二冊に分たれ、四六判、洋綴、紙裝、久米修二氏裝幀、箱入である。わたくしはその中の神代種亮氏に寄贈された日本傳說だけを見たのであるが、題號からタイトルまで皆兄の筆蹟であつた。
三月二日圖書頭として天皇皇族實錄の編修に就いて訓示する所あり、編修者を五班に別ち、一班を編修官一人補助員二人寫字生二人とし、一日采集する所の資料七葉屬稾二葉を以て率とし、八年にして竣功を期するにあつた。

九月小野善太郎氏著正倉院の栞に序を書いた。

「北條霞亭」を連載した帝國文學は、今年一月號を出しただけで再び廢刊となり、霞亭の歿する一年前で中斷したが、十月一日アララギ第十三卷第十號から題を「霞亭生涯の末一年」として掲載する事となり、翌年十一月の第十四卷第十一號で漸く完結した。兄の健康もその頃から衰弱の度が加はつたので、抽齋、蘭軒の傳の如く充分に補訂を加へることが出來なかつた。

十月十五日銀鈴社から、「天保ものがたり」が刊行された。内容は大正三年五月鳳鳴社版と同一で、四六判、洋綴、布裝、天金、見出し色刷、二二一頁である。

大正十年三月二十六日文藝座が帝國劇場で「靜」を上演し、守田勘彌が安達新三郎に、初瀨浪子が靜に扮した。

同月宮内省圖書寮から「帝謚考」が限定版一百部、毎冊番號入で刊行された。美濃判、和紙和裝二三四頁である。圖書頭に就任した當時、圖書寮では帝謚考を編輯するや否やが問題になつてゐたさうであるが、兄は就任後直ちに編輯することを決定した。これは歷代天皇謚號の出典を考察したもので、僅一年半で完成し、今回印行されるに至つたのである。引續いて大化以來明治に至るまで二百四十有餘の年號の出典を考證した「元號考」の編輯に着手し、薨去の數日前まで筆を執つたが、遂に完成に至らなかつた。

七月五日善文社から脚本名著選集第一編として、Strindberg の「ペリカン」が出版された。三五判、洋綴、表紙は紙、背と裏とはクロオス裝、一二五頁である。

十月十八日春陽堂から森林太郎譯文集卷一として、「獨逸新劇篇」が刊行された。四六判、洋綴、節絹表裝、天

金箔入、九三八頁、「寂しき人人、僭房夢、花束、出發前半時間、ヂオゲネスの誘惑、街の子、我若、負けたる人、夜の二場、飛行機」が收めてある。

十一月一日與謝野寛氏の明星が再興し、その初號から「古い手帳から」を連載し、翌年八月號に至つた。

是歲（月日不明）遠江國濱松が市となつた爲に、市歌及び行進歌を作り、本居長世氏が作曲し、市役所から二枚折小型紙に印刷して配布された。

公　演

自三月二十六日　靜　文　藝　座　帝國劇場

靜　初瀨浪子　安達清恒　守田勘彌

公　職

六月十五日臨時國語調査會長を仰付けられた。

大正十一年は薨去の年である、一月一日明星（後期）第一卷第三號に出た「奈良五十首」は、前年十一月正倉院に出張中の作で、曾て昴に「我百首」等を公にした以來、久し振りに短歌の感興を得て多く作つたのであるが、これが兄の短歌の最後の製作ともなつた。その第二首に

識れりける文屋のあるじ氣狂ひて電車のみ見てあれば甲斐無し

は、京都寺町丸太町通りに漢籍を主とし商ふ彙文堂の主人大嶋友直氏で、初め東京で書物を脊負つて歩いてゐたが京都へ來てから成功し、京都帝國大學の狩野直喜、內藤湖南兩博士等に愛顧されたが、腦を病んでその後一二年

して死んだ。わたくしとは東京に居る頃から心易く、從つて兄からも種種注文があり、京都へ寄る度に店を訪ふた。

二月六日白木屋呉服店圖案課編纂印度更紗模様に序を書いた。更紗の語源に關する考證で、自筆横書きのままを寫眞石版とし、四月二十四日出版された。これが兄の公表された最後のものとなつた。

於莵は解剖學研究の爲獨逸國留學を命ぜられ、三月四日出發し、十三年九月二十九日歸朝した。

前年秋頃から時時下肢に浮腫があり、家族は腎臓病ではないかとの疑を抱いて尿の檢査を薦めたが、醫者の診療は絶對に受けぬ主義を固執して、相變らず博物館と圖書寮に出勤してゐたが、今年春流行性感冒に罹り、それがこぢれて癒えず、六月十五日から引籠り、賀古氏の切なる勸告で漸く檢尿を行ひ、その結果は蛋白中等度にして多少の圓柱を認められた。二十九日漸く醫學博士額田晉氏の診察を受け、且今後の處置を一切同氏に任せた。診察の結果萎縮腎にして證狀顯著、稍重症、身體の衰弱著しく、顏面及び四肢に輕度の浮腫あり、心臟衰弱の徴ありといふ事であつた。七月六日症狀增惡し、衰弱益加はり、脈搏頻數時時結滯するも意識は尙明瞭で、遺言を口授して賀古氏が筆記した。

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切祕密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ、ココニ死ニ臨ンデ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス、死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ、奈何ナル官憲威力ト雖モ此ニ反抗スル事ヲ得ズト信ズ、余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス、宮內省陸軍省皆緣故アレドモ、生死別ルル瞬間アラユル外形的取扱ヲ辭ス、森林太郎トシテ死セントス、墓ハ森林太郎墓ノ外一字ホル（假名デ好イヨ）可カラズ、書ハ中村

不折ニ依托シ、宮内省陸軍ノ榮典ハ絶對ニ取リヤメヲ請フ、手續ハソレゾレアルベシ、コレ唯一ノ友人ニ云ヒ殘スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サズ

大正十一年七月六日

森林太郎言(拇印)

賀古鶴所書

七日諸症頓に增惡し、九日午前七時遂に薨去した。時に年六十一。病革るに先立ち特旨を以て位一級を進められ、從二位に敍せられ、十二日谷中齋場に於て佛式によりて葬儀を行ひ、荼毘した遺骨は向嶋弘福寺に埋葬した。法號は弘福寺住職日向義角師が文林院殿鷗外仁賢大居士としたが、桂湖村氏等が仁賢は帝諡にあるから避くべしとの意見に從ひ貞獻院殿文穆思齊大居士と改めた。墓表



は遺言の如く中村不折翁の筆を以て「森林太郎墓」の五文字を書し、墓形は賀古氏の意見で小石川大塚先儒墓地に在る寛政三博士の一人古賀精里の墓に則り、駒込の石匠酒井氏が彫刻した。十二年癸亥九月の震災で弘福寺全燒し、復興後墓地整理の爲に、墓域を府下三鷹村禪林寺に移轉した。

博物館總長として殘した功績は、今まで博物館の役人は古物倉庫の番人に過ぎないといはれたのを打破つて、年報や講演集を刊行しその事業を世間に知らせ、又正倉院拜觀者の資格制限を擴張し、或は學者を保護して各自專門の研究に沒頭する事の出來るやうにした點などが擧げ得るであらう。今東北帝國大學教授の山田孝雄博士、奈良で假名の研究に沒頭してゐる大矢透氏、說文家としての岡井愼吾氏などは、兄が最もその篤學に信頼した人人である。自分では博物館萬卷の藏書解題を作ることに力めたが、衰弱の爲に半途にして罷んだ。

薨去當日から葬送の前夜まで通夜に集まりし人人の追想談は、鈴木春浦君が筆記して明星記念號に載せた。十一日の夜わたくしが次の間に唐紙を延べて自署を乞ふたのが、於菟の許に保存されてゐる。先づ最上部右方に日清戰役の際兄より市村氏に贈つた七律を市村氏他一人が分書し、黑木安雄氏がその所由を書した。

朝拋鴨綠失邊疆　暮棄遼東作戰場
燐火照林光慘憺　伏屍掩野血玄黃
雄軍破敵如摧朽　新政施恩以送涼
天子當陽感德徧　何須徒頌古成湯
右七律一章係鷗外先生旅順戰後舊作

和弁器堂分錄半章奉奠先生靈前以代
蘋蘩予乃記其所由云時大正十一年七
月十一日夜也　　黒木安雄

同じく左方に男爵山根武亮中將が「哀悼」の二字を大書せられ、その下に平野萬里氏が

先生を少年にして知りし家その家に夜のしらみゆくとき

前記七律の下には北原白秋氏が

おのつからうらさひしくぞなりにける御庭のくさのそよぐをみれば

その下方に濱野知三郎氏が「斷腸」の二字を書し、次で與謝野寛氏が

寛われ啞ならねどもこの大人のみまへにあれば言葉なかりし

萬里氏の下方に佐佐木信綱氏は

夏の花のさきみだれたるうへにしるく君かすかたのたちまさりける

その右に久保田米齋氏が畫を、内田魯庵（内田貢）、吉井（勇）、小山内（薫）、永井（荷風）、□□（吟平）、石井（柏亭）、山本（鼎）、鈴木（春浦）、姉崎（正治）、鈴木（三重吉）、芥川（龍之介）の諸氏が署名された。

十七、餘錄

以上兄が生前の著作、講演、演劇、官歴を列擧し、又兄に對して成された重な評論をも記して置いた。次に薨去後刊行された雜誌の記念號、著作集、評論類の表と、關係の催し物に就いて記す事とする。但即興詩人とか幽靈とか生前單行本となつたもので、薨去後春陽堂文庫岩波文庫に收めて出版されたものは、生前出版の條に併記したから省いて、此處には二種以上を合した分だけを掲げることにした。

森林太郎譯文集卷二　埃太利劇篇

四六判、洋綴、節絹表裝、天金、箱入、紙數八〇四頁、「猛者、短劍を持ちたる女、耶蘇降誕祭の買入、戀愛三昧、奥底、白衣の夫人、家常茶飯、痴人と死と、謎」。大正十一年八月十三日刊行、春陽堂。

文豪鷗外森林太郎

新小說臨時增刊。菊判、假綴、紙裝、一七八頁、口繪三枚。

鷗外森林太郎小傳　新小說編輯部

森林太郎氏略年譜　同

森林太郎氏著作年表　同

森先生の輪郭	平野萬里
鷗外先生	鈴木春浦
森鷗外君を憶ふ	坪内逍遙
森林太郎氏と明治文學	野上豐一郎
鷗外博士の翻譯と獨逸文學	茅野蕭蕭
鷗外と佛蘭西文學	廣瀨哲士
鷗外先生とその戲曲と	小山內薰
文藝批評家としての森博士	竹友藻風
森鷗外博士の哲學思想	桑木嚴翼
新詩史上森博士の立場	日夏耿之介
森さんと傳記考證	三村清三郎
考證物と歷史小說	濱野知三郎
鷗外氏晩年の功業	赤木桁平
鷗外氏の歷史小說	菊池寛
美術批評家としての森さん	新海竹太郎
スバル、三田文學時代	小嶋政二郎

「人」及び「藝術家」としての鷗外博士

泉鏡花、德田秋聲、鈴木三重吉、佐佐木信綱、岡田八千代、濱野知三郎、芥川龍之介、團伊能、上司小劍、嶋崎藤村、伊原青青園、吉井勇、長田幹彥、長谷川如是閑、野口米次郎、山岸光宣、長田秀雄、畔柳都太郎、戸川秋骨

軍醫總監時代の森博士　山田弘倫

帝國美術院長としての森君　正木直彦

宮內省圖書頭としての森博士　五味均平

帝室博物館長としての森先生　神谷初之助

森博士の片影

齋藤勝壽、井上通泰、市村讚次郎、與謝野寬

森鷗外氏逸話選

鷗外博士の臨終　額田晉

悼森先生　齋藤勝壽

大正十一年八月一日刊行、春陽堂。

鷗外先生追悼號

三田文學第十三卷第八號、菊判、假綴、紙裝、一五九頁、口繪二枚。

森林太郎先生略傳　小嶋政二郎
先驅者　水上瀧太郎
鷗外先生と觀潮樓　永井荷風
鷗外先生の追憶　戸川秋骨
故森林太郎先生追悼の記　千葉鑛藏
森鷗外先生　小泉信三
森先生と支那文學　奥野信太郎
「萬年艸」時代以後　鈴木春浦
涓滴餘事　佐佐木茂索
鷗外先生と「とりで」　宇野四郎
森林太郎論　井汲清治
「雁」一篇　三宅周太郎
鷗外先生　茅野蕭蕭
「玉匣兩浦嶋」のこと　久保田萬太郎
更に衰へさりし鷗外大人　馬場孤蝶
千駄木の先生　小山内薫

文壇のネストル　　澤木四方吉

森鷗外先生追悼號

明星第二卷第三號至第六號、大正十一年八月一日至十一月一日刊行、明星發行所。

第三號（卷頭「古き手帳から」原稿）

森林太郎先生書牘（其一）

うたかた　　與謝野晶子

森博士の生涯　　德富蘇峰

森先生の思想　　桑木嚴翼

森先生の事　　永井荷風

森鷗外君の追憶　　魯庵生

鷗外先生の詞　　小山内薰

森さんに就て　　石井柏亭

通夜筆記

賀古鶴所、市村讚次郎、齋藤勝壽、小金井良精四氏の談話を鈴木春浦君が筆記した。

涕涙行　　與謝野寬

第四號（卷頭正宗敦夫氏所藏色紙）

森林太郎先生遺文（其一）小説論（卷頭）

森林太郎先生書牘（其二）

森林太郎先生哀慕篇

一、亡き兄の思出　（上）　森潤三郎

二、森先生に就て　吉田增藏

三、鷗外大人の思出　馬場孤蝶

四、森先生の追憶　鈴木春浦

五、高湛先生と私　正宗敦夫

第五號

遺文（其二）假名遣に關する意見

書牘（其三）

哀慕篇

七、亡き兄の思出　（中）　森潤三郎

八、鷗外先生の詩　入澤達吉

第六號

哀慕篇

九、追録二三　森潤三郎

第七號

遺文（其三）北淸事變一面の觀察

哀慕篇

十、亡き兄の思出（下）　森潤三郎

十一、鷗外博士と私　池田文痴庵

序に翌十二年八月一日第四卷第二號に掲載の分を附記して置く。

鷗外先生の追憶　萬年老生

（陸軍省に於ける事ども）

兄の一週忌を迎へて　森潤三郎

森博士追悼號

心の花第二十六卷第八號、大正十一年八月一日刊行。

森林太郎博士　桑木嚴翼

森博士の追懷　新村出

學者としての森博士　山田孝雄

森先生を憶ふ　濱野知三郎

森先生と亡き父　上田璢子
森博士　佐佐木信綱
巴里なる茉莉子樣に　佐佐木雪子
森博士と心の花　佐佐木信綱

森鷗外氏の追憶

演藝畫報第九年第八號（大正十一年八月一日發行）に收めらる。

鷗外博士のこと　永井荷風
森先生と私　與謝野晶子
森博士と劇界　鈴木春浦

この他新聞雜誌の追悼談は省略に從ふ。

鷗外全集

菊判、洋綴、クロオス裝、長原止水氏裝幀、中村不折氏題字、天金、箱入。第一卷至第三卷藝術論篇、第四卷創作戲曲篇、創作小說篇、第五卷創作小說篇、第六卷韻文篇、帝謚考、元號考、第七卷至第九卷史傳篇、第十卷至第十四卷翻譯戲曲篇、第十五卷第十六卷翻譯小說篇、第十七卷第十八卷軍陣衞生醫學篇。大正十二年一月至昭和二年十月刊行　鷗外全集刊行會。

涓滴

菊半截判・洋綴、羽二重表裝・在田稠氏裝幀、代表的名作選集第三十八篇。內容明治四十四年十月刊行單行本と同じ。大正十二年四月六日發行　新潮社。

うたかたの記 他三篇

岩波文庫第一〇一、菊半截判、假綴、紙裝、平福百穂氏意匠。內容うたかたの記、ふた夜、舞姬、文つかひ。卷末小嶋政二郎氏の鷗外略傳を添ふ。昭和二年十月一日發行・岩波書店。

森鷗外集

現代日本文學全集第三編、菊判、上製洋綴、クロオス裝、杉浦非水氏裝、天金、箱入。並製洋綴、布裝、本文五百二十頁、卷頭小傳一頁、卷末森潤三郎編年譜六頁。卽興詩人・うたかたの記、舞姬、文づかひ、埋木、玉篋兩浦嶼、日蓮上人辻說法、キタ・セクスアリス、金毘羅、生田川、あそび、蛇、心中、妄想、百物語、雁、高瀨舟、阿部一族、山椒太夫・細木香以、古い手帳から、長宗我部信親、沙羅の木、我百首(附)詩歌抄。昭和三年一月一日刊行　改造社。

森鷗外研究

小嶋政二郎氏、新潮社版日本文學講座第十六卷、第十七卷の中・昭和三年四月五月刊行、新潮社。

新選 森鷗外集

新選名作集の內、四六判、假綴、紙裝、七四五頁。短篇小說そめちがへ、魔睡、獨身、青年、藤鞆繪、興津彌五右衛門の遺書、佐橋甚五郎、護持院ヶ原の敵討、大鹽平八郎、安井夫人、津下四郎左衛門、栗山大

森先生と亡き父　上田瑠璃子
森博士　佐佐木信綱
巴里なる茉莉子様に　佐佐木雪子
森博士と心の花　佐佐木信綱

森鷗外氏の追憶

演藝畫報第九年第八號（大正十一年八月一日發行）に收めらる。

鷗外博士のこと　永井荷風
森先生と私　與謝野晶子
森博士と劇界　鈴木春浦

この他新聞雜誌の追悼談は省略に從ふ。

鷗外全集

菊判、洋綴、クロオス裝、長原止水氏裝幀、中村不折氏題字、天金、箱入。第一卷至第三卷藝術論篇、第四卷創作戲曲篇、創作小說篇、第五卷創作小說篇、第六卷韻文篇、帝諡考、元號考、第七卷至第九卷史傳篇、第十卷至第十四卷翻譯戲曲篇、第十五卷第十六卷翻譯小說篇、第十七卷第十八卷軍陣衞生醫學篇。大正十二年一月至昭和二年十月刊行　鷗外全集刊行會。

涓滴

菊半裁判・洋綴、羽二重表裝・在田稠氏裝幀、代表的名作選集第三十八篇。內容明治四十四年十月刊行單行本と同じ。大正十二年四月六日發行　新潮社。

うたかたの記 他三篇

岩波文庫第一〇一、菊半裁判、假綴、紙裝、平福百穗氏意匠。內容うたかたの記、ふた夜、舞姬、文つかひ。卷末小嶋政二郎氏の鷗外略傳を添ふ。昭和二年十月一日發行、岩波書店。

森鷗外集

現代日本文學全集第三編、菊判、上製洋綴、クロオス裝、杉浦非水氏裝、天金、箱入。並製洋綴、布裝、本文五百二十頁、卷頭小傳一頁、卷末森潤三郎編年譜六頁。卽興詩人、うたかたの記、舞姬、文づかひ、埋木、玉篋兩浦嶼、日蓮上人辻說法、ヰタ・セクスアリス、金毘羅、生田川、あそび、蛇、心中、妄想、百物語、雁、高瀨舟、阿部一族、山椒太夫、細木香以、古い手帳から、長宗我部信親、沙羅の木、我百首(附)詩歌抄。昭和三年一月一日刊行　改造社。

森鷗外研究

小嶋政二郎氏、新潮社版日本文學講座第十六卷、第十七卷の中、昭和三年四月五月刊行、新潮社。

新選 森鷗外集

新選名作集の內、四六判、假綴、紙裝、七四五頁。短篇小說そめちがへ、魔睡、獨身、青年、藤鞆繪、與津彌五右衞門の遺書、佐橋甚五郎、護持院ヶ原の敵討、大鹽平八郎、安井夫人、津下四郎左衞門、栗山大

膳、魚玄機、最後の一句、寒山拾得・澀江抽齋、戲曲靜。翻譯小說病院橫町の殺人犯、冬の王、父の讎・鑑定人、復讎、アンドレアス・タアマイエルが遺書、翻譯戲曲辻馬車、秋夕夢、戀愛三昧、耶蘇降誕祭の買入、僧房夢、債鬼。昭和三年十月二十八日刊行、改造社。

森　鷗　外

明治大正文學大全集第七卷・四六判、洋綴、布裝、箱入。恩地孝四郎氏裝幀、本文七二一頁。即興詩人、うたかたの記、舞姬、文づかひ、キタ・セクスアリス、青年、あそび、玉篋兩浦嶼、日蓮上人辻說法、生田川・靜・雁・蛙、橋の下・刺絡・辻馬車、高瀨舟、阿部一族、ぢいさんばあさん、最後の一句、山椒大夫・寒山拾得、魚玄機、大鹽平八郎、高橋邦太郎氏鷗外篇小解。昭和四年一月一日刊行、春陽堂。

鷗外全集普及版

四六判、洋綴、クロオス裝、天染、箱入、津田靑楓氏裝幀、特製は長原止水氏裝幀。第一卷至第三卷藝術論篇・第四卷創作戲曲篇・創作小說篇上、第五卷創作小說篇中、第六卷創作小說篇下、翻譯戲曲篇第一、第七卷至第十卷翻譯戲曲篇二至五、第十一卷、第十二卷翻譯小說篇上、中、第十三卷翻譯小說篇下、抒情詩篇・第十四卷至第十六卷史傳篇一至三、第十七卷史傳篇四、人文篇、漢詩漢文篇。昭和四年六月至六年十一月刊行、鷗外全集刊行會。

不　忘　記

小金井喜美子、祖父白仙の事を記す、冬柏第二號、昭和五年四月二十三日發行、冬柏發行所。

或日の森鷗外先生

木下杢太郎氏、冬柏第二號、昭和五年四月二十三日發行、冬柏發行所。

債　　鬼　他四篇

世界名作文庫四〇五。縱五寸四分、横三寸六分、假綴、紙裝二六七頁。木村荘八氏裝幀。債鬼、パリアス、一人舞臺、稻妻、ペリカン。昭和七年八月十五日刊行、春陽堂。

獨　墺　短　篇　集

世界名作文庫二一二。二二〇頁。はげあたま、ソクラテエスの死、老曹長、わかれ、顔、黄金杯、塔の上の鷄、鴉、アンドレアス・タアマイエルが遺書、一人者の死、白、驅落、祭日、老人、薔薇、午後十一時。刊行年月日前同斷。

街　の　子　他一篇

世界名作文庫二一三。一二六頁。ヂオゲネスの誘惑、街の子。刊行年月日前同斷。

戀　愛　三　昧　外三篇

世界名作文庫二〇七。一八六頁。猛者、短劍を持ちたる女、耶蘇降誕祭の買入、戀愛三昧。刊行年月日前同斷。

病院横町の殺人犯　外二篇

世界名作文庫四〇一。八九頁。うづしほ、病院横町の殺人犯、十三時。刊行年月日前同斷。

佛蘭西短篇集

世界名作文庫一二一。二三五頁。聖ジュリアン、蛙、舞踏、鑑定人、クサンチス、田舍、復讐、不可説、猿、一匹の犬が二匹になつた話、橋の下、聖ニコラウスの夜、懺悔記。昭和七年九月十五日刊行。

露西亞短篇集　第二輯

世界名作文庫三一八。二一六頁。樺太脫獄記、板ばさみ、センツアマニ、齒痛、犬、フロルスと賊と、襟、笑、死、罪人。昭和七年九月十六日刊行。

露西亞短篇集　第一輯

世界名作文庫三一七。二一七頁。ぬけうり、馬鹿な男、馬丁、鱷、パアテル・セルギウス。昭和七年十月十五日刊行。

森鷗外論

唐木順三氏、思想第一二八號。昭和八年一月一日發行。岩波書店。

時時の父鷗外

森於菟、中央公論第四十八年第一號及び第二號。昭和八年一月及び二月一日發行、中央公論社。

森於菟に

小金井喜美子、冬柏第四卷第四號以下七回、昭和八年三月二十五日以下七回發行、冬柏發行所。

護持院ヶ原の敵討　他二篇

岩波文庫九一六。二一六頁。護持院ヶ原の敵討、安井夫人、生田川。昭和八年七月十日刊行。岩波書店。

鷗外の未發表草稿（豐前小倉時代前後の森鷗外）

一戸務氏、書物展望社第三卷第九號、昭和八年九月一日發行、書物展望社

鷗　外　拾　遺

菊判、洋綴、クロオス裝。體裁大正十二年版鷗外全集と同一。醫史料十五篇、雜說二十六篇、會心錄三十七篇、顯微齋漫錄四十六篇　傍觀機關二十七篇、批評九篇、斥非四篇、時事二十二篇、醫界近事九篇、獨文論說十四篇。莊司秋次郎、入澤達吉兩氏編、卷頭に木下杢太郎氏の森鷗外四十一頁を添ふ。昭和八年十一月十日刊行、克誠堂書店。

鷗外遺珠と思ひ出

四六判、洋綴、白繻子裝、四四一頁、箱入。佐藤紫煙氏裝幀、題簽入澤達吉氏、遺珠三十篇、序跋題辭四十一、廣告文三十九、引札二、漢詩補遺二、歐文二篇、森潤三郎編年譜及著作目錄、思ひ出四篇（時時の父鷗外――森於菟、兄の日常生活――森潤三郎、森於菟に――小金井喜美子、森先生と私――與謝野寬氏。昭和八年十二月十五日刊行、昭和書房。

解　剖　臺　に　凭　り　て

四六判、洋綴、紙裝、二八四頁。森於菟の隨筆集。この中に「父鷗外と私」の一章があつて、中央公論のを改訂した「時時の父鷗外」と「子規綠雨鷗外の垢」の二篇を收め、「筆の雫」の一章には「我家の診療史」

と、他に「私の影」「息游軒」の中にも父との關係を記してゐる。昭和九年一月二十日刊行、昭和書房。

晩年の父と私

森杏奴、冬柏第五卷第二號至第六號、昭和九年二月至五月冬柏發行所。

陣中の竪琴

表題の傍に――森林太郎の「歌日記」に現れたる日露戰爭と――註してある。佐藤春夫氏著、文藝第二卷第三號所載、二四頁、原本の挿畫十一個複製。昭和九年三月一日發行、改造社。伏字を補ひ寫眞を加へ、森於菟の「父鷗外の陣中消息と凱旋」の一文を併錄し、單行本として昭和九年六月五日刊行、昭和書房。

鷗外の傳統

成瀨正勝氏、文學第二卷第三號、昭和九年三月一日發行、岩波書店。

軍醫としての鷗外先生

軍醫總監醫學博士山田弘倫氏著。菊判、洋綴、洋裝、四百七頁。昭和九年三月十五日刊行、醫海時報社。

森鷗外

森潤三郎、日本文學講座第十二卷明治大正篇の中。昭和九年四月八日發行、改造社。

鷗外文獻

木下杢太郎氏、東京朝日新聞昭和九年五月二十二日至二十四日。「鷗外拾遺」「鷗外遺珠と思ひ出」「軍醫としての鷗外先生」三書の紹介。

浪漫古典昭和九年七月特輯號として十數氏の研究論文が掲載された。於菟は「鷗外と醫文」小金井喜美子は「兄君の最期」、わたくしは「兄鷗外の歴史小説及び考證的著作」を書いた。

雜誌掲載の評論はまだ數篇あるが、卷號數又は發行年月日が不明であるから略した。

劇に關係したものでは、大正十五年八月六日から十八日まで、大阪松竹座にて「玉匣兩浦嶼」を興行、上の卷は林長三郎の浦嶋太郎、香椎園子の乙姫、魚群の踊は松竹樂劇部の女生徒が洋樂でダンス風にやり、現今のレビユウ式で、下の卷後の浦嶋太郎は中村扇雀が勤めた。

昭和四年七月十五日夜ＪＯＡＫのラヂオドラマで「日蓮上人辻説法」が、伊井蓉峰の日蓮上人、喜多村緑郎の進士善春、小堀誠の比企能本、花柳章太郎の娘妙で、この時は放下を出さず、第一の童部の詞から始めた。

同八年三月四日夜ＪＯＡＫの名作物語に、徳川夢聲の解說、福田宗吾の伴奏で「雁」が出された。

同九年五月にも名作物語に何か出たやうに思ふ。まだこの他にもあつたらうが、調査が屆かぬからこれで止めて置く。

記念の意味での催し物として、わたくしの知る處は左の如くである。

九　日　會

柳村上田敏博士と兄とは生前頗る親交の間柄であつたが、二人の命日が何れも七月九日であるのは、實に不思議な因緣である。それで二人の知友門下生の諸氏が相圖つて、大正十二年から九日會と名づけ、毎年七月

九日の一夕を追懷談に過す事とし、翌十三年は震災後の復興が出來ぬ爲に休んだが、十四年から缺かさず開かれてゐる。

明治大正文豪遺墨遺品展覽會

讀賣新聞社主催で昭和五年十月二十二日から三十一日まで、銀座松屋吳服店七階で開かれ、兄の遺品として机、紙入、懷中時計、遺墨は

扇面（天門中斷楚江開云云の詩）　森　　家
幅（韋蘇州五古）　同
歌（心阿留人能都止可母云云）　同
文つかひ原稾　白石實三氏
營口で獲た二書の解題原稾　佐佐木信綱氏
高瀨舟原稾　同

等が陳列され、吉井勇氏は次の如き歌を書して壁間に掲げられた。

森鷗外先生を憶ふ

先生のことをおもへば在りし日のおん横顏のなつかしきかな
千駄木の先生を訪ひしかへりみち啄木は云ふ寂しきことを

鷗外先生十週年記念展覽會

東京堂主催で昭和六年五月二十日至二十七日の一週間、神田區神保町一丁目東京堂小賣部階上で開催され、諸家の出品で三室を埋めた。左に東京堂月報第十八卷第七號に揭げられた目錄を轉載しよう。

記念展覽會目錄

第一室

森林太郎先生略年譜　森家略系

文久二年誕生より大正十一年薨去まで、主要な官歷、事蹟、著作を記して壁上に揭げた。

著作

明治十九年獨逸留學中の業績より薨去前迄の單行本、及び新聞雜誌に出たのみで全集に入らないものを年代順に陳列した。是には得難いものはないから書名は省き、出品者の芳名だけを左に載せて置く。

入澤達吉博士、神代種亮氏、齋藤昌三氏、森潤三郎氏

鷗外森林太郎先生著書廣告集　二卷一帖

大阪市船越政一郎氏の出品で、先生著書の廣告を洩れなく網羅してある。

第二室

正面中央に先生晩年の肖像を揭げ、前に愛用の小机を据ゑ、祖母、兩親の寫眞と、先生の大學時代、同卒業時代、陸軍出仕後、留學時代、醫務局長時代、陸軍退隱直前等の寫眞、官歷書、額田博士の病歷書、薨去の際新聞記者に示せし略歷等を配し、左右に先生平生著用の背廣服及び宮內省高等官一等の大禮服、禮

帽帶劍を置き、その背面右方の壁に令嗣於菟博士所藏先生自筆の幅

昔有道士求神仙靈眞下試心確然千鈞巨石一髪懸
臥之石下十三年存道忘身一試過名奏玉皇乃升天
雲氣冉冉漸不見留語弟子但精堅　韋蘇州五古源高湛

扇面に李白の詩

天門中斷楚江開碧水東流直北迴兩岸青山相對出孤帆一片日邊來　鷗莊主人書

を寫されたもの、令妹小金井喜美子夫人所藏の短冊

庭　上　鶴　馴

ゆたけさをよすて人にもことつてよ
くも井のにはになるるあし田鶴　林太郎

與謝野寛氏所藏色紙にペンで認めた

七瀬（ナナセ）
八峰（ヤツヲ）

むこ來ませ一人は山のやつをこえ
ひとりは川の七瀬わたりて　源高湛

森潤三郎氏所藏の額面

字挾風霜聲成金石

鷗外湛題

を、同じく左方には大正十一年七月十一日通夜の人人の寄合書の大幅（森家藏）を掲げ、右の壁際のケエスには舊藩校時代の教科書

白鹿洞書院揭示（藩校養老館藏版）　一冊　森潤三郎氏藏

幼時參考にせられた

童子通　一冊　同

蘭學學習時代筆寫本　一冊　同

獨逸留學時代のノオト　二冊　森於菟氏藏

先生が筆寫された

哲學字彙　一冊　山田珠樹氏藏

鑛物字彙　一冊　同

Zoologisch Vocabler　一冊　同

正倉院で筆寫された

御物布帛識語　一冊　山田孝雄氏藏

等も陳列したが、最も珍らしいのは、先生が明治二年八歳の時寫された

童蒙入學門　一冊　　山田珠樹氏藏

で、卷尾に藩校漢學の師今井正臣翁が「八歳　森五木童記」と記し、次に十年先生十三歳の識語がある、

二千五百二十九年即明治二己巳年所寫也我師今井正臣君題八歳森五木童記之七字於卷尾矣余藏筐裏而不顧數年今偶讀之則有不可棄之意因附記焉二千五百三十七年十年丁丑

原稾類は何れも諸家祕藏の珍品揃ひで、當展覽會の誇りである。

舞姫	一冊	吉田糸二氏藏
性欲雜說	二冊	同
拙者は大石內藏助ぢや序（ハガキ二枚附）	一冊	同
古い手帳から	一帖	與謝野寛氏藏
平出修遺稾序	二枚	同
椋鳥通信	九枚	日高不二男氏藏
椋鳥通信	廿三枚	齋藤誠一氏藏
譯詩（グスタアフ・フアルケ）	一卷	池田金太郎氏藏
智恵袋	十一枚	濱野知三郎氏藏

マクベス（坪内逍遥氏書入）　一冊　上山草人氏藏

帝謚考　一冊　森潤三郎氏藏

能久親王事蹟　一冊　同

盛儀私記　一冊　同

假面　一冊　同

魔睡　一冊　同

安井夫人　一冊　同

心中萬年草評　一冊　同

藝文諸家評語集　一冊　同

中央のケースには、遺品として

硯箱（硯、朱硯、筆共）　一個　森於菟氏藏

水滴（瓶形、獅子形）　二個　同

紙切ナイフ（鼈甲製）　一挺　同

パイプ　一個　同

遺印（石材、竹材）　十二顆　同

ピストル（日清役携行）　一挺　森潤三郎氏藏

卷煙草入（銀製）　一個　同
梨本宮守正王殿下が日露戰役第二軍幕僚として御出征御凱旋の後、同軍各部長に記念品として下賜せられたるもので、中央に宮家の御紋章が金で出してある。

猿面硯　一個　齋藤勝壽氏藏
熊野神寶を模したるもの。

肉池（堆朱製）　一個　與謝野寛氏藏
右何れも先生薨後遺物として送られたものである。

自筆雜集には

一話一言抄（四天王寺藏聖徳太子太刀の事）　一葉　齋藤勝壽氏藏

奈良出張用品書付　一通　吉浦祐全氏藏
大正七年十一月博物館總長として初めて正倉院曝涼に出張の際用意を隨行者に命ぜられた品名書。

書畫帖　一册　・入澤達吉氏藏
月に來て又この塔にのぼらばや　鷗外

書畫帖　一册　森潤三郎氏藏
行春を只へたへたと印を押す　鷗外

水滸後傳序　四枚　同

宋本宣和遺事跋　一枚　同
箱包祕匱抄　一枚　同
日記覺書（神宮略本暦記入）　一冊　同
叢書細目覺書　一冊　同
長男命名書　一通　同
反古帳（序跋草稾、書拔等を蒐む）　一冊　同

書簡は

內田魯庵氏宛　一通　齋藤昌三氏藏
齋藤勝壽氏宛　一通　齋藤勝壽氏藏
金子薫園氏宛　一通　金子薫園氏藏
澀江保氏宛　二通　同
山田孝雄氏宛　十通葉書三枚　山田孝雄氏藏
濱野知三郎氏宛　十一通　濱野知三郎氏藏
池田文痴庵氏宛　四通　池田文痴庵氏藏
澀江保氏宛　一卷　藤浪剛一氏藏
山田珠樹氏宛　一通　山田珠樹氏藏

森　潤三郎氏宛　十通　森　潤　三　郎　氏藏

同　　葉書　十枚　同

左方壁沿ひのケースには、手校本として

ファウスト原本　一冊　森　於　莵　氏藏

文藝委員會委員として翻譯されたものの原本で、書入れがある。

伊澤蘭軒傳　三冊　森　潤　三　郎　氏藏

澀江抽齋傳　一冊　同

小嶋寶素傳　一冊　同

北條霞亭傳　一冊　同

何れも新聞を切抜き貼付し、自筆を以て無數の書入れがしてある。

帝謚考校正刷　一冊　同

西周傳校正刷　一冊　同

大鹽平八郎　一冊　同

中央公論所載を赤インクを以て誤植を正して贈られたもの。

廉塾雜記　一冊　同

菅茶山の塾に學びたる盧舟といふ僧の筆記、題簽を先生自書せり。

鈕雨亭隨筆　一冊　同

東夢亭の著、前書と共に先生の北條霞亭傳著述の參考に提供した時に、書入れをされ、表裝を改めて返却された。

先輩知友の筆蹟には、森潤三郎氏藏の

山縣有朋公書簡（封筒附）　一軸
西　周氏書簡（明治二年）　一通
福羽美靜子短冊（四　季）　四枚
佐藤元萇翁短冊　二枚
井上　光男（陸軍中將）書簡　一通
大迫　尚敏男（陸軍大將）書簡　一通
中村　覺男（陸軍大將）書簡　一通
石黑忠悳男書簡　一通
品川彌次郎子書簡　一通
杉孫七郎子書簡　一通
第三軍司令部寄合書（葉書）　一枚
幸田露伴氏書簡　一通

森田思軒氏書簡	一通
宮崎三昧氏書簡	一通
齋藤綠雨氏書簡	一通
落合直文氏書簡	一通
尾崎紅葉氏葉書	二枚
正岡子規氏葉書	二枚
長谷川四迷氏葉書	一枚
山田美妙齋氏葉書	一枚
饗庭篁村氏葉書	一枚
依田學海氏葉書	一枚
井上通泰氏葉書	一枚
寺崎廣業氏葉書	一枚
伊藤左千夫氏葉書	一枚
岡野知十氏葉書	一枚

が列べられた。

第三室

此處には先生の序跋を書かれた書の一部を陳列したが、その中東京帝國博物館から特に貸下げの榮を得たのは

印度更紗模樣集

で、その序は大正十一年二月即ち先生薨去の五ケ月前に認められた自筆其儘を金屬版に撮影したもので、公表された先生最後の筆蹟であるし、同館溝口禎次郎氏出品の

絕代至寶帖　一册

の序は大正八年のもので、やはり先生筆蹟の儘を製版してある。

異版の部には先生最初の製作集「水沫集」に就いて

明治二十五年七月初版（緣を斷たぬもの）、同（緣を斷ちしもの）、同二十七年一月再版、同三十九年五月訂正再版、

大正五年八月縮刷版、同十五年改版

の六種を、「舞姬」に就いては、

第二國民小說、イーストレイキ博士英譯、小池堅治氏獨譯、岩波文庫所收本

等を出だした。全集、選集には、

鷗外全集	十八册	新潮社出品
同普及版（發行濟の分）	十三册	春陽堂出品
森鷗外集（現代日本文學全集）	一册	森潤三郎氏出品
新選森鷗外集（改造社版）	一册	東京堂出品

「埋木」「卽興詩人」「ファウスト」（岩波文庫）

等がある。先生の自署贈呈本には、

つ ゆ 小 袖（野口寧齋氏宛自筆書入あり）　神代種亮氏藏

標準日本御伽文庫日本傳說　上卷　同

本書はタイトルも先生の筆に成つたものである。

あり。その續きには母堂硯山院の盡七日に親戚知人に配布された

阿蜜哩多軍荼利法　一冊　森潤三郎氏藏

日淸役に獲て贈られた

日 本 師 船 考　一冊　同

小倉時代東京から送られた新聞を切拔いて貼付した

スクラプブツクの中　一冊　同

先生の薨去後藏書は悉く東京帝國大學附屬圖書館に寄贈されたので、その際圖書館で作製せられた

鷗外文庫和漢書目錄副本　一冊　同

を列べた。先生作で上演された番附は、ほんの一部分を出してあつたが、その中大阪北濱帝國座の「ファウスト」

の寫眞に各俳優が自署して、森潤三郎氏に贈られたのは好記念物である。

評論集には

新聞雜誌評論集	一冊	森潤三郎氏藏
蕓去當時記事集	一冊	同
新小說臨時增刊文豪鷗外森林太郎	一冊	同
三田文學鷗外先生追悼號	一冊	同
心の花追悼號	一冊	同
蕓去當時記事集	一冊	池田文痴菴氏藏
文豪鷗外森林太郎（初版）	一冊	同
鷗外先生肖像	二面	同
明治裏面史（無名通信增刊）	一冊	同
フース・フー・イン・ゼ・オリエント	一冊	同
思ひ出す人人（內田魯庵氏著）	一冊	酒井宇吉氏藏
新潮	五冊	新潮社藏
時談片片（談話筆記）		第十ノ第六
予が立場（同）		第十一ノ第六
森鷗外論		第十三ノ第五
夏目漱石氏と森鷗外氏（生田長江氏）		第十四ノ第一

鷗外漱石兩先生（馬場孤蝶氏）

等が陳列された。

第十五ノ第五



津和野舊邸趾に建てられた記念碑と
遺族代表として參列した森於菟

誕生地記念碑

昭和四年七月九日の第七回忌當日、郷里津和野町舊邸址に、青年團諸君の手によりて誕生地記念碑が建立され、その除幕式が行はれ、森家代表として於菟が參列し、猶舊部下高橋直門氏が約二時間に渉つて小倉時代の事を述べられた。

今年の春津和野の知人西山平次郎氏が上京され、種種話を聞いて見ると、森家の舊邸は大部分改造されたが、現に大石丈造といふ人が住んである家がそれで、記念碑はその隣の空地に建てられたのださうである。

鷗外記念展覽會

昭和八年十一月一日より三日間、臺灣愛書會主催で、臺北市臺灣日日新聞社講堂に於て開催せられ、講演會も行はれ、鷗外書志と題する全著作の表紙を寫眞版とした豪華な目錄が限定三百部刊行された。この展覽會には臺北帝國大學の助教授瀧田貞治氏が上京して出品を蒐集され、於菟もわたくしも所藏品を提供した。書志も瀧田氏が編輯されたものだが、氏は引續き當時手に入らなかつた書籍を搜索され、その訂正增補をして居られる。

附録

森鷗外君の文章に就いて

井上通泰氏談

森君とは四十年近い友人であつたが、お互に多忙であるのと、研究する方面が違ふが爲に、あまり往來することとは無かつた。然し常磐會で毎月一回づつ必ず面會することになつて居たから、森君のしてゐることは大抵知つてゐた。ある時山縣公爵が森君の批評をされたことがあつた。もつとも森君の批評を爲されたことは一度や二度では無く、屢ばされたのであるけれども、或時森君の文章を批評して、「自分の知つて居るものの中で、もつとも文章の上手なのは、死んだ福地櫻癡と森とであらう」と云はれたので、「それは違ひませう、森が聞いても喜びますまい。福地櫻癡は達者には違ひないが、黒人から見れば澤山瑕がある。森は長いものでも短いものでも、軟かいものでも、硬いものでも、文章といふ限りは何でも出來て、しかも瑕といふものが殆無い。それに多數の人のやうに幾度も書直すのならば瑕の無いのに不思議はないが、森は草稾といふものを作りません。全部書き流しでです。その一二例をいふならば、森が美術論か何かを書いてゐる時に行き合せてその草稾を見たが、半紙を長く繼いで障子紙のやうに卷いて置いて、いきなりそれに書いてゐる。無論少しは直した所はあるけれども、全體から

いへば綺麗なもので、それを活版の原稾とするのであつた。又ある文士が自分の紹介で森の處へ行つて、雜誌に出すために獨逸の小說の譯文一篇を作つてくれと賴んだところが、おれは近頃非常に忙がしいので中中約束を果すことが出來んから、いつそ今この場で譯してやるから君が筆記したらよからうといふので、さう願へますなら結構ですと筆を執つて待つてゐると、本棚から一冊の新刊獨逸小說を取出して來て口頭で譯し始めた。それを忠實に筆記して見たところが、宿構のあつたやうな文章で、その男も文筆を執つては人後に落ちぬ男であつたけれども、森の卽席に口頭で譯した文章のうまいのに非常に驚いたと自分に話した。かやうな話は多くあるが、文章を作るに於ては森は眞個の天才で、近い明治年間は無論のこと、昔からでもあれ程の者はあまりありますまい。今後もある一面においては森を超越する人も出ませうが、全體にわたつて森以上に出るものは出ますまい」といつたら公爵も首肯せられた。森田思軒なども飜譯家として名高い人であつたが、その文章を見ると、古い詞も新しい詞も、雅言も俗語も何でもかまはず、原語の意味に相當するものを取入れて、飜譯に努力した痕は十分に認められるが、いかにも飜譯が苦しさうに見えた。森君の飜譯の中で、例へば卽興詩人を一讀しても分るが、少しも努力した痕が見えない。否努力はしたであらうが、その痕の見えないといふことは、森君の頭がいかにウオルトフオルラアトが豐富であつたかといふことが分るであらう。

雜話

○賀古鶴所、幸田露伴、森鷗外と自分と四人づれで萩寺へ往つて、その歸りに鶯坂下の伊香保へ寄つた。森君はわれわれが勉强さして盃に一二杯飮むやうになつた。他の三人はいづれも酒豪揃ひで、一升酒のいける方であつ

たが、その日はへべれけに醉つ拂つて、女中が斷るのもかまはず、輿に乘つて行燈に落書をした。その時へどを吐いたものがあつたので、借浴衣をして歸つたが、二三日おいてそれを返しに往つたら、こんどはどうぞ落書をしてくれ、偉い人に落書をして貰つて有り難いとの事であつた。どんな事を書いたか記憶しないが、或は伊香保に殘つてゐるかも知れない。（本文明治二十三年九月の條參照）。

○森君の本領はやはり文章にあつたらう。一日自分を訪問して文法を敎はらうといふので、二時間ばかり講義したらもう分つたといひ、その後文章に誤謬が無くなつた。

○森君の和歌は凡手では無かつたが、本領ではない。自分が歌論を講義する場合、大口君などが最も明晰でよく領解したが、その解らない場合でも森君は既にこれを會得して敷衍說明してくれた。

○森君が小倉へ赴任する時、自分は姬路まで出迎へ岡山まで同車し、お互に文筆に携はる事から壓迫を蒙ることをこぼし合つた。

○自分が眼科の論文を獨逸の雜誌に發表しようとして、森君に文章の訂正を乞ふた。一覽の後手を入れずに返したから、なぜ文章を直してくれんかといふと、文法の誤が無いから宜からうといふ。文法以上によい文章にしたいのだといふと、文章に手を入れたら切りがないとの返事に、自分は啞然とした。

擱筆の辭

本書を書き上げるに就いて、幼年時代の事は岳父米原綱善翁、祖母の實家木嶋清熊氏、親戚布施登氏、姉小金井喜美子から色色教を受けた。著作に就いては神代種亮氏、瀧田貞治氏、陸軍方面に關しては山田弘倫先生によつて益を受けた事多大である。

附錄にした井上通泰先生の談話は、昭和四年七月十四日國民圖書株式會社で普及版鷗外全集の編纂に從つてゐた時、同社の吉田喜三郎君が先生を訪問して聞書きをしたもので、全集月報にも揭げたが、月報は豫約者にのみ配布したものであるから、一般の人に見て貰う爲に再錄した。行燈の樂書以下の話はその時の雜話と、近頃森銑三氏から先生の談片として聞いた話とを集めたので、發表するのは先生の本意で無いかも知れぬが、ついでに寫して置く事とした。

以上の方方に對して深謝の意を表する。（昭和九、五、三一）

昭和九年七月二日印刷
昭和九年七月七日第一刷刊行

鷗外森林太郎傳

定價 貳圓

著者検印

著者 森 潤 三 郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地
發行者 根 岸 秀 次 郎
東京市芝區濱松町一丁目五番地
印刷者 植 田 庄 助

發行所
東京市神田區錦町
三丁目十一番地
昭和書房
振替東京六一七一六番

1800
3